
魔法少女リリカルなのは 四神伝奇

エドワード・ニューゲート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 四神伝奇

【Nコード】

N0262T

【作者名】

エドワード・ニューゲート

【あらすじ】

JS事件から三年。ある事件の捜査のために、フェイトとテイアナは地球を訪れていた。

だがその途中、日本とは別の場所でロストログアの反応を感知、二人は急ぎよその調査に向かうことに、

そこで彼女たちが目にしたのは、魔法と似て非なる術を使う二人の少女少女と、彼らによって目覚められた、二体の聖獣だった。

作者の処女作です、それを承知していただければ幸いです。
どんな些細なことでもいいので、ご意見、ご感想、ご指摘をどし
どし送ってください。

プロローグ（前書き）

皆さんこんにちは、このサイトで書かれてる多くの小説に触発されて、自分でも書いてみたいくなりました。

内容云々に関しては自覚しておりますが、こんな駄文で楽しんでいただければ幸いです。

急きよ予定を変更し、プロローグに書き直しました。

それではどうぞ

プロローグ

「目覚めの時……」

黒い暗黒の世界。

その中で、どこからともなく声が聞こえてきた。

「運命の時……」

その声が発せられるとともに、一体にある黒い煙のようなものが、うめき声をあげて動く獣のように地を這いずる。

まるで意志を持っているかのようにであり、今にも慟哭をあげそうだった。

「まだか……」

その中に、一人の黒衣をまとった男がいた。

「まだ足りぬか……まあ、この程度の量では、まだほど遠いか」

そう言って男が杖で地面をたたくと、足元に黒い魔法人のようなものが現れる。

「なあに、手ごまは大量にある、焦ることはない。それに……」

男は光に包まれ始めながら、周りの石像を見渡す。

「この方々がお目覚めになれば、このお方の復活も近い、そうなれば、ふふふふ……」

そう言うと、男は光に包まれ、その場から消えてしまった。

「うううううううう……」

そして、まるでそれに呼応するように、再び暗黒の世界に、おぞましいうめき声が聞こえるのだった。

プロローグ（後書き）

予定を変更し、次から第一話にしたいと思います。

第一話 遭遇（前書き）

正式に第一話とします。

おかしいと思うところがあったら、ご指摘お願いします。

第一話 遭遇

「そろそろですね」

「そうだね」

次元航行艦「クラウディア」の艦内

そこで、行先の映像を見ながらフェイトとティアナは確認し合っ
た。

二人は、ここ最近起きているある事件の調査のために、ある次元
世界へ向かっていた。

事の発端は一か月前。

ミッドチルダをはじめとする各次元世界で、人が衣服のみを残し
て消える事件が起きていた。

目撃証言もあり、ミッドチルダのみならず、管理外を含めた次元
世界、果ては管理局員にまで被害が及んでいた。

被害は既にミッドチルダだけで（管理局員除き）10人前後、全
体での被害は100人を超えていた。

その中でも、今二人が向かっている次元世界では、被害はすでに
30人近くに及んでおり、本局は執務官である二人に調査命令を下
したのだ。

そして、その場所とは……

「よりもよってまた地球だなんて」

「ジュエルシード事件に闇の書事件、六課のころのロストログア、

そして今回の事件。言いたくありませんけど、あの世界、何か呪われてるんじゃないんですか？」

「あはは……」

ある意味的を射ているかもしれないティアナの発言に、フェイトは乾いた笑しかできなかった。

「まあ、それはともかく。これ以上被害を増やさないようにするためには、あそこで何か起きてるのか突き止めないと」

「そうですね」

二人が気合を入れ直した、その時、突然アナウンスが聞こえてきた。

『ハラオウン執務官、ランスター執務官。提督がお呼びです。至急、艦長室まで、お越しください』

「クロノが？ 何だろう？」

「とにかく行ってみましょう」

こうして二人は、艦長室に向かっていった。

「えっ？ ロストロギア反応？」

艦長室についた二人は、上司であるクロノから呼び出しの理由を聞かされていた。

それによると、地球でロストロギア反応があったというのだ。

「いや、反応がすごく酷似しているというだけで確証はない。反応も微弱で、危険性はないと思うが、もしかしたらと言うこともある。それに……」

「それに？」

途中で言葉を区切ったクロノは、コンソールを捜査して二人の前にデータを移しながら、続きを話した。

「反応が移動をしているんだ。誰かが持ち歩いているのか、あるいは自力で動いているのか、いずれにしても、このまま放置することはできない」

「確かに……」

「そこで、予定を変更して、二人には反応の調査、ロストロギアだった場合はその確保をしてほしい」

「解りました。それで場所はどこですか？」

「まさか、また海鳴？」

二人の質問に、クロノは首を横に振った。

「いや、今回は海鳴、と言つより日本じゃないんだ」

「日本じゃない？ それじゃあ、どこに？」

「それは……」

しばらくして、二人は目的地転送された。

「ここですか？」

「そうみたいだね」

二人が転送された場所は、中国、山東省だった。

具体的に言えば、二人が贈られた場所はどこかの道のだったが、人影らしきものは見えなかった。

「でも、日本ならまだしも、ここの現地住民の人と会ったらどうす

れば」

「大丈夫だよ、そのためにシャーリーが作ったってこの翻訳用のピアスをつけてるんだから」

今、二人の耳には、ピアスがはめられて（穴はあけておらず、耳たぶにはさんでる感じ）いる。

六課時代にシャーリーが作製したものらしいが、一応正常に機能している。

「さ、そんなことより、早く反応を探そう」

「はい」

二人はデバイスに送られた反応のデータを頼りに、それを追いかけて行った。

「ん？」

反応を追っていると、ティアナが何かを見つけた。

「これは！（フェイトさん！ すぐ来てください！！）」

そしてそれが何かを確認するや、ティアナはフェイトを呼んだ。

「どっしたの？」

「これ……」

そう言っで見せたのは衣服だった。

「これって、まさか……」

「はい、おそらくこの人も」

この時、二人は確信した。

また犠牲者が出てしまったと。

だが、これとは別に、ティアナにはある仮説ができていた。

「フェイトさん」

「何？」

「もしかしたらですけど、私たちが追っている反応と、消滅事件には、何か因果関係があるんじゃないでしょうか？」

「……」

「確証はないですけど、私たちが追っている反応のルートと、この場所が一致するんです。それに、微弱な反応なら、見逃す可能性だってあります。もしかしたら……」

「もしその仮説が本当なら、その反応のもとを抑えれば……急ぐっ、ティアナ」

「はい！」

こうして二人は、反応を追って走り出した。

やがて二人は、大きな遺跡の前に来ていた。
四方を岩山に囲まれ、その中心にそびえたつようにたてられている大きな遺跡だった。

「この先に、例の反応がある」

「しかも、ここに来てから、あまり動いていませんね」

「そうだね、どうして……」

二人が考え始めた直後、遺跡の内部の方で轟音が聞こえてきた。

「何！ いったい何が!？」

「行くよ！ ティアナ！」

「はい！」

フェイトに促され、ティアナも遺跡の内部に入っていく。
そして遺跡の奥深くを進んでいくうちに、二人はその中に漂う感

じに気づく。

「フェイトさん。この感じ」

「うん、魔力だね」

「ってことは、この先にいるのは、魔導師」

「そう考えた方がいいかもね」

なおさら、ティアナの仮説が現実味を帯びてきたと思いながら先を進むと、やがてその先に、三人の人影が見えてきた。

「あれは！」

二人がそれを確認すると同時に、閃光とともに人影のあった場所から爆発が鳴り響いた。

二人はしばらく様子を見ていたが、やがて爆炎が晴れると、人影の正体が明らかになってきた。

「やれやれ、聞き分けのない子供たちだ」

一人は、黒い衣を纏い、杖を持っていた。布に覆われていて顔はわからないが、声の感じから男のようだ。

「そつちもいい加減しつこいっての！！」

もう一人は、腰まで届くくらいの黒髪に翡翠色の瞳をした、歳は15、6位のいかにも気の強そうな少女。

「まったくだよ」

そして最後の一人は、黒い髪と茶色の瞳と言う、少女と同年代くらいの典型的な日本人の顔と見える少年だった。

第一話 遭遇（後書き）

次から本格的に話を作って、決まった日に投稿したいと思います。
ご要望の日があれば、是非申し上げください。

第二話 龍虎覚醒（前書き）

日曜に更新するはずだったが、物語が完成せず、月曜の、しかもこんな遅い時間に投稿することに相成りました。

しかも、本来なら戦闘描写も加えて、次話でちょっと補足説明会的なをやるうと思ってたんですが、かなり急場しのぎで初期構想の前半だけを投稿します。

プロットって大事だなあって思いました。

今回はオリキャラ二名の名前が出ます。

そして、この物語の力ギを握る存在も登場

それではどうぞ。

第二話 龍虎覚醒

「おとなしく、貴様たちが持っている鍵を渡せ！」

「やなこつた!!」

「断る!!」

男の言葉に反論した刹那、二人は一斉に男に襲いかかった。

「あんたもいい加減あきらめろつての!!」

そう言いながら、少女は男に向かって蹴りを連続で繰り出す。だが、黒衣の男はそれを杖を使って難なく捌いていく。

「火招符!!」

すると突然、少年が札を投げつけた。

その札は火球となって、男に襲いかかる。

「ふん!!」

だが、男はそれを杖で難なく消し去った。

「このような子供だまして、私を倒せると思ったのか？」

「思っていないよ。でもね……」

「隙を作るには十分!！」

その刹那、男の腹に、少女の鋭い蹴りがさく裂した。

「ぐっ!」

男は吹っ飛ばされたが、宙返りしながら着地する。

「いい加減あきらめなさいよ。何度言われたって、渡さない言ったら渡さないわよ!」

「それに、ここまで追ってきて解ってるでしょう。僕たちはあなたに負けません!」

そう言つと、少年は懐から一枚の札を取出し、それを投げつける。

「閃!」

そしてそう唱えると、札はまばゆい光を放って爆発した。

「くっ!!!」

「今だ!」

「じゃあね、ストーカーさん!」

男が光で怯んでる隙に、二人は遺跡の奥へ向かっていった。しばらくして光が収まったとき、男の目の前には誰もいなかった。

「おのれ、あいつらが目覚めたら、あのお方の復活に支障が出る。」

その前に、何としても鍵を奪い、破壊せねば……」

そう言うと、男の周りに符の様なものが現れ、それが男を包みこみ、それが晴れると、男の姿はなくなっていた。

「……一体、何だったんでしょう?」

「さあ……」

陰でその様子を見ていたティアナとフェイトは、先ほどの光景に疑問を呈した。

魔法とは明らかに違った術を男と少年が使っていたのだ、魔法に携わる者として、困惑するなという方が可笑しいだろう。

「でも、どうして傍観してたんですか?」

しかし、さっきの様子とは別に、ティアナはフェイトの動きに疑問を抱いていた。

理由は術式がどうあれ、先ほどの三人が、何らかの関係を持っている可能性は大いにあり得るのだ。

「どちらが私たちにとって敵なのか、それを見極めたかったから」

ティアナの疑問に、フェイトは答え始める。

「さっきの様子を見て、ティアナにはどっちが敵に見えた？」

「敵……ですか？」

フェイトに聞かれ、少し考察した後、ティアナは答えた。

「どう考えても、あの黒衣を纏った男ですね。さっきの二人から、何かを奪おうとしていましたし、何か目的があるようでしたし」

「私も、そうだと思う」

ティアナの答えに、フェイトも頷いた。

「さっきの様子を見ながら、バルディッシュで調べてただけけど。例のロストロギア反応、さっきの女の子から反応してたの」

「じゃあ、あいつは」

「恐らく、あの子の持つてるロストロギアが目当てだと思う」

それを聞いて、ティアナには、何が言いたいのかはっきりした。

「それに、かなり重要物みたいだから、ここであきらめるとも思えない」

「そうですね。となると、先回りしているかもしれませんね」

「或いは、何か別の手を用意しているか……」

考えられるとすれば前者が一番可能性として大きいですが、先ほどの先頭の様子を見て後者も捨てがたい。

「とはいえ、まずはさっきの二人と合流してから、ですかね」

「そうだね、先を急ごう」

こうして、二人が奥へ進もうとした時だった……

突然、大きな振動が、遺跡内を襲ったのだ。

「きゃ！？」

「何！？」

直後、二人の頭上から天井が崩れ落ちてきたが、即座に展開したプロテクションで難を逃れることができた。

そして、空いた天井から二人が外を見上げると。

「嘘……」

「何……あれ……」

そこには、頭部に角をはやした巨人がいたのだった。

「どうなってんのよ!!」

「知らないよ!!」

一方、遺跡の最奥部に到着していた二人は危機に瀕していた。最奥部に到着した直後、地震が起きたかと思ったら、突然現れたあの巨人が天井を破壊したのだ。

二人はその瓦礫を必死にかわし、どうにかなったと思ったら、今度は巨人が攻撃を仕掛けてきたのだ。

「最奥部に来たのに何の反応もないし、本当にこれであってるの？」

「知らないわよ！ 私だって言い伝えレベルでしか知らないんだから!!」

巨人の攻撃を避けながら、二人は口論などしていた。

「って言うか、こういう奴を倒すのがあなたの仕事でしょ。何とかしてよ龍清!!」

「無茶言わないでよ西麗。あんな大きいのもうやって倒せっていうの!!」

二人で口論してる間も、怪物は二人を狙ってくる。

そして、その剛腕が再び二人の居たところに振り下ろされる。

「「のわー！ー！！！」」

二人は奇声を上げながらその攻撃から必死に逃げまわる。
そしてその最中に、異変はおきた。

「あつ！ 宝玉が！」

突如、西麗の懐から、青く光る球と、白く光る球が懐からひとりでに現れ、消えてしまったのだ。

その直後、地面が大きく揺れ始めたのだ。

怪物が揺らしてるのかと思いい振り返ってみたが、そんな風には見えなかった。

「ちょ！ どうなってるの！！！」

「こつちが聞きたいよ！！！」

二人がこんな状況でも口論をしていると、遺跡が大きく崩れ、二人の頭上に落ちてきた。

「あわわ！！！」

「ちょ、ちょっと待って

！！！」

二人の叫びも空しく、瓦礫が二人の頭上に降り注ぐ。

「「……………あれ？」」

やがて、二人は何の感触も来ないことに疑問を抱き、間の抜けた声を出す。

「僕たち、生きてる。何で？」

「さあ？」

あれだけの瓦礫が落ちてきたのだ、普通に考えれば、自分たちは下敷きになってるはずだった。

だが、今自分たちはこうして生きている。

二人が状況確認の為、顔を上げてみると。

「何とか間に合いましたね」

「そうだね」

二人の目の前には、プロテクションを張りながら二人を守るフェイトとティアナがいた。

「あ、貴方達は？」

「自己紹介は後。その前にいくつか聞きたいことがあるんだけど、

いいかしら？」

「良いけど、何？」

即座に反応した西麗が、ティアナの質問に答える。

「まず、あんた達はどうしてここに？」

「まあ、ちょっと込み入った事情があつてね。それにここ、元は私の家みたいなところだし」

「あんまり大つぴらに話せないんですが、別に盗掘の為に来たわけじゃありませんから」

「誰もそんなこと聞いてないわよ」

変な誤解をされたと思ったのか、龍清の言ってきたことに、やや呆れ気味でティアナは返した。

「まあ、あんまり深く聞かないことにするよ。それで、次が一番答えてほしいことなんだけど」

人に言いにくいことだと察したフェイトは、そう言つと崩れた天井の方を見上げながら言った。

「あれ、何なの？」

「「えっ？」」

そう言つて二人がフェイトの指差した方向を見てみると……

巨大な怪物と対峙する様に向かい合う、空を飛ぶ青い龍と、柱の
一本に立つ白い虎がいた。

「何アレ

!?!」

まったく状況が呑み込めていない二人の絶叫が響いたという。

第二話 龍虎覚醒（後書き）

元ネタは一発ではねることでしょう、原作の方にも書きましたし。

次はまともな戦闘描写を書こうと思います。

何かアドバースがあれば、是非ください。

第三話 降り立つ龍神 駆け抜ける獣神

「何、アレ？」

「龍と、虎？」

突然の事態に、龍清も西麗も困惑するしかなかった。

彼らの視線の先には、破壊の限りを尽くしていた巨人と、どこからともなく現れた、青い龍と白い虎が睨み合っていたのだ。

しかも、両者の感じを見る限り、かなりお互いを敵視しているようであった。

「なんであんなのがここにいるの？ っていうか、何時からいたの？」

「知らないの？」

「はい、西麗はともかく、僕は何も」

フエイトの質問に、龍清は素直に答えた。

そしてその言葉とともに、三人の視線は西麗に向けられる。

「あたしだって、言い伝え程度でしか知らないから、あんなのがあ
るなんて聞いてないわよ」

「前もそうだったよね」

「そ、でもね……」

ここで、西麗は、二匹を見ながら言った。

「あれってもしかして、四神かな？」

「四神？」

声を合わせていうフェイトとティアナに、龍清が説明した。

「四神と言うのは、東西南北の四つを守護する四匹の聖獣の事です。東に青龍と言う龍、西に白虎と言う虎、南に朱雀と言う鳥、北に玄武と言う蛇と亀がいるんです」

「へー」

龍清の説明に、二人は感心していた。

「でもそれって、実在するの？」

「いえ、実在はしません、思想の話ですから……と言いたいところですが」

「いるじゃん。目の前に」

そう言って西麗の指差す方向では、巨人と二匹が争っていた。白虎が巨人に向かって襲い掛かり、その鋭い爪を振り下ろす。だが、巨人はその攻撃をものともしない様子で白虎を投げ飛ばした。

地面にたたきつけられるも、白虎はなおも怪物に向かっていく。

「……あれ？」

するとここで、フェイトが何かに気付いた。

「フェイトさん、気づきましたか？」

「ティアナも？」

「はい」

ティアナも何かに気付いた。

「あの二匹、共闘していない」

「えっ？」

フェイトの答えに、龍清は驚いた声を上げる。

「よく見て、さっきからあれを攻撃してるのは虎の方だけ、あの青い龍は何もしてないでしょ？」

「……本当だ」

よく見てみると、龍は空を飛びながら、虎と巨人の戦いを見ているだけで、何かをするそぶりはなかった。

「どうして？ あいつが敵だっていうなら、二匹でまとめてかかってやればいいじゃない」

「何か理由があるのかな？」

四人が話し合ってる間も、二匹と巨人の戦いを続けていた。もつとも、突っ込む白虎に、巨人がそれを投げ返すというワンサイドゲームになっている。

そして今、再び襲いかかった白虎をとらえた。そしてそれを回転を加えながら投げ飛ばした。

しかも、投げ飛ばした方向には青龍がおり、二匹を空中でぶつかった後、地面に墜落した。

「ああもう！ 見ちゃいらんない！！」

するとここで、しびれを切らしたように叫びだした西麗が飛び出していった、

「ちょっとあなた！ 何する気！」

「決まってるでしょ！ あの化け物をブツ飛ばすの！ これ以上人が先祖代々守ってきた土地を踏み荒らされてたまるかっての！！」

「む、無茶だよ！！」

「無茶でもなんでも、やんなきゃなんないでしょうが！！」

「ちょっと、西麗！」

制止を振り切る西麗を龍清が尚も止めようとした。

その時だった……

力を望むか？

「「……えっ？」」

「どうしたの？」

突然、二人は疑問の声を上げた一人に、フェイトが何事かと聞いてきた。

「今、声が聞こえた気が……」

「声？ 私たち何も言ってないけど？」

「でも、確かに……」

汝等、我等の力を受け入れるか？

「ま、また？」

「何、何なの？」

汝等、我らの力を受け入れる器たる素質あり。

なれど、我らを受け入れるも拒むも、汝等次第。

さあ、選ぶ。我らを受け入れるか？ それとも拒むか？

「……………」

突然聞こえてきた声に、二人はしばらく黙り込む。

やがて、その沈黙を破ったのは龍清だった。

「もしそれで、この状況を何とかできるなら」

「……やってやるっじゃん」

次に、西麗がその言葉に続く。

「龍清！ 答えはわかっているわよね！」

「解ってるよ、西麗」

二人は同時に頷き、そして叫ぶ。

「僕は（私は）、その力を望もう！」

そして二人が叫ぶと同時に、先ほどまで倒れていた二匹が起き上がり、ともに雄たけびをあげた。

「グオオオオオオオオオオオ！！」

「ガアアアアアアアアアア！！」

力を望むなら唱えよ、我らの名を

「汝、清流に住まうもの、

日出づる地を守り、天へと昇る、

始まりの時と、成長を司る蒼き神獣、

汝の名は、無敵青龍！！」

「汝、大道を駆けるもの、

日没する地を守り、風と共に去る、

実りの時と、堅固を司る白き神獣、

汝の名は、最強白虎！！」

「「必神火帝、天魔降伏！！」」

掛け声を言い終わると、二匹は眩い光となって、二人を包み込んだ。

「な、何!？」

「何なの!？」

突然の出来事に、フェイトもティアナもただ驚くばかり。

そして光が収まると、その先には、先ほどとは違う格好をした二人がいた。

「……………えっ？」

「……………はい？」

「「何コレ……………!!!!!!」」

自分の姿を確認するなり、二人は同時に叫んだ。

龍清は全身を青い鎧を装着した、胸部に龍の頭のようなものがあり、背中には先ほどの龍の翼が生えていた。

一方西麗も似たような姿をしているが、胸部が虎の頭をしており、白と黒の虎模様をしており、しっぽが生えていた。

「何コレ？ どうなってるの？」

「うわあ、しっぽが生えちゃってるよ……」

二人があれこれ困惑していると。

「……え？」

頭上から、巨人の腕が二人に向かって振り下ろされようとしていた。

「わああああ！?!?!」

二人が今まさにその腕につぶされようとしたとき……

「ライジングスマッシャー！」

「ファントムブレイザー！」

フェイトとティアナの砲撃が、見事に巨人の足元に命中、バランスを崩した巨人の腕は、二人のすぐ近くに振り下ろされた。

「大丈夫？」

「あっ、はい」

「ところで、その格好は一体」

「解らないけど、なんかいける気がする！」

四人が会話してる間に、巨人が起き始めた。

「さて、今度はこっちの番よ！ 龍清！」

「解ってる！」

そう言って龍清が印を組み始めると、周囲に黄色い符のようなものが現れた。

「九天応元雷声普化天尊の名のもとに命ず。蒼雷よ、敵を貫け。急急如律令！」

呪文を唱えながら符を投げると、巨人に向かって上空から青白い雷撃が降り注いだ。

「やるー、私も負けてられないね」

雷撃を受けて倒れこんだ巨人に向かって、西麗は一気に駆け出した。

「虎王神速槍！」

西麗は手からなぎなたのような形をした槍を呼び出し、それを持つと、巨人に向かって連続で突きを繰り返した。

「いくらあんたが巨体でタフでも、これだけ連続で喰らったらどうよー!」

次々と繰り出される突きに、加えて先ほどの雷撃が聞いているらしく、巨人のところどころに傷ができて始めた。

「止めだ!」

そういうと、龍清のしっぽの先端にあった宝珠が、彼の手元にやってくる。

「龍王破山剣!」

そしてそれは、その叫びと共に、一本の剣となっていった。

「これで、とどめ――――!」

一気に敵の頭上へ舞い上がると、そのまま袈斬りの要領で剣を振り下ろした。

巨人はその太刀を受け、真っ二つになって消滅していった。

「何ということだ、よもや覚醒を許してしまうとは……しかも、妖魔を一体倒されてしまった」

一方、どこからともなく姿を消した黒衣の男は、遠くからその様子を見ていた。

「ふん、まあいい。奴はしょせん即席で作った名もなきもの。まだ残りの二匹が目覚めたわけではないしな」

男はそういうと、不敵な笑みを浮かべた。

「それに、あの方々が目覚めになれば、我らの大願を成就させることはできる。いかに奴らとて、止めることはできまい」

そういうと、男の周りを黒い呪符が渦巻き始めた。

「今回はここまでにしておこう。また相見えよう、龍と虎を継ぐ者
「よ」

その言葉と共に、男は姿を消してしまった。

「はあ、はあ……」

「つ、疲れたー」

巨人との戦闘を終えた二人は、そのままへたり込んでしまった。それと同時に、二人の格好は元に戻った。

「それにしても、何だったんだろう？」

「さあね。でも、これでよかったと思うよ、私は」

「僕も」

お互い、多少の困惑はあったが、自分の選んだことに後悔はしていない様子だった。

「二人とも、ちょっといいかな？」

するとここで、フェイトが二人に話しかけてきた。

「あつ、何ですか？」

「私たち、ちょっと聞きたいことがあってね、一緒に来てもらえな
いかしら？」

「聞きたいことって？ さっきの事ならパスね、私たちもわけわか
んないんだから」

西麗は手を振りながら答えた。

実際、先ほどの事は勢いに任せた点があり、冷静になってみれば

よくわからないことではいっぱいだっただ。

「ううん、違うよ。私たちが聞きたいのは、別の事」

「別の事？」

「そ、ちゃんと話してあげるから、ついてきてくれるかな？ 悪いようにはしないから」

誘ってくるフェイトに、二人は顔を見合わせながら相談し始める。

「龍清、どうする？」

「そうだね。でも、助けてもらったりしたし、この人たち、悪い人じゃないと思うんだ」

「ふーん、龍清がそう言うなら、大丈夫かな」

「いいの？」

「あんたって意外と人を見る目があるからね、あんたがそう言うなら、大丈夫でしょ」

「あはは、ありがとう」

二人はしばらく笑いあった後、フェイトとティアナの方を向く。

「取り敢えず、僕たちで話せることは話します」

「解った、じゃあ、ついてきてくれる」

「っていつか、立てる？」

「あたしは何とか」

「僕も大丈夫……うわっ」

西麗は一寸ふらつきながらも立てたが、龍清は立とうとしてそのまま尻餅をついてしまった。

「なんか、力が入らない」

「あなた、戦闘の時はあんなにかっこよかったのに、ホント締まらないわね」

「うう……」

この後、龍清は西麗に肩を貸してもらってようやく立ち上がり、フェイトとティアナに連れられて、クラウディアへと向かうこととなった。

第三話 降り立つ龍神 駆け抜ける獣神（後書き）

二人の格好については、龍虎王と虎龍王を連想していただければ結構です。

あの二匹はどこへ行ったかと言うと、それは次回解ります。

第四話 自己紹介（前書き）

今回は自己紹介と簡単な説明、そして二匹の行方についてです。

なかなか感想が来ませんのですごく不安です。

ご感想、ご指摘どうか私に下さい！！

第四話 自己紹介

「以上が、現地で起こったことです」

「」苦勞」

クラウディアに戻ってきた二人は、目的地で起こった出来事や、龍清と西麗から聞いた話などをクロノに報告していた。

「そしてこれが、反応の正体だった宝珠です」

そう言っただけでティアナはデスクの上に赤と黒の宝珠を置いた。

これの提供を求めた際、無論西麗は渋っていたが、龍清の説得と後で返すという条件付きであっさり納得し、渡してくれたのだ。

「残りの二つは、話によれば遺跡最奥部の床の下に消えて行ってしまったそうです」

「なるほど。しかし、聞けば聞くほど不可解だな」

二人の報告を大方聞き終えたクロノは頭を抱え込む。

ただでさえ不可解な事件が頻発しているうえに、つい先ほど起こった出来事の数々。

当事者では無いにしろ、報告を聞いているだけでも理解しがたい事ばかりだったのだ。

「それで、重要参考人の二人は？」

「今別室で休ませています。どうしますか？」

「勿論、あつて実際に話を聞こう」

「じゃあ私たちも、これを返さなきゃいけないし」

こうして三人は、直接会って話を聞くため、艦長室を後にした。

そして三人は、二人がいる部屋の前に来ていた。

「二人とも、ちょっといいかな？ 聞きたいことが……」

そこで、フェイトの言葉が止まる。

「フェイト？」

「どうしたんですか？」

途中で固まったフェイトに疑問を抱き、クロノとティアアナも部屋をのぞいてみると。

「あはは！ ちょっと、やめてよー！」

「く、くすぐつたいよ！」

そこには、小さい虎と龍とじゃれあう、二人の姿があった。

「ええつと、二人とも？」

「「あつ」「

ここでようやく再起動したフェイトの掛け声に、二人も気づいた。もつとも、二人はいまだに二匹とじゃれてる最中だが。

「その、聞きたいことがあるんだけど、まずその二匹は何時からここに？」

「えつとですね、お二人が出て行ったあと、僕たちの目の目に丸い光が下りてきて」

「それが収まったと思ったら、この二匹がいたってわけ」

二人は二匹が現れた経緯をかいつまんで話した。

「それに、触れてみて気づいたんですが、この二匹、あの青龍と白虎です」

「「えつ！」「

「そんなに驚かなくても……わっ！」

驚く二人にあきれていると、青龍が龍清の顔を再び舐めはじめ。

「ちょっと、くすぐったいってば。はは」

「んんっ！……君たち、そろそろいいか？」

このままではいつまでたっても本題に入れないため、クロノが咳払いをしてその場を仕切りなおす。

ちなみに白虎は西麗に抱きかかえられ、青龍は龍清の頭に居座った。

「まずは自己紹介からだな。僕はクロノ・ハラウン。このクラウディアの艦長をしている」

「つまり、この船で一番偉い人ってことですね」

「まあ、そうなるな」

次にフェイトが自己紹介を始めた。

「私はフェイト、フェイト・T・ハラウンっていうの」

「ハラウン？ ってことは」

「そ、クロノの妹だよ」

それを聞いて、西麗は驚きを隠せない。

「うっそー！ 全然似てない！！」

「ちょー！ 西麗ー！！」

正直に言う西麗に龍清は不味いと思い、注意する。

「ああ、気にしなくていい。似てないのは当然だからな」

「そうなんですか？」

「うん」

しかし、二人はさほど気にしていない様子だったので、ほっと胸をなでおろす。

「で、あたしはティアナ・ランスター。ティアナでいいわよ」

最後にティアナが自己紹介をして、次は二人の番になる。

「僕は、東郷龍清と言います。それで、こっちは」

「秋西麗チヨウサイよ、日本風に言えば、「しゅう せいれい」ってなるけど」

二人も軽く自己紹介を終える。

「さて、それじゃあ、僕たちの質問に正直に答えてくれるか？」

「構いませんけど、その前にこちらも、いくつか聞きたいことがあるんですよ」

「取り敢えず、あなた達の事と目的を知りたいの」

「そうだな、僕たちは……」

二人はクロノからいろいろなことを聞いた。

魔法の事、時空管理局の事、ロストログアの事、そして自分たちがここに来た理由である、消滅事件の事などを聞いた。

当然二人は驚きを隠せなかった。

「そうだったんですか。それにしても、魔法なんてものが存在するんですね」

「君の使ってたものも魔法じゃないの？ 魔力を感じてたし」

龍清の言葉に、フェイトは疑問を呈する。

「違いますよ？ 私が使ってたのは陰陽術です」

「」「陰陽術？」「」

「えーっとですね、占いで天気や事象を当てたり、悪霊を成仏させたりする術です」

「でも、あんたの場合似たようなものだけだね」

西麗に言われると、龍清も押し黙ってしまふ。

「まあ、僕のは先祖伝来の術で、明らかに普通の陰陽術とは違ってますわかってるけど。その言い方はどうかと思うよ」

「事実なんだし、しょうがないでしょ」

「はあ、君は本当に何でも直球で言うよね」

もはや反論する余地もない龍清は、呆れるように言った。

「あ、そうだ。はい、これ」

フェイトは西麗に宝珠を返した。

「あつ、どうも」

「ところでこれ、一体なんなの？」

「私もよくわかってないんですよ。私の一族がああ遺跡と共に先祖代々守ってきた秘宝って事位しか」

「反応はロストロギアそのものだが、危険性は低いようだしな」

「あのお、その事なんですけど」

するとここで、龍清が口をはさんだ。

「その宝珠、【五行^{ごぎょう}霊^{れい}】^井と言うもので、四神の魂を宿した珠みたいななんです」

「ちょ！？ なんであんたが知ってるの！」

「この子が教えてくれたんだ」

そう言って龍清は、上の青龍の頭を撫でる。

「って、君、その子と話せるの?」

「話せるというか、この子が僕に語りかけてるんですよ。こっつ、心に念じるだけで、気持ちを伝える術だそうぞ」

「念話みたいなものね」

龍清の問いに、ティアナが答える。

「念話? それも魔法?」

「そうよ、念じるだけで相手に伝えるっていつものよ」

「ふーん……………」

(こっつ?)

「えっ!」

突然聞こえてきた念話に、ティアナが驚く。

(あつ、こっつなんだ。やつほー、龍清、聞こえてる?)

(えっ? う、うん)

(そちらのお二人さんは?)

(き、聞こえるよ)

(問題ない)

二人は然程驚きもせず、二人も答える。

「まあ、念話ぐらいいは誰でもできることだしな」

「そうだね」

「でもなんでいきなり」

「こいつが教えてくれた」

そう言っつて西麗も抱きかかえてる白虎の喉を撫でる。

「んんっ、大分脱線してしまっつたが、今度はこちらの質問に答えてもらっつぞ」

「はい」

「オツケー」

「まず、二人はどうしてあそこにいたの？」

最初に質問したのはフェイトだった。

「あの男が、これをしつこく狙つててね、あたしはいったん日本まで逃げてきてたんだけど、私が持つてたこの珠の一つが、龍清に反応して光りだしたの」

「それで、西麗の言い伝えにならつて、あの遺跡へ向かつたんです」

「言い伝えって?」

「『世を覆う暗雲、目覚めるとき、青と白の御霊、赤と黒の御霊、輝きを灯しし者、御霊と共に、神の眠れる地へ誘われん』っていうの」

「それで、僕たちはあそこに行ったというわけです」

「なるほどね。じゃあ、あの男は何なの?」

次の質問はティアナからだった。

「さあ? あいつに関しては本当にわからないの。すごくしつこいつて事位しか」

「まあ、明らかに五行霊を狙ってたみたいだけど」

「確かに、それ目当てだったみたいだし」

「それと、これ多分、貴方達が求めているものだと思いますけど」

龍清が手を上げながら言ってきた。

「あの男、人を消したんですよ」

「「「!」」」

その言葉に、三人が驚愕の表情を見せる。

「あれは確か、僕と西麗が、チンピラに絡まれてる時でしたね。突然あいつが現れて、何か呪文を唱えたんです」

「そしたら、チンピラどもが服だけ残して消えちゃったの、何なのかわからなかったけど」

「でもこれって、貴方達の言う消滅事件と、あの男が関係してるってことですよね」

「関係してるどころか、現行犯だろうな」

クロノの言葉に、フェイトとティアナも首を振る。

「そうですか、お役にたててうれしいです」

「ところでさ、あたしたちってこのままどうなるの？ まさか、このままさようならってわけじゃないよね」

恐ろしく鋭いことを言うてくる西麗に、三人は顔を思わず背ける。

「……わっかかりやすー」

その反応に呆れる西麗、龍清も苦笑いしかできない。

「すまない、本当なら僕たちだけで解決したいんだが、何分情報が少なくてね」

「素直に言ったらどう？ 『どうか私たちに協力してください』ってね」

「でも……」

尚も洩るフエイトに、龍清が言ってきた。

「そんな話を聞いて、僕たちも知らんふりはできませんし、あの男が関わってるなら、放っておけません」

「あんた達と一緒にいれば、あいつもこの宝珠に手出ししにくくなると思うし」

「本当にいいの？」

「ええ。寧ろ、協力させてください」

その真剣なまなざしを見て、三人は押し黙る。しばらくして、沈黙を破ったのはクロノだった。

「君たちが決めたのなら、何も言うことはない」

「本当ですか！」

「ああ」

こうして二人は協力することになったが、ここで西麗がとんでもないことを言い出した。

「ところでさ、魔導師に簡単になれる方法とかない？」

『えっ！？』

「し、西麗！ それ本気で言ってるの！！」

驚きのあまり、龍清が聞く。

「いや、だってさ、このまま民間協力者ってことだと、いろいろあれだと思っし。それに、この子たちの事も、いろいろ調べてもらったりする必要があるんじゃないかなあって思って」

あっさりと言っているが、言ってることにあながち間違いはない。

「まあ、無いことはないが」

「そうなんですか！」

「うん、嘱託魔導師っていうのになる試験があって、それに合格すれば、嘱託魔導師に認定されるんだよ。私もそうだったし」

「へー」

フェイトの説明に、西麗が感心したように呟く。

「ねえクロノ、確か嘱託試験がもうすぐだったよね」

「ああ、そうだが」

「じゃあこの二人を試験で合格できるようにするね」

「「へ？」」

「あ、ああ」

妙に引き攣った返事をするクロノに、龍清と西麗は何となく嫌な予感がした。

「あのお、一応聞きますけど、筆記試験とか」

「あるわよ」

西麗の質問に、ティアナが答える。

「あ、ごめん、やっぱり私、民間協力者ってことで……」

ガシッ!!

「逃がさないわよ」

「じゃあ、取り敢えず試験について説明するから、二人とも私の部屋に来てくれる？」

「解りました」

「ちょ、放して!」

「あんたが言い出したんでしょ? 大丈夫、しっかり教えてあげるから」

「放してええええ!!!」

こうして二人は部屋を後にした(一名連行)。

「やれやれ、まるで13年前の再来だな」

艦長室に戻った後、ふうとため息をつきながら、クロノはそう呟いた。

暫くして、クロノはデスクのコンソールを叩き、ある人物に通信を繋いだ。

「あら、クロノ」

「母さん」

その相手とは、彼とフェイトの母、リンディ・ハラウン統括官だった。

「例の件は？」

「ええ、順調よ。事態が事態だし、地上本部もあっさり了承してくれたわ」

「地上本部も！？ 助かると言えばそうだが、一体どうして……」

「もし失敗すれば、責任を押し付ける。つまりそついうことよ」

その言葉に、クロノも嫌悪の混じった表情をする。

「でもまあ、あの子たちなら大丈夫でしょう。それより、そつちはどう？」

「ああ、現地で協力者を見つけてね、今囑託試験に向けて、フエイトとティアナが勉強させているよ」

「あら、それじゃあ、その子達も入るのかしら？」

「かもな。二人は自分から協力させてくれって志願して来たんだ」

「そつ」

「まるで、13年前みたいだね」

呆れ気味に言っているが、その顔はどこか懐かしそうだった。

「何はともあれ、二人にこのことは？」

「勿論伝えたわ、二人にはついてから教えようかしら」

「そつだな」

その後、二人は他愛のない会話の後通信を切った。

そしてディスプレイには、二人の会話していた件についての言葉が浮かんでいた。

消滅事件担当特別部隊という言葉が。

第四話 自己紹介（後書き）

ちよつと伏線っぽく張ってみましたが、全然だめですね。
もうこの時点で何のことかわかってる人も多いかと思えます。や
っぱり精進が足りませんね。

ご意見、ご感想、ご指摘、お待ちしております。

キャラ紹介

東郷龍清 (とうごう りゅうせい)

性別：男

年齢：18歳

髪：茶髪の散切り頭

目：黒

好きなもの：和菓子、桜、晴れの日、読書

嫌いなもの：自分勝手な人、仲間や友達を傷つける人

特技：陰陽術及びそれを用いた占いや天気予報、和菓子作り

性格

礼儀正しく謙虚。

自己主張がなく引つ込み思案と思われがちだが、自分の意見はしっかり通す。

正義感も強く、曲がったことが大嫌い。

備考

日本の陰陽師の家系で、彼は歴代の中で強い力の持ち主。

戦闘では主に護符を用いた陰陽術を使用するが、剣道をやった経

験もあり、近接戦闘もこなすオールラウンダー。

秋西麗 (チヨウ シーリー/しゅう せいれい)

性別：女

年齢：18歳

髪：黒髪の長髪、腰まで届く長さでポニーテールにしてる。

目：翡翠色

好きなもの：涼しい風、体を動かすこと

嫌いなもの：しつこい奴、はっきりしない事、根性が捻くれてる奴

特技：カンフー、太極拳、料理（中華限定）、説教（爺様直伝、最長10時間）

性格

勝ち気で大雑把。

思ったことを口に出すが、裏表がなく、非常に親しみやすい。

一方で責任感が人一倍強く、時に抱え込むこともある。スピードを生かした格闘戦が得意で、素手でも結構強い。

備考

山東省の遺跡を守る一族の末裔。

一族に伝わる言い伝え（伝承）を知っている。

四神

青龍

東方を守護する青い龍、主人は東郷龍清、通称「無敵青龍」
性格は大人しく慎重で物事を見極めてから動こうとする。
ただし、逆鱗に触れると怒りだし、暫くの間暴れ回る。
結構人懐っこいが、人の心に敏感で、悪意や下心があると容赦なく
噛付いてくる。
主人である龍清の頭の上がお気に入りですそこに乗る。

白虎

西方を守護する白い虎、主人は秋西麗。通称「最強白虎」
猪突猛進な性格で後先考えず突っ込むせつかちな性分。
基本的に西麗以外に懐かない。
西麗に抱きかかえられることが多い（自身も気に入ってる）。

キャラ紹介（後書き）

まずこんなところでしょうか。

追加設定は話の区切り区切りで投稿させていただきます。

第五話 囑託試験勉強風景

「あうううううう」

「ほら、申してる暇があったらさっさと解きなさい」

本局へ帰還中のクラウディア艦内のとある一室では、龍清と西麗が囑託試験のための勉強を受けていた。

無論、先生はフェイトとティアナの執務官コンビである。

「そんなこと言ったって、あたし勉強苦手なんだもん。ましてこんな難しいもんを解けて、鬼ですか？ あんたは鬼ですか？」

「鬼でもいいわよ。悪口いう訳じゃないけど、あたしの教官は魔王って呼ばれてたし……」

そう言った矢先、ティアナの顔が真っ青になっていった。

「どうしたの？」

「何でもないわ。うん、何でもない」

冷や汗を掻きながら顔を背ける。
何とも分かりやすい反応である。

「ってそんなことより、なんだかんだ言っただけじゃあ。言い訳してる暇があったらさっさと続けなさい！」

「マジで鬼……！！！」

ティアナの宣告に、西麗はマジ泣きしながら叫んだ。
ちなみにもう一方はどうかと言つと……

「解けました」

「どれどれ……全部あたって。凄いね」

「それほどでもありませんよ。コツをつかめば簡単なものですよ」

「コツって……」

龍清の思わぬ学力にフェイトが驚かされていた。

「終わった……!」

「ふう」

「「お疲れ様」」

勉強開始から2時間、二人は過去問をすべて終え、一息ついてい

た。

「そう言えば、あの二匹はどうなるんでしょうか？」

ここで龍清はふと疑問を二人に投げかけた。

二匹とは無論、青龍と白虎の事である。

今二匹は、デバイスルームで調べられているのだ。

「大丈夫、調べるだけだから、悪いようにはしないよ。それに、私の補佐は頼りになるから」

心配ないとばかりにフェイトは龍清に言う。

「あの二匹、分類的にはユニゾンデバイスですかね？」

「多分ね」

「「ユニゾンデバイス？」」

龍清と西麗は同時にはもってくる。

「ユニゾンデバイスっていうのはね、所持者と融合^{ユニゾン}することで、能力を向上させるデバイスの事だよ」

「確かデバイスって、貴方達が魔法を使うためのものなんですよね」

「そ、でも一口にデバイスって言ってもいろいろ種類があるのよ。ユニゾンデバイスはその一つ、いや、一人なの」

「私たちの知り合いにも、ユニゾンデバイスがいるの、二人も」

「「へー」」

フェイトとティアナの説明に、二人はただただ感心する。

「でもフェイトさん。動物型のユニゾンデバイスって聞いたことあります？」

「うーん……でも、現に私たちは見ちゃったわけだしね、聞いたこととはないけど、今さら否定はできないよ」

「それはそうですけど……」

「フェイトさー……ん！！」

突然、二人のいる部屋に通信が入った。

画面の先には、メガネをかけた女性が慌てた様子でフェイトを呼んでいた。

「シャーリー、どうしたの？」

「い、今すぐデバイスルームに来てください！ あの二匹が……」

そこで通信が途切れた。

「シャーリー！ シャーリー！！」

「フェイトさん。どうしたんですか？」

「解らないけど、デバイスルームで問題が起きたみたい。行ってみ

「ようー」

「はい！」

「じゃあ、僕たちも」

「オツケー！」

こうして四人は部屋を駆け出し、デバイスルームへ向かった。

「シャーリー！」

「いったい何が……」

デバイスルームの扉が開き、四人が勢いよく入ってきた途端……

「キューー……！」

「ニャー……！」

「うわっ!?!」

「おっと!」

突然、二匹が龍清と西麗の胸に収まった。

「どうしたの?」

「なんか嫌なことでもされた?」

「はあ、はあ……あつ、フェイトさん」

「えーっと、シャーリー、一体どうしたの?」

息切れしてる自分の副官に、フェイトは何があったのかを聞く。

「いやですね、二匹の解析を進めてたんですけど、突然龍の方が暴れだして、ほどなくして虎も台から脱走して、追いかっこしてたんです」

「は、はあ……」

まさか二匹が逃げ出したのか、或いはもっとやばい事態を想定していただけに、少し拍子抜けしてしまうフェイト。

「あの、フェイトさん。こちらは?」

そして龍清は目の前の女性の事を聞いてくる(青龍は、頭に乘っ
ている)

「あつ、この子は私の補佐をしている」

「シヤリオ・フィニーノです。シャーリーって呼んでね」

「あつ、どうも、東郷龍清と言います」

「あたしは秋西麗。よろしく！」

三人はお互いに自己紹介を終える。

「それで、どうして暴れだしたの？」

「うんうん……シャーリーさん、ちょっといいですか？」

「何？」

「あの、こういういい方失礼だと思いますけど、何かよからぬことを思ったりしませんでしたか？」

「どづい意味よ？」

龍清の質問に、ティアナが疑問に思いきいてみる。

「この子、人の心に敏感なんですよ。とくに下心とか悪意とか、そついつのに反応して警戒するんです」

「シャーリー、心当たりある」

「ええ、そんなわけ……あつ」

『あるの!?!』

「えーっとですね。あまりにも既存のユニゾンデバイスと違うもの
ですから、すごく興味がわいて、それで、もっと詳しく調べたいな
あ、って思ってた……」

「もしかして、分解してみようとか、思っちゃった?」

「お恥ずかしながら……」

それを聞いて全員が納得した。

「なるほど、知的好奇心と言っわけですか。でもそんなこと考えて
たらこの子もそりゃ暴れますよ」

「うう、ごめんなさい」

よほど反省しているのか、シャーリーはそのままうなだれてしま
う。

すると、さっきまで頭の上にいた青龍がシャーリーのところに近
づき、擦り寄ってきたのだ。

「えっ?」

「いったでしょ、この子は人の心に敏感だって。シャーリーさんが
心から反省してるから、もう警戒する必要がないって解ったんです
よ」

「クキュー」

龍清の言葉に呼応するよつに青龍も鳴声をあげて擦り寄る。

「あれ？　じゃあその子はどつして？」

そう言つてフェイトは、西麗が抱きかかえてる白虎に目をやる。

「ああ、この子ね、じつとしてるのが落ち着かなかつたんだって」

「そ、そんな理由？」

「なんかせつかちみたいなんだよね、青龍が暴れるまで、「早く終われ、早く終われ」って思つてたんだって」

「なんか、西麗に似てるね。西麗も結構せつかちだし」

「む。龍清だつて結構用心深いじゃん」

「そうかな？」

二人が他愛のない言い争いをしてる間に、フェイトとティアナはシャーリーから二匹のデータを見せてもらつていた。

「やっぱりあの二匹、構造はユニゾンデバイスみたいなんですけど、主人と使い魔の精神リンクのようなものもあるんですよ」

「それって、二匹はユニゾンデバイスであり、使い魔のようなものつてこと？」

「はい、どれで、そのリンクを使って、二匹は二人から魔力を供給して、実体化してるんです」

「成程」

「でも、これ以上は本局のしかるべき部署と施設じゃないと無理ですね。次元航行艦の設備じゃ、とてもじゃないですが歯が立ちません」

「そっか、じゃあ後は向こうについてからってことで」

そう言って三人が振り向くころには、二人の言い争いも終わっていた。

「あ、もう終わりましたか？」

「うん。取り敢えず、二匹は本局に戻ったらまた調べるけど、今は一緒にいていいよ」

「あつ、フエイトさん。そろそろ」

「えっ？ あつ、そうだね」

すると二人は、龍清と西麗の腕をつかむ。

「さ、行」

「えっ？ 行くなってどこへ？」

「訓練場」

ティアナのその言葉を聞いた途端。二人の顔は青ざめていった。

「も、もう少し、もう少し待ってもらっていいですか？」

「駄目」

「即答!？」

「大丈夫よ、ちゃんと手加減してるし」

「いや、そういう問題じゃなくてですね!」

「ちょ、いやあああ!」

努力むなしく、二人は訓練場へと連行されていった。

「大丈夫ですかあ? お二人とも」

「.....」

「キユ~~~~」

「ニヤ〜〜〜〜」

ぐっ तरीしてる二人と二匹、何があったのかは最早言わずもがなである。

「このくらいでへばってたなら、合格できないわよ?」

「いや、お二人が強すぎるんですよ」

呆れた様にいうティアナに、龍清が率直な感想を言う。

「でも、初めのころに比べたら、大分様になってきたよね」

「そりゃあ、あれだけハードなことさせられてればね」

「それに僕ら、幾度もあの男と戦ってきましたからね。ある程度体が覚えてるんですよ」

取り敢えず上半身を起こすが、やはりその表情には疲労の色があった。

「さて、そろそろ本局に到着すると思いますよ」

「えっ? もうそんな時間?」

「はい」

ここでシャーリーが、龍清と西麗に飲み物を渡しながら言った。

「本局についたら、義母さんのところに連れて行くから、そこで起こったことをちゃんと話してね」

「あつ、はい」

「大丈夫。義母さんは話が分かる人だから、悪いようにはしないよ」

少し緊張気味の龍清に、フェイトは落ち着かせるように言う。

「じゃあ、そろそろ戻っていいですかね」

「そうね、しっかり休んでおきなさいよ」

「はい」

ティアナの言葉に対する返事をした後、二人は二匹を連れて部屋に戻っていった。

しばらくしてクラウド、ティアは時空管理局本局に到着、龍清と西麗を送り届けたフェイトとティアナは廊下を歩いていった。

「そういえば、あの二人の相手はどうなるんでしょうか？」

「それはどうだろう？ でも、申請すればだれでもいいとは思っけど」

二人でそんな会話をしていると、突然、ティアナの携帯端末が鳴った。

「ん？ もしもし…… ああ、あんたね」

電話の相手を確認するや、ティアナは少し苦笑交じりで、どこか嬉しそうな顔をして話し始めた。

「うん、こっちは相変わらず。今帰ってきた所、そっちは？ へえー…… あっ！」

するとここで、何か思いついたようだ。

「ねえあんた、一週間後って空いてる？ ……そう、じゃあ本局に足のばせる？ うんうん、オッケー。じゃ」

電話を切ると、ティアナは何かたくらむような顔をしていた（あくどいものではない）。

「フェイトさん。あの二人の対戦相手、ちょっとこれから試験担当のところに申請してきます」

「良いけど、誰なの？ って、聞くまでもないかな」

「はい。では、私はこれで」

そう言って一礼すると、ティアナは廊下を駆けだしていった。

「うーん、確かにあの二人なら適任だと思うけど……何とかなるよね、よし、もっと厳しくいこう」

そう言って少し困った表情をしながらも、試験に向けて二人を鍛え上げる算段を講じ始めるフェイトだった。

「東郷龍清君と、秋西麗ちゃんね、私は時空管理局統括官、リンデ
イ・ハラオウンです」

「……………」

「？ どうしたの？」

「あっ！ いえ……………」

「何でもありません！」

「そう？ じゃあ、私の質問に正直に答えてね」

「は、はい」

「解りました」

（本当に二見のお母さん……！ 若すぎるよ（どきどき）……………）

第五話 囑託試験勉強風景（後書き）

やっぱり構成滅茶苦茶な気が。

一応構成は考えてるのに、勢いだけでこんなことになるんだ。

あと、この作品を読んでも皆様に、青龍と白虎の名前を募集したいと思います。

一応自分でも考えていますが、募集した中で気に入ったのがあったりすれば、採用しますので、遠慮したりせずどしどしご応募ください。

次はいよいよ囑託試験です。はてさて、二人は無事合格できるのか？

そして対戦相手、もうわかりましたよね？

第六話 奮闘！ 囑託魔導師試験（前編）

一週間後、ついに二人はこの時を迎えた。

「大丈夫……だよね」

「キュウー」

「うう……緊張する」

「ニヤ〜〜」

不安気味の龍清とカチカチの西麗、そしてそんな主人を心配する青龍とあくびをする白虎。

二人はこれから囑託魔導師試験を受けるために、本局を訪れていたのだ。

しかし、やはり本番と言っただけあって、二人は不安と緊張に固くなっていった。

「二人とも、そんなに固くならないで」

「この一週間やってきたことをちゃんとやれば、全然平気よ」

そんな二人を、フェイトとティアナが落ち着かせる。

「そ、そうですね。取り敢えず、落ち着かないと……」

「えーっと、インド、インド、インド」

「いや！そこは人でしょ！？」

二人とも相当気が動転しているらしく、西麗に至っては「人」と書くはずのところを「インド」と書いてしまい、ティアナに突っ込みを入れられる。

「取り敢えず二人とも、落ち着いて。ほら、深呼吸」

「すー」

「はー」

「すー」

「はー」

……

「落ち着いた？」

暫く深呼吸をした二人に、頃合を見計らってフェイトが聞いてくる。

「はい」

「何とか」

二人も相当落ち着いたのか、普通に返してきた。
その時……

東郷龍清様、秋西麗様、試験会場へお越しください

とアナウンスが鳴った。

「いいタイミングですね」

「だね」

「それじゃ、僕たち行つてきます」

「頑張つてね」

こうして、二人は試験会場へ向かっていった。

試験会場に入った二人は、指定された机に座って次の指示を待っていた。

青龍と白虎は近くの試験管に預けておいた。ちゃんと大人しくしているように注意して。

「えー、東郷龍清さんと、秋西麗さんですね」

「はい」

突然二人の目の前にディスプレイが現れ、水色の髪をしたかわいらしい少女が確認を取ってきたので、二人もそれに答える。

「初めまして。本日お二人の試験管を務めます。リインフォース？
です〜！ リインと呼んでくださいね、よろしくです〜！」

「よろしくお願いします〜！！」

「それでは、お二人にはまず、筆記試験を受けていただきます。準備はいいですか？」

「はい」

「では、スタートです〜！」

リインの合図とともに、二人は筆記用具を手に取り、答案用紙に答えを書き始める。

(えーと、ここがこうなって、ここをこうするから……)

「あれ？ この問題やったことある。ラッキー」

「で、次がこうなるから、ここの答えは……」

「あれー、ここってどうやるんだっけ？」

まったく対照的な二人だったが、生まれ持ったの才能か、はたまた執務官二人のスパルタの賜物か、一時間、二人は試験の答えを考え、書き続けた。

「はい、終了です」

「ふう」

「終わった~~~~!!」

「お疲れ様です」。それじゃあ、次の試験は別々になるので、係員

の誘導に従って移動してください」

「じゃあね、西麗」

「しくじるんじゃないわよ」

「解ってるよ、行くよ」

「キユ」

「じゃ、行きますか」

「ニヤ」

こうして二人はそれぞれの試験会場へ向かっていった。

龍清の場合

「ここかな？」

龍清がやってきたのは屋外だった。

龍清がしばらく周りを見渡していると、ディスプレイが目の前に現れる。

「龍清さん。いますね？」

「あつ、はい」

ディスプレイに映ってたのはリインだった。

「それではこれより、儀式魔法の試験をしまーす」

「えっと、詠唱で発動する術ですよね？」

「そうですね」

（これだけ広いなら、あれでいこう）

何をするか決めた龍清は目を瞑り、一枚の札を出しながら、印を組み、術を唱え始める。

「神州靈山、移山召喚！！」

そう言って札を上空に投げると、上空に八卦陣が現れ、そこから轟音と共に巨大な岩山が現れ始めた。

ゆっくりと、確実に落ちてくるそれに、リインは驚きのあまり呆けた顔になっていた。

「急々如律令!!」

そして最後にそう言い放つと、山はすごい勢いで龍清の目の前に落ちてきた。

「ふう、これでいいですか?」

「……………」

龍清が聞き返すが、当のラインはあいた口がふさがらない状態となっていた。

「あのお、ラインさん?」

「はっ!? あっ、はい、オッケーです」

ようやく我に返ったラインは終了のサインを出す。

「最後の試験までは時間があるので、お昼ご飯を食べて待っていてください」

「あっ、はい」

そう受け答えすると、龍清はその場を後にした。

秋西麗の場合

「JJJJ?」

西麗がやってきたのは、トレーニングルームのような場所だった。西麗もまた、辺りを見渡していると、ディスプレイが現れる。だが、そこに映ってたのはラインではなかった。

「秋西麗ってのは、アンタで良いんだよな?」

「はい、っていうか、アンタは?」

目の前に映ってるのは、赤い髪をした、気の強そうな少女だった。

「アタシはアギト、お前の試験を担当することになった。よろしくな」

「あ、うん」

「んで、お前に受けてもらう試験は、これだ!」

そう言うと、西麗の目の前に十基のオートスフィアが現れる。

「今からお前には、このオートスフィアの攻撃を制限時間いっぱいまでかわすか防いでもらうぜ。一発でも直撃したらそこまでだ」

「成程」

「攻撃は徐々に早くなってくから、なめてつと痛い目みるぜ」

「ちなみに制限時間は？」

「一時間だ」

「オツケー、こっちは準備できてるよ」

「それじゃあ、スタート！」

アギトの合図とともに、オートスフィアが一斉に西麗に向かって攻撃を始める。

「おっと、よっと、あらよっと」

しかし、それを軽快な身のこなしで次々とかわしていく。

無論、これで終わるほどの試験は甘くない。

十分間隔で攻撃は激しさを増していき、じよじよに回避が困難になる。

はずなのだが……

「おっと、今のは危なかった」

軽口を叩きながらも、かれこれ四十分近くこの調子で、西麗はオートスフィアの攻撃をかわし続けていた。

すでに攻撃の頻度はかなりのもので、並みの魔導師なら一発どころが四、五発当たってもおかしくない頻度だった。

だが、それを西麗は、身のこなしだけで、防御も一切取らず、次々とかわしていたのだ。

「つまんない。これならティアナとの模擬戦の方がよっぽどましだよ」

避けながらついにはそんなことまで言い出し始めた。

「あと十分、これなら楽勝かな？」

「それはどうかな」

アギトがにやりと笑って言うと、オートスフィアの攻撃に変化が生じ始めた。

攻撃頻度がさらに上がったただけではないのだ。突然、直線に飛んでくる弾の何発かが誘導して西麗を襲ってきたのだ。

「うわー！」

危うく当たりかけたが、器用な体の動きをしてかわす。

「言ったる、舐めてると痛い目見るって」

「そう見たい、じゃあ、こっちも本気でいきますか！」

そう言うと、西麗は攻撃を避けるが、その中で変化はすぐに起きた。

一発の魔力弾が、西麗に命中し様とした時だった。

魔力弾が、西麗をすり抜けて行ったのだ。

「なっ!?!」

これにアギトは驚く。

しかもよく見てみると、西麗は何人かに増えており、次々と攻撃をかわしていた。

やがて、試験終了のブザーが鳴る。

「よ、よし、これで試験終了だ」

「ふー、いい汗かいた」

まるで軽い運動をしていたかのような態度に、アギトは少しばかり驚きを隠せなかった。

「次の模擬戦まで時間があるからよ、食堂で飯食って来いよ」

「うん、ちょうどおなかすいたし」

そして西麗もまた、その場を後にするのだった。

「あつ、龍清」

「西麗、そっちはどうだった？」

「全然楽勝、そっちは？」

「うまくできたと思うけど、まだ解んないや」

合流した二人はお互いの試験結果を報告しあう。

そしてしばらく歩いていて、フェイトとシャーリーと合流し、二人に連れられて食堂に向かい、今は昼食をとっていた。

「それにしても、こっちにも蕎麦とかあったんですね」

「って言うか、なんでここに地球の食べ物有这么にあるの？」

龍清は蕎麦を啜りながら、西麗は麻婆豆腐を口にしながら疑問を浮かべる。

「ああ、それはね、私の友達の影響なんだよ」

「フェイトさんの」

「うん、私の友達、地球出身の魔導師で、こっちで結構有名になったんだ」

「「ふむふむ」」

「その影響で、地球の文化もミッドに流れ込んできてね、今ではこんな感じ」

「へー、ま、知らない料理よりはいいけど」

「そうだね」

二人が会話をしながら料理を食べていると、青龍と白虎が乗っかってきた。

「何？」

「もしかしてほしいの？」

二匹の恨めしそうな顔をしてるのを見て、すぐに察した。

「はい」

「クキユ〜」

すると龍清は蕎麦を露に入れ、それを青龍のもとに持っていく。青龍はそれをおいしそうに啜り、歓喜の声を上げる。

「ニャー！ー！！」

「あつ、御免」

一方、突然白虎の方が騒ぎ始めた。

「猫舌なんだ」

「ニャー……」

龍清の呟きに、白虎は辛さと熱さのダブルパンチで舌を出していた。

その後、シャーリーが水を持ってきて白虎はその水で舌を冷やすことに。

「そういえば、次は模擬戦ですけど、どんな相手なんですか？」

「いや、西麗、それ解ったら試験の意味がない気が」

「まあ、そうだけど、やっぱり気になるじゃん」

西麗の問いに、龍清はただ呆れた。

「ところで二人とも、そろそろ時間だよ」

「「あつー!!」「」

フェイトに言われ、時計を見ると、時計の針は12時50分をさしていた。

「やば、行くわよー!!」

「うん！ では行ってきますー!!」

「「行ってらっしゃーい」「」

二人は大慌てで食堂を出てその場を後にした。

そしてフェイトとシャーリーはそんな二人を見送っていった。

第六話 奮闘！ 囑託魔導師試験（前編）（後書き）

少し西麗の描写を強くし過ぎた感がありますので、次は龍清の活躍を増やそうかと思えます。

次は後編、模擬戦の相手はわかっているとありますが、あえて伏せておきます。

ご意見やご感想、ご指摘などを本当にください。

第七話 奮闘！ 囑託魔道師試験（後編）（前書き）

あんまりネタが思い浮かばなかったし、この一週間はいろんな
みてたいへんだった。

もうちょっと余裕をもって書いた方がよかったな。

と、愚痴はさておき、今回は予告してた通り模擬戦の話です。
うまくかけてないと思いますが、楽しんでみてください。

第七話 奮闘！ 囑託魔道師試験（後編）

昼食を終わらせた二人は、急いで試験会場に赴いた。

場所は訓練場ともいえる、遮蔽物も何もない、ただっ広い空間だった。

「来たですー」

「遅刻ギリギリだったな」

「すいませ……って、えー……！！！」

「どうしたの？ 龍せ……えー……！！！」

突然大声を上げた龍清に、つられてその方向を見た西麗も大声を上げた。

「ち、ちっちゃ……」

二人が驚いた理由は、目の前にいたリインとアギトであった。てつきり普通の人がやっているとってただけに、まさか目の前にいる人物が、身長5cm位の小人だったなど、夢にも思わないだろう。

「えっと、リインさんとアギトさん、ですよね？」

「そうですー」

「うっそー！ 妖精さんと小悪魔だったの!？」

「違いますー!」

「誰が小悪魔だ!」

二人から見れば完全に妖精と小悪魔（羽としっぽ的に）なのだが、二人はそれを即座に否定する。

「いや、でも、どう見ても妖精ですよね?」

「違いますー!」

こんな感じでしたらしく言い争いが続いたが、程なくして二人の事を聞いて落ち着いた。

「すみませんでした」

「解ってくれたならもういいです。さて、お二人には最後に実技試験を受けてもらいますー」

「実技って、模擬戦ですよね?」

「そうですー、そして相手は……」

「こいつらだ!」

ラインのアイコンタクトに合わせてアギトが叫ぶと、突然魔法人が現れ、そこから対戦相手が現れる。

一人はツインテールにしたオレンジ色の髪的女性で、両手に銃を握っていた。

もう一人は、青いショートヘアの髪をした、右腕に重厚な籠手、両脚にローラーブーツを履いた、元気そうな女性だ。

そして二人は、オレンジの髪の方を見て驚いた。

「二人とも、頑張ってるみたいね」

「ティアナ（さん）！？！？」

そう、その人物は、先日まで自分たちに勉強を教えていた、ティアナだったのだ。

「ど、どうしてティアナが！」

「まあ、実技試験は実力のある人なら誰でも良いみたいなんだけどね」

「じゃあ、そちらの方は？」

そう言っつて龍清はティアナの隣にいる女性の事を聞いてくる。

「私はスバル・ナカジマっていうの、よろしくね！」

「あっ……は、はい」

「よろしく〜！」

ティアナが答えるより早く、元気よく自己紹介してきたスバルに、龍清は少し戸惑いながら、西麗は同じようなノリで返す。

「おっほん、お話はそこまでです」

「そろそろ始めるからよ、二人もさっさと準備しろ」

「あつ、はい」

リンとアギトに催促され、龍清と西麗は準備を始める。

「いくよ」

「クキュー！」

「準備は良い」

「ニヤー！」

二人の言葉に、二匹も元気よく答える。

「必神火帝！」

「天魔降伏！！」

掛け声とともに、二人と二匹は光に包まれる。

しばらくして光が晴れると、青い鎧に身を包んだ龍清と、白と黒の虎模様の鎧に身を包んだ西麗がそこに立っていた。

「準備良し！」

「何時でもいいですよ」

最後の試験と言っただけあって、二人はやる気満々だった。

「それでは、よーい……」

リインが合図をしようとすると、四人は一斉に戦闘態勢になる。

「はじめー!」

そしてアギトの合図とともに、模擬戦が開始される。

「龍王炎符水!」

「虎王飛拳!」

合図とともに先に仕掛けたのは、龍清と西麗だった。

龍清は符を前面に出すと八卦陣が現れ、そこから火炎が現れ、テイアナに襲い掛かり、西麗は拳を前に突き出すとともに、虎の形をした衝撃波がスバルに向かって飛んでいく。

無論、そんな攻撃にあたる二人ではなく、攻撃が直線的だったこ

ともあり、あっさりかわす。

(スバル！ そっちの相手は任せたわよ！)

(オツケー！)

そして念話で確認を取ると、二人はそれぞれ分散し、龍清と西麗に向かっていく。

「さっきのお返しよ！ クロスファイア！」

「リボルバー……」

一気に二人は得意の距離に持ち込み、ティアナは周囲にオレンジ色の魔力弾を精製し、スバルは右手を一気に腕を振りかぶる。

「シュート！！」

そして掛け声とともに、魔力弾は龍清に襲い掛かり、スバルの拳は西麗に迫る。

「金固符！」

「よっつ」

これに対し、龍清が符を地面に投げると、そこから壁が現れ、ティアナの攻撃を防ぐ。

そして西麗は迫るスバルの拳をひらりとかわす。

(これは……まさか！)

しかし、ここにきて龍清は、彼女たちの本当の目的に気付いた。

「これが、目的だったんですね」

「そういう事！」

龍清の呟きに答えるように、ティアナの魔力弾が襲い掛かる。

「水流符！」

すると今度は、符を三枚取出し、三方に投げる。
すると、符は水となって龍清を包み、攻撃を防ぐ。

「龍王炎符水！」

そして再び反撃に転ずる龍清。

今度は直線的ではなく、まるで生きてるかのように動き、やがてティアナを包み込んだ。

「やった！」

「甘い！」

「へっ？ うわ！」

当たったと思った瞬間、別方向から魔力弾が飛んでくる。

「さすがにやるわね」

「そちらこそ」

お互いを称えあうとともに、二人はこの後の手を考えながら、以降、攻撃の応酬を続けるのだった。

「はあああああ！！」

「とおりやあああああ！！」

一方、スバルと西麗もまた、互いの拳をぶつけあい、しばらくして再び距離を置く。

「虎王連挺！！」

そう叫ぶと、西麗の手元にヌンチャクが現れる。そして一気に近づき、ヌンチャクを振り回す。

「わっ！！」

P r o t e c t i o n

「このまま一気にもらうよ!」

そう言って、西麗は再び、神速槍を構えなおし、再び突きを繰り出す。

「まだまだ!」

しかし、今度はスバルも対応でき、攻撃を円形のシールドで防ぐ。

「何の! いくら防御を張っても同じことだよ!」

そう言って、再び突きを連続で繰り出す。

「強いね」

ここで防御しながら、スバルは西麗にそう言ってきた。

「勿論、この日のためにどれだけ扱かれていたことが」

「でも、私も負けられないからね!」

そして防御しながら、西麗の攻撃を押し返す。

「おっと!」

弾き飛ばされつつ、空中でぐるりとまわって着地する。

「流石に一筋縄ではいかないかな?」

(ねえ)

(何?)

突然、スバルからの念話が西麗に届く。

(このままだとき、多分決着つかないと思うんだよ)

(奇遇ね、アタシも同じこと考えてた)

幾度となく拳を交えてきて、西麗はすでにそんな気がしていたのだ。

手数で押せば西麗が有利だが、それを破るだけのパワーがスバルにはあり、まさにお互いの長所がお互いの攻撃を打ち消しあっているのだ。

(それでさ、一つ提案があるんだけど)

(何?)

スバルから言い出された条件は、非常に単純で明快なものだった。

(次の一撃で決着をつけない? お互い、全力全開で!)

(……スバル、だっけ)

(うん)

(アンタとはうまくやってけそう。ここまで考えが合うなんて滅多にないよ)

西麗も、同じことを考えてたりしてた。
無論、全力で行けばスバルに軍配が上がるのは百も承知だが、西麗にも奥の手がないこともなかった。

「一撃必倒……」

「旋風裂穿……」

お互い攻撃の構えに入ると、スバルの右手には水色の魔力が、西麗の右手には、風のようなものが集まり始める。

「デイベイ……ン！」

「虎王……」

「バスター……!!!」

「裂空け……ン!!」

そして叫びと共に、水色の魔力の奔流が放たれ、ドリルのように渦巻く風を纏った拳が、それを穿っていく。

「はあああああ……!!!」

二人の戦いはしばらくは拮抗していたが、終わりはふいに訪れた。

突然、西麗の右手に纏っていた風が、霧散してしまったのだ。

「えっ？」

そんな間拔けな声と共に、西麗は水色の奔流に飲まれ、そこで意識が途切れた。

「はあ、はあ……」

一方、ティアナと対峙していた龍清は押されていた。お互いに決定打を与えることができず、しばらく術の打ち合いが行われていたが、龍清の体力がここに来て限界に達し始めていた。

（まずい、このままじゃジリ貧だ。こうなったら……）

ここで龍清は意を決し、懐から五枚ぐらいの符を取り出し、それを上空に投げる。

「雷神よ、来たりて我の敵を討て！！」

そうと唱えると、五枚の符から一斉に青い雷が周囲に降り注いだ。そしてそれを回避するため、ティアナの攻撃が鈍った。

「今だ！ 破山剣召喚！！ 活木符！！」

その隙に、破山剣を召喚し、四枚の符を自分の足と手に貼った。

「これで、決めます！！」

そういうと、地面を蹴り、一気にティアナに近づく。

「なっ、早！！」

先ほどとは全く違うスピードにティアナは驚くが、その間に龍清は彼女の懐に入り込む。

「これで、終わりだあああ！！！！」

そして、一気に破山剣を振り下ろす。

だが……

「えっ！？」

何と、斬った目の前のティアナは、揺らめきながら消えてしまった。

「これは、一体……がっ！？」

突然の事に固まったその瞬間、背中に衝撃が走り、彼もまた、そ

のまま意識を手放した。

「う、うーん……」

しばらくして龍清が目を覚ますと、視界に入ってきたのは白い天井だった。

「あれ、ここは……」

上半身を起こし、あたりをきよるきよる見渡していると……

「ウニャ~~~~」

隣から妙な声が聞こえてきたため視線を向けると、西麗が眠っていた。

そしてここにきて、ようやく思考がまとまってきた。

「ああ、そうか。僕、突然後ろから攻撃されて……」

そして、試験の結果を予想し、深いため息をする。

「うーん……かまぼこー!」

と、ここで西麗が意味不明の寝言を吐いて復活。

「あっ、起きた」

「うにゃ？ かまぼこは？」

「駄目だ、まだ寝ぼけてる」

寝ぼけ眼できよろきよろしてる西麗を見て、呆れた顔をする龍清。

「クキュー」

「ニヤー」

するとここで、青龍と白虎が二人の頭に乗っかってくる。

「ああ、君たちも起きたんだ」

「クキュー」

鳴き声を上げる青龍だが、どこかさみしげに聞こえた。

「あっ、起きたんだ」

ここで、部屋に入ってきたのはフェイトだった。

「気分はどう？」

「何とか大丈夫です。一人寝ぼけてますけど」

「かまぼこ〜……あれ？」

寝ぼけてた西麗もようやく目を覚ました。

「どこどこ？」

「ここは医務室だよ、模擬戦が終わった後、ティアナとスバルが二人をここまで運んでくれたの」

「そうだったんですか………すみません」

事情を確認した後、龍清はフェイトに謝罪した。

「どうして謝るの？」

「だって、僕たちあの二人に負けたんですから、不合格ですよ、折角いろいろ手伝ってもらったのに……」

申し訳なさそうに言っていると、フェイトはくすくす笑い始めた。

「ふふ、大丈夫だよ」

「えっ？ でも……」

「ライン、アギト」

フェイトが呼ぶと、ラインとアギトが入ってきた。

「こほん、東郷龍清さん、秋西麗さん、お二人の結果は……」

ここまで来て、すでに結果など目に見えていると思っていた龍清は、目をつぶって静かに聞く。

西麗はまだ状況が呑み込めてないのか、少しきよるきよるしていたが、龍清から合格発表だと聞き、龍清と同じく顔を暗くする。

そして、言い渡された結果は……。

「お二人とも、合格ですー!!!」

「……へっ?」

まさかの結果に二人は間の抜けた声を上げる。

「合格って、だって僕たち、負けたんじゃ?」

「実技試験はな、試験者の技量を図るのが目的なんだ。だから勝敗

「はあんまり関係ねえんだよ」

「そ、そうなんですか？」

「うん、初めて受ける人は、大体そんな風に勘違いするんだよね」

「フェイトの言葉を聞いて、龍清と西麗は一気に脱力した。」

「ま、まあ、なんにせよ、あたしたちは受かったんだよね」

「ははは、そうだね」

「こうして、二人は見事に試験を合格したのだった。」

第七話 奮闘！ 囑託魔道師試験（後編）（後書き）

今回は完全な駄文だと思います。

ネタはほぼ思いつきに近しい、描写もうまくかけてないだろうし。

それでも楽しんでいただけたなら幸いです。

さて、次回も楽しみにしてください。

第八話 勧誘、晝く影（前書き）

今回は試験合格後の話、そして龍清の陰陽術についての説明です。

そして、今回はあの人の登場です。

では、お楽しみください。

第八話 勧誘、晝く影

「二人とも、試験合格、おめでとう」

「おめでとうです〜！」

「はい〜！」

フェイトとリンからのねぎらいの言葉に、ほっとした安心感と嬉しさを混じらせながら、二人は返事をした。
その時……

グウ~~~~~

「あつ…… / / /」

盛大な腹の虫が龍清のお腹から鳴り響いた。

「お腹すいた〜」

そして、西麗も既に空腹全開と言わんばかりの顔でベッドに倒れ

伏した。

尤も、実技試験であれだけの大立ち回りを演じたわけなので、お腹が空くのは無理からぬことである。

「ふふ、じゃあ食堂に行つて何か食べようか」

「そ、そうですね／＼」

「賛成ー!!!」

フェイトの言葉に二人も賛成し、一緒に食堂に行くこととなった。

しばらくして、龍清、西麗、フェイトの三人は食堂に向かった。リインとアギトは途中で用事があると言って別れたのだ。

「あつ、来たわね」

「おーい、こっちこっち！」

食堂につくと、三人を呼ぶ声がした。

顔を向けてみると、そこにいたのは二人の模擬戦の相手、スバルとティアナだった。

「二人とも、待っててくれたの？」

「はい、いろいろ話したいこともありましたし」

フェイトの問いかけに、敬語ながらもどこか親しみのある感じで話すスバル。

これを見て、ふと龍清は聞いてみた。

「あの、スバルさんとフェイトさんって、お知り合いですか？」

「そういえば、ティアナともなんか仲良さそうだったよね？」

気になったのか西麗も聞いてくる。

「えーっとね、スバルとティアナは昔いた部隊で、私の親友の部下でその教え子なの」

「で、あたしとスバルは訓練校からの付き合いなの、いろいろ苦労させられたけど」

「ティアア酷ーい！」

ティアア何の説明に抗議の声を上げるスバル。そんな二人をほほえましく見つめるフェイト。

これだけで、三人の仲の良さを感じる龍清と西麗だった。

そして、カウンターで食事を受け取り、席について五人は食事をとっていたわけだが……

「……………」

龍清と西麗の手の動きは止まっており、二人は啞然としていた。そして二人の視線の先には……

「ん？ どうしたの？」

「い、いや、その……………」

「よくそんなに食べるわねえ、太るわよ？」

二人が驚いていたのは、スバルの食べっぷりにだった。

最初、大きな皿に、天まで届くほどのパスタがあったが、それがスバルたった一人によってほとんど平らげられたのだ。

「って言うか、どこにそれだけ入るんですか？」

（あれは気にしたら負けよ）

龍清が西麗に追隨する形で聞いた途端、アイコンタクトまじりでティアナが念話で答えてくる。

（い、良いんですか？）

（いいのよ、こっちはもう慣れたし）

訓練校からの付き合いという事もあり、事もないように話すティアナに、龍清はただ「はあ」と答えながら蕎麦を啜る。

「そう言えば龍清、聞きたいことがあるんだけど」

「何ですか？」

とここで、フェイトが質問して来たので聞いてみる。

「実技試験の時、私も見てただけど、最後にティアナのフェイクに斬りかかるとき、身体能力が上がってたみたいだけど、何をやったの？」

フェイトが聞いてきたのは、破山剣で斬りかかるとき、四枚の札を自分の手足に貼ったことで上がった身体能力の事だった。

「ああ、木式の事ですね」

「木式？」

すると、龍清は懐から五枚の符を取り出してテーブルに並べた。

その札は、緑、赤、黄、白、黒と色とりどりで、それぞれ黒い文字（黒い符だけ白い文字）が書かれていた。

「僕の陰陽術は、用途に合わせた五つの術式があって、緑の符が「木式」、赤い符が「火式」、黄色い符が「土式」、白い符が「金式」、黒い符が「水式」と呼ばれてるんです」

「それで？」

「木式は術者の身体能力強化、火式は火を用いての攻撃、土式は仲間の補助や保護、金式は防御と拘束、水式は簡単な防御と回復と言う風に使い分けるんです」

「そうなんだ」

「でも、その金式と水式の防御ってどう違うの？」

ここで少し疑問に思ったティアナが聞いてくる。

ちなみに隣のスバルはもはやちんぷんかんぷんだった。

「金式の防御は強いですが、発動に少し時間がかかるんです。水式は防御自体は金式より脆く、術者しか守れませんが、発動が早いんです」

「でも、その符はどうするの？ 見たところ使い捨てみたいだけど」

そう、龍清は陰陽術を使うたびに符を使用していた。

しかし、符は普通に紙なので、術を使うたびに符は減っていく。

となれば。当然補充をしないとイケないわけなのだ。

「それはですね、一枚の紙をこうして……」

そう言うと龍清は、どこからか紙と筆を取り出し、すらすらと書き始めた。

「それで、後はこの紙に念を込めれば……」

そうやって念を込めはじめると、紙に光が渡っていき、次第に紙

の色が白から黄色に変色し始めた。

「っと、これで完成です。これは黄色ですから、土式ですね」

そう言ってさっき完成した符を懐にしまっ。

「ねえ、今のって」

「はい、魔力光でしたね」

そして、その様子を見ていたフェイトとティアナはそう確認しあ
う。

「ちなみに金式は元々白いですけど、出来ると発光するんですよ。
だからできたかどうか判別できるんです」

「へー、不思議だねえ」

一方で、ティアナの隣で見ていたスバルは手品を見せられた観客
のように不思議がっていた。

「でも、僕自身もよくわかってないんです。僕の家相伝の陰陽術な
んですけど、詳しいことが一切書かれていなくて」

「まあ、おかげであいつと戦ってる時はいろいろ助かったんだけど
ね」

あいつとは勿論、あの黒ずくめの男だ、フェイトとティアナはす
ぐに察しがついたが、事の次第を知らないスバルは首を傾げるしか
なかった。

とまあ、龍清の陰陽術講座を終え、五人は普通に食事を続けていた。
スバルがおかわりを注文したので、また二人が驚いたのは、言うまでもないだろう。

「クキュー」

「はいはい、ほら」

「クキューキュー！」

「はい、今度は覚ましてあるから」

「ニヤ」

とまあ、二匹がまた料理を要求して来たので、二人はそれぞれを食べさせるという事もあった。

「そう言えば、あの話、聞いてる？」

「はい、二人が試験を受けてる時に」

「私はティアから聞きましたけど、また一緒になれるんですね！」

「ふふ、そうだね」

「あの、何の話をしてるんですか？」

「何？ この疎外感」

楽しそうに話す三人に、置いてけぼりをくらった龍清と西麗が聞いてくる。

「あつ、そっか、二人にはまだいってなかったね」

「ま、どの道耳に入ると思ってたけど、いい機会かもね」

「「？？？」」

「実はね……………」

と、フェイトが話し出そうとしたその時……………

「そこから先は、私が話すわ」

突然、この場にいるメンバーとは違う声があったので、声の下方向を振り向く。

するとそこには、茶髪にセミロングの女性が立っていた。

その顔を見た途端、フェイト、ティアナ、スバルは同時にその人物の名前を叫んだ。

「「「はやて(さん)!!!」」」

「やつほー、久しぶりやな、フェイトちゃん、ティアナ、スバル」

その女性、はやては手を振りながら三人にあいさつを交わす。

「どうしてここにいるの？　もしかして、あの件？」

「せや。後スカウトやな」

「スカウトです」

すると後ろからリインが現れる。

「んで、東郷龍清君と、秋西麗ちゃんやね」

「どうして、僕たちの名前を？」

突然名前を呼ばれ、龍清は少し困惑する。

「リインから聞いたんよ、後フェイトちゃんからちよこっとな」

ウインクしながらそう言うと、あいてる席に座る。

「私は八神はやて、フェイトちゃんの友達や」

「フェイトさんの？」

「せや、んで、ここに来たのはさっきも言った通りスカウトや」

「スカウトって？」

西麗が聞くと、はやては意を決して話し始める。

「最近、管理局が人が衣服だけ残して消える事件を捜査しとることは知っとなるな？」

「はい、確か、フェイトさんとティアナさんは、その件で地球にいらしたんですね？」

「そうだよ」

「それでな、近々管理局は、この案件に対する特別捜査部隊を編成することになったんや。ちなみに、部隊長は私や」

ここまで話して、すでに龍清と西麗は察しがついたが、知ってか知らずか、はやては話をつづけた。

「既に人選はほとんど終えとるし、フエイトちゃんたちも二つ返事で了承してくれた。そしてな……」

少し言いよどみながらも、再び意を決して話をつづけた。

「その部隊に、君たちも参加してほしいんよ」

「やっぱり」

「まあ、当然っちゃあ、当然？」

二人は黒ずくめの男が人を消す瞬間を見た目撃者、いわば事件解決の重要参考人なのだ。

事件解決を望む管理局が、この二人を黙って見過ごすわけがなかった。

「まあ、囑託魔導師になったばかりで申し訳ないんやけどな、曲もこれ以上犠牲者を増やすわけにもいかへんし、私個人としても、指を銜えて見てるのは嫌なんや」

初顔時の親しみやすさが嘘のように、真剣なまなざしではやては自分の胸中を話す。

その真剣さに、二人は一瞬たじろぎかけたが、真剣に話を聞く。

「この事件、二人にも協力してくれへんか？」

その問いかけに、二人の答えは当に決まっていた。

「勿論です。そんなことを聞いて、今さら知らんぷりはできません
！」

「それに、あいつが絡んでるなら、どの道アタシたちも無関係ってわけにはいかないからね」

二人もまた、二つ返事で承諾した。

「ありがとくな、ほなら一週間後、部隊の結成式を行うから、ここに来てや」

そう言うてはやては情報端末を二人に渡す。

「ほんまにありがとくな、ちょっと気が早いけど、こっれからよろしくな」

「はい」

「よろしくお願いします」

こうして、二人はこの事件に本格的に参入することになるのだっ

た。

「あっ、一つ言い忘れとった。龍清君」

「はい、何ですか？ 八神さん」

するとここで、何か思い出したように、はやては龍清を呼ぶ。

「はやてでええよ。そのな、これもちよっと言いくいんやけど」

また言いよどみながら、はやては龍清の肩に手を置いて言った。

「初日は大変やと思うけど、頑張ってや」

「はい？」

「ほなりイン、家に帰るで」

「ハイです」

「それじゃ、皆、また一週間後にな」

そう言って手を振りながら、はやてはその場を後にしたのだった。

「ねえ。今の、どういう意味？」

「さあ？」

まったく解せない二人は三人の方を見るが。

「まあ、」愁傷様？」

「大丈夫よ、あんたならできるから……多分」

何故かスバルとティアナからはそんな言葉をもらった。

「あ、あはは……」

そしてなぜかフェイトは、額に冷や汗を浮かべながら乾いた笑をする。

「何だろう、ものすごく嫌な予感がするんだけど」

後にこの予感が的中することになるとは、この時点での龍清は知る由もなかった。

所変わって、どことも知れぬ暗闇の世界。

巨大な黒い瘴気の塊ともいえる珠の前に、その男は立っていた。

「まだか……」

男はしきりにそう呟いていた。

「まだ足りぬか。まあ、この程度で復活なさるとは思えないがな」

「うづうづううづううづう」

まるで男の言葉に呼応するかのように、謎の呻き声が聞こえる。

「それに、やはりあ奴らをこのまま野放しにしておけば、間違いく復活の障害になる」

そう言つと男の下に陣が現れ、再び男を黒い奔流が包み込む。

「龍と虎の力を継ぐ者よ、必ず私がこの手で葬る！」

そう言つて奔流に飲まれた男はその場から消え失せた。

「うづうづううづううづう」

そしてその世界に響いたのは、地を這うようなおぞましいうめき声だけだったという。

第八話 勧誘、晝く影（後書き）

次回から特別捜査部隊、名称は最早言わずもがな、ここから原作キャラたちが大集合します。

そして二次小説お約束の、アレです。龍清哀れ……

青龍と白虎の名前、次の話までで締切りですので、思いついたらどんどんご応募ください。

次回もお楽しみ！

第九話 特務六課編成 龍清の受難 (前書き)

今回の話で、青龍と白虎の名前が登場します。

そして原作キャラたちも次々登場。

そして二次創作恒例の、あれです。

第九話 特務六課編成 龍清の受難。

「ん」

囑託魔導師試験から一週間後のこの日、朝早く起きたのは龍清だった。

試験の後、二人は転送ポートで地球の龍清の家に戻っていた。主な理由として、着替えなどの必要なものを揃えることだが、二人はこれに加えて、ユニゾン状態での練習なども行ったりしていた。ちなみにミッドへの行き方も聞いており、指定の時間に迎えが来るので、その指示に従えば良いというのだ。

「西麗は……まだ寝てるよね」

隣の部屋で寝ているであろう西麗の様子を確認すると、案の定、西麗はまだ寝ていた。

布団を蹴っ飛ばして寝ており、かなり寝相が悪いことが窺える。ちなみに寝間着姿は、西麗が普通に淡い黄色のパジャマで、龍清は白い無地の浴衣のような姿だった。

西麗の様子を確認すると、龍清は部屋の押入れから、式盤と算木を取り出し、日課である朝の占いを始める。

今日一日がどんなふうになるかの目安として占うのだが、一週間前の去り際のはやての言葉がどうしても頭から離れないので、今日どんなことになるのか気になっていたのだ。

そしてその結果は……

「……………」

結果を見た龍清はそのまま押し黙ってしまい、顔の様子からして、悪い結果のようだ。

「……大丈夫だね。大丈夫……だよね」

一抹の不安を胸に秘めつつ、龍清は朝食の支度を始めるのだった。

「……って言ってたわよね？」

「うん、確かにそう言った」

朝食と支度を済ませ、二人は龍虎を連れて海鳴公園にやってきた。

「でも、公園からどうやって行くのよ？」

「さあ、それよりも僕は今朝の占いの結果が不安でならないんだけど」

繋がりがわからない西麗の疑問に対し、朝の占いの結果が気にな

り少し元気のない龍清。

二人がそんな会話をしていると……

「「おーい！」」

突然二人を呼ぶ声がしたので振り向くと、そこにはフェイトとテ
イアナがいた。

「すみません。待ちました？」

「ううん、私たちも今来たところだし」

時間通りとはいえ、待たせてしまったことに龍清が謝るが、フェ
イトは気にしていないという風に返す。

「ところでさ、このままどうやっていくの？」

次に西麗がずっと疑問に思ってたことを聞く。

「大丈夫よ。準備はできてるから、このまま隊舎に転移するわよ」

「「へー」」

「じゃ、行くよ」

「「はい！」」

「クキューー！」

「「ニャーー！」」

二人と二匹が元気よく返事すると、四人はそのまま転移された。

そして所変わり、ここはミッドチルダの首都クラナガンの一角にある、旧機動六課隊舎。

かつて、この地で起きた大事件を解決した伝説の部隊の拠点だったここに、そのかつての隊員たちが集結していた。

管理局が捜査している、消滅事件担当の特別部隊の結成式がここで行われるのだ。

そして部隊を率いるのが……

「この部隊に入る皆、よろしくな！」

ご存知、八神はやてだった。

「知つての通り、今起きてる消滅事件を解決するために、当部隊は編成されました。かつての皆も、新しくここに来た皆も、事件解決のために共に手を携え、頑張っていきましょう。っと、機動六課の時と同様、長いと嫌われるので、以上、特務六課部隊長 八神はやての挨拶でした！」

「それにしてもすごいね、ミッドチルダって」

「本当。SFだよな、ここまで来ると」

結成式の終了後、龍清と西麗は結成式が行われたロビーを見渡していた。

西麗は見学と称して施設内をうろつこうとしたが、龍清が知り合いないのに勝手に動いたら迷子になると尤もな意見をしたため、ロビーでうろつくに留まっていた。

「だけど、浮いてたよね僕たち。みんな制服なのに、僕たち思いつきり私服だったし」

「うん、さすがにちょっと気まずい気がした」

そう、当然管理局の制服など持っていない二人は、思いつきり私服だったのだ。

一週間の間にもらわなかったのか？ と言う疑問が飛んできそうだが、囑託とはいえ、一応二人は民間協力者という事で話に通っていたため、特にその辺りは言及されず、制服も渡されなかった。

最も、組織の部隊にいる以上それは不味いんじゃないか？ と言

うことで、後日制服が渡されることになっているそうだが。

「あっ、いたいた」

「二人とも！ こっちこっち！！」

すると、二人を呼ぶ声があった。

声の主はティアナとスバルで、その近くには、スバルと頭一つ違う位の赤髪の少年と、少年と同じくらいか少し低いぐらいのピンクの髪の少女が一緒にいた。

「スバルさん！ ティアナさん！」

「やっほー！」

二人に気付いた龍清と西麗も集まる。

「ちゃんとここにいたのね、西麗辺りが、探索に行こうとか言っと思っただけど」

「言いましたよ、でも見事に阻止しました」

「それはそうと、やっぱり乗ってるのね」

「えっ？ ああ、春青のことですか？」

そう言っつて龍清は頭に乗ってる青龍の春青を撫でる。

「それに西麗も、ちゃんと白秋を抱きかかえていますし」

「なんか好きみたいなのよね。あたしも好きだけど」

「いいなあ、後でアタシも抱いて良い？」

いつものように白虎の白秋をだいてる西麗を見て、スバルが自分も抱いていいか聞く。

「んー、オツケーだって」

「本当！ じゃあ、お言葉に甘えて」

西麗が念話で確認すると、そのまま白秋はスバルに抱かれる。

「うわー、凄いもこもこで気持ちいい。それにそんなに重くもないし、これ癖になるかもー」

相当お気に召したらしく、スバルはそんな言葉を口にするのだった。

「まったく、あんたは……」

「まあ、当人たちが喜んでるんですし、良いでしょう。ところでティアナさん」

「何？」

「こちらのお二人は？」

相方の締めりのない様子にあきれるティアナに、龍清は視線を一緒にいた少年と少女に向けて聞いてくる。

「ああ、まだ紹介してなかったわね。この二人はエリオとキャラ、前いた部隊の仲間よ」

「エリオ・モンドリアルです」

「キャラ・ル・ルシエです。この子はフリードっていいいます」

「クキユ」

ティアナの紹介に、赤髪の少年エリオと、ピンクの髪の少女キャラと白い飛竜のフリードリヒが挨拶を交わす。

「僕は東郷龍清」

「秋西麗よ、よろしくね」

「はい！」

「よろしくお願いします！　って、フリード？」

「ん？　春青？」

挨拶を交わしていると、フリードと春青の様子がおかしいことに、キャラと龍清が気付く。

よく見ると、二匹はお互いを見つめあっていた。
やがて……

「クキユ」

フリード、右の翼を上げる。

「春青、左の翼を上げる。」

「クキユ」「クキユ」

今度はフリード、左の翼を上げる。

「春青、右の翼を上げる。」

「クキユ」「クキユ」

最後に二匹、大きく翼を上げる。

そんな動作を一しきり終えると……

「クキユ」「クキユ」

お互いの顔を摺り寄せあっていた。

「なんか、仲良くなったみたい」

「ですね。良かったねフリード、お友達ができて」

「クキユ」

キャラロの言葉に、嬉しく鳴声を上げるフリードだった。

「あつ、皆ここにいたんだ」

六人が知り合い、他愛のないことで談笑していると、栗色の髪をしたサイドポニーの女性が語りかけてきた。

「なのはさん！」

「お久しぶりです」

「うん、スバル、ティアナ、久しぶり」

二人の言葉に、なのはと呼ばれた女性も嬉しそうにその挨拶を返す。

「エリオとキャラも久しぶり、元気にしてた？」

「あつ、はい」

「元気にしてました」

そして、エリオとキャラも少し緊張気味ながらも、嬉しそうに返す。

そして四人にあいさつを終えたなのはは、龍清と西麗に視線を向

ける。

「二人が、龍清君と西麗ちゃんだね」

「あの、貴方は？」

「私は高町なのは。フェイトちゃんとはやてちゃんのお友達」

「んで、私たちを教導してくれた人」

「ってことは、貴方がm……むぐう」

西麗が何か言おうとした途端、ティアナと龍清がその口を塞いだ。

(ちょっと西麗、初対面の人にそれは失礼だよ！)

(えっ？ だって、前にティアナが……)

(いい西麗。なのはさんの前でその言葉は禁句よ。行ったら最後、桜色の極光が襲ってくるわよ)

(……わ、解った)

念話で会話しながらも、ティアナの表情からマジだと悟った西麗は、取り敢えず言わないと言う。

「さて、感動の再会と親睦を深めるところ悪いんだけど、皆デバイスは持つてるよね？」

「」「」「」ばっちりです……！」「」「」

なのはが確認すると、四人は各々のデバイスを見せる。

「えっと、僕たちは、その……」

「うん、フェイトちゃんから聞いてるよ。二人はその子達がデバイスなんでしょ？」

「はい」

返答に困る龍清だったが、すでになのはは事情を聴いていたらしく、ほっと一安心する。

「それじゃ、皆あそこに行こうか」

「」「」「はい……」「」「」

「二人もついてきてね」

「あっ、はい」

「はい」

そう答えると、龍清と西麗はなのは達の後をついて行った。

そしてついた場所は……

「ここは？」

「やけにでかいつて言うか、広いつて言うか」

二人は海の上にある、でかい人工島のような場所に来ていた。

「ここはね、昔私たちがなのはさんの教導を受けてた時に使ってた、訓練用のシミュレーターよ」

「えっ？　これがですか？」

ティアナの答えに、二人は目を疑う。

「どう見ても唯の鉄の塊が浮いているようにしか見えなんだけど」

「まあ、見てて」

スバルに言われ、暫く待っていると、味気なかった鉄の踏み場が、一瞬にしてビルの廃墟群のような光景になった。

「うわー！」

「すーすー……」

「ま、自然な反応よね。私たちも、初め見た時は驚いたし」

「本当だよねー」

「「ふふ」「

目を丸めて驚く二人の反応に、当時を思い出したフォワード人は苦笑する。

「さて、皆揃ってるね」

するとここで、なのはがやってきた。

「なのはさん。今日は何をするんですか？」

「そうだね、まずは昔の感覚を取り戻すために模擬戦といきたいところだけど、その前に二人の実力を確かめておきたいかな？」

「えっ？ 僕たちのですか？」

「うん。一応、嘱託試験の模擬戦の映像は見せてもらったけど、やっぱり直接見ておきたい。だから二人には、また模擬戦をしてもらうよ」

「良いですけど、相手は誰ですか？」

「そうだねー。やっぱり、スバルとティアナ……」

「いや、私がやるっ」

なのはが模擬戦相手を選定していると、どこからともなくまた声が聞こえてきたので振り向くと、二人の女性が立っていた。

一人はキャラと同じピンク色の髪のポニーテールをした凛とした女性。

もう一人は、紅い髪をした三つ編みの少女だった。

ポニーテールの女性はスバルたちと同じ制服だが、紅い髪の少女はなのはと同じ制服を着ていた。

「よっ、お前ら」

「シグナムさん!!」

「ヴィータさん!!」

これにフォワード陣が素早く反応し、二人の女性の名前を言った。

「えっと、お知り合いですか？」

「うん。まずこちらがシグナムさん。そして、こっちが私の同僚のヴィータちゃん」

「お前のことは主から聞いている。それとアギトからな」

「主??」

「はやてちゃんのことだよ」

「へー」

挨拶もそこそこにすませた二人だが、何故だが龍清は、シグナムが登場してから妙な悪寒を感じずにはいられない。

「東郷だったか？　まずお前の相手は私がしよう」

「んで、その後アタシがお前の相手をする」

と、シグナムは龍清を、ヴィータは西麗を指差した。

「えっと、どうして」

「主とアギトから聞いたのだが、お前は剣が使えるそうだな」

「剣？　もしかして、破山剣のことですか？」

シグナムからの問いに、龍清は思い出すように答える。

「いや、でも僕は術主体で、剣はあんまり使いませんよ？」

「だとしてもだ、同じ剣を使うものとして、貴様と戦ってみたいと思っただけ」

「いや、でも……」

「ええい！　男がいつまでもぐちぐち言うな！　ほらいくぞー！」

「あああああああああ……！！！！」

どうにか断ろうとするも奮闘むなしく、シグナムに首根っこを掴まれて龍清はそのまま連行されたのだった。

「にははは。相変わらずだね、シグナムさん」

「まったく、あのバトルマニア」

そんななのはとヴィータの呆れ声が聞こえたのかなんとか。

おまけ

龍清がシグナムに連行された後。

「あー、なのはさん、ヴィータ……さん？」

「何？ 西麗ちゃん」

「あの人、バトルマニアって」

「言葉通りの意味だよ。シグナムは戦うのが好きなんだ。って言うか、何でアタシは疑問形なんだよ？」

「いや、だって、あたしよりどう見ても年下だし」

「アタシは大人だ！」

「いや、そんな背丈で言われても説得力な……」

「てめえ、アイゼンの頑固な汚れになりてえか？」

「………すみません」

第九話 特務六課編成 龍清の受難。(後書き)

自分としては、今までの中でかなり考えて作りました。次は龍清の受難、バトルマニアとの模擬戦です。

ご意見、ご感想、ありがとうございます。

そして龍虎の名前は楚良様のを使わせていただきました。他にも名前をご応募いただいた皆様、本当にありがとうございます。

第十話 模擬戦その一 対決！ 無敵青龍VS烈火の将

廃ビルが立ち並ぶ空間の中に、その二人は立っていた。

片やピンクのポニーテールを風に揺らす凜とした顔つきの女性、シグナム。

片や頭に青い龍を乗せた黒い髪の少年東郷龍清。

なのはに指示に従い、龍清の実力を測る為に模擬戦を行おうとしているところだ。

「はあ。今朝の占い、それにはやてさんの言葉の意味が漸く解ったよ」

「なにをぶつぶつ言っている。早くセットアップしろ」

ため息をつきながら呟く龍清に対し、業を煮やしたのが、シグナムが急かす。

すでに彼女はベルカ式の防護服「騎士甲冑」に身を包み、その手にはデバイスである愛剣「レヴァンティン」が握られていた。

「まあ、何時までもぐちぐち言っても始まらないか。いくよ、春青」

「クキューー!!」

龍清が呼びかけると、やる気満々とはかりに春青が鳴声を上げる。

「必神火帝！ 天魔降伏!!!」

掛け声とともに龍清と春青は光に包まれ、それが晴れると、鎧をまとった姿になっていた。

シグナムはその姿を見て、一言感想を述べる。

「ふむ、試験の映像を見せてもらった時も思ったが、やはりお前と秋のその姿は騎士甲冑に似ているな」

「えっ？ バリアジャケットじゃないんですか？」

シグナムの言葉に素朴な疑問を呈した龍清が聞いてきた。

「魔法に二体系あることは知っているな？」

「はい、ミッドチルダ式とベルカ式、でしたっけ？」

「そうだ、魔力で構成する防護服を、ミッド式ではバリアジャケット、ベルカ式では騎士甲冑と呼ぶ」

「成程」

「両者に呼び方以外に差異はないが、お前たちのそれは、我々の騎士甲冑に似ている」

「そうでしたか」

「まあ、無駄話はここまでだ。早く剣を構える」

「えっと、どうしてもですか？」

「どうしてもだ」

「はぁ、解りました」

観念した龍清は、尻尾の先端にある宝玉を取り出す。

「破山剣召喚！」

そして掛け声とともに、宝玉は龍王破山剣に姿を変える。

「これでいいですか？」

「ああ、構わん。高町、始めてくれ」

「はい。それでは二人ともよい……始め！！」

シグナムに催促され、なのはが模擬戦開始の合図を告げる。

そして、それと同時に一気にシグナムが距離を詰める。

「い、いきなり……！」

近づいてくるシグナムに驚きながらも、龍清は破山剣でその一撃を防ぐ。

ぶつかり合った刃は火花を散らし、鏝競り合いとなる。

「い、いきなり来ますか？ こういう場合、様子見るものじゃ……」

「生憎、貴様の戦闘データは見せてもらっていたのでな。しかし、

本当に素人か？ 私は全力で斬りかかったはずだが？」

「まぐれですよ、まぐれ！！」

そう言つて龍清は一気に押し出し、シグナムと距離を取る。

「火招牌！」

再び近づくであろうシグナムを警戒し、牽制の為に赤い符を投げる。

符はやがて火球となってシグナムに襲い掛かる。

「甘い！！」

しかし、飛んできた火球を、シグナムは見事な太刀筋で切り捨てる。

「嘘！」

「驚いてる暇はないぞ！」

再び高速で近づいてきたシグナムに、龍清は回避で対応する。

直撃こそしないが、刃が鎧に掠る。

そして龍清は再び距離を取って術で攻撃しようとする。

だが……

「レヴァンティン、カートリッジロードー！」

《Schlange For》

「シユランゲバイセン!!」

レヴァンティンから空の葉莢が排出されると、レヴァンティンが鞭のような形となり、刃が撓りながら龍清に襲い掛かる。

「嘘! うわ!?!」

そのまま刃は龍清に直撃、龍清はそのまま吹っ飛ばされ、廃ビルに叩きつけられた。

「龍清さん、大丈夫でしょうか?」

「シグナムが相手だからね、非殺傷設定は掛けてるだろうけど、あれはかなり本気だったね」

模擬戦の様子を見て、龍清を心配するエリオと、先ほどの様子を冷静に分析するフェイト。

「あれがフェイトちゃんとティアナが言ってた、龍清君の魔法?」

「はい、陰陽術と言っていましたけど、知ってますか？」

「私はよく知らないな。確かに地球にそういうのはあるけど」

「まあ、龍清のは特別らしいけどね」

なのはとティアナの会話に、西麗が補足を付け加える。

「まあ、それはさておき、龍清大丈夫？ あのシグナムって人、結構強いけど」

「そりゃそうだ。近接戦闘はベルカの騎士の得意分野、しかもシグナムはアタシたちの中でもトップクラスの実力を持つんだ。新人に負けるような奴じゃねえよ」

ヴィータの言葉を聞いた西麗は、少し考えるようなしぐさの後に言った。

「まあ、龍清もただで負ける気はないでしょうがね」

「あつ、龍清が出てきた」

ティアナがそう言った先には、廃ビルに建ちこめる噴煙の中から現れた龍清が映っていた。

「げほっ、げほっ、強いなあ、でももうちょっと手加減してほしいか
った」

シグナムに吹っ飛ばされた龍清は、噴煙の中から姿を現しながら
そう呟く。

(やっぱり接近戦じゃ分が悪い、かといって、中途半端な距離も効
果はなさそうだし……)

これまでの戦闘で得た情報を冷静に分析する。

まず、自分は術主体で距離を取ったの戦いが得意だが、接近戦は
ほとんど西麗に任せっきりだったのであまり得意ではない。

対しシグナムは、近接戦を得意としており、こちらの戦法をすで
に知ってか、距離を詰め、大技を放つ機会を与えてくれない。

加えて、先ほどの攻撃で中距離も攻撃可能であることを知ったた
め、半端に距離をとっても先ほど同様、シュランゲフォルムの餌食
となるのが目に見えていた。

(……こうなったら、まだ未完成だし、通じるかどうか解らないけ
ど、あれを試してみよう)

ある秘策を胸に秘め、龍清は再び攻撃を仕掛ける。

「龍王炎符水!!!」

炎符水をシグナムへと放つ。

「そんな攻撃が当たると思ってるのか！」

攻撃事態は変則的な軌道だったが、やはりシグナムには当たらなかった。

「悪いがそろそろ決めさせてもらおう！」

そう言うとシグナムは一気に近づいてくる。

(準備は終わった。勝負は一瞬、いくよ、春青!!！)

(クキューー!!！)

春青と念話で相槌を打つと、龍清はその場を離れる。

「逃がすか！」

無論、それを逃すまいとシグナムも追いかける。

「もらった！ 紫電一閃!!！」

距離を詰めたシグナムは、レヴァンティンに炎を纏い、得意の技、紫電一閃を放つ。

「!!の!!！」

負けじと、龍清も破山剣で攻撃を防ぐ。

「私の渾身の一太刀、その程度で防げると思っな!!」

「思ってませんよ!!」

「何!?!」

鏢競り合いの状態から、龍清は蹴りをシグナムの腹部に叩きこむ。

そのまま吹っ飛ばされたシグナムは空中で体勢を立て直す。

「今だ!!」

そして、今を好機ととらえた龍清は、そのまま印を組む。すると変化は、シグナムの真下で起こった。

「な、何だ!!」

突然、三本の光が天へと昇る。

そして、そこに三角柱の結界が出来上がり、そのままシグナムを包み込む。

「金式の新しい結界術、まずはうまくいった」

「ほう、流石にこのままやられる奴ではなかったか。だが、何時までも私を閉じ込めておけると思っな!!」

そう言っつと、レヴァンティンから再び空薬莢が飛び出し、刀身に炎が灯る。

「紫電……一閃!!」

シグナムは紫電一閃を放ち、龍清が設置した結界は簡単に砕け散る。

しかし、すでにその時、龍清が術の発動を行おうとしていた。

「何！」

「結界は時間稼ぎ、この術を発動するための布石です！」

そう言って一枚の符を上空に投げると、そこに八卦陣が現れる。

「龍王の天雷、集いて我が敵を討て！」

そう言つと、八卦陣に蒼い雷が集い始める。

「砲撃！ いや、収束魔法か！？」

シグナムがその様子を見て驚くが、時すでに遅しだった。

「龍王、蒼雷砲！！！」

掛け声とともに、蒼く太い雷がシグナムの頭上に落ちる。

蒼い雷の着弾点では大爆発が起こり、近くの廃ビルの壁がごっそり消滅するのだった。

「やったかな？」

未完成とはいえ、先ほどの術を喰らえば、いくらシグナムが百戦錬磨の強者であっても、無事では済まないだろう。

しばらくの沈黙が、その場を支配する。
だが、その沈黙は不意に破られる。

「翔けよ、隼！」

その掛け声とともに、噴煙の中から何かが一直線に飛んできた。

「がっ!？」

龍清の鳩尾には、一本の矢が命中していた。

貫通こそしなかったが、その衝撃に、龍清はそのまま気を失い、地上へと落ちて行った。

だが、最終的に落下することはなかった。

「もう、シグナムさん、やりすぎですよ」

「すまん、高町。少し熱が入ってしまった」

落下しかけていた龍清を助けたのは、純白に青いラインの入ったバリアジャケットを身に纏ったなのはだった。

「しかし、最後のあれには驚かされたな」

「そうだね、今はまだまだだけど、きっと招来、スバル達に劣らないくらい強くなりますね、この子」

(なのは、こっちは準備終わったぜ)

シグナムと会話していると、念話でヴィータが準備が終わったこ

とを伝える。

(うん、ちょっと待っててね。龍清君を医務室に運ぶから)

(了解、さっそく患者第一号だな)

(そうだね)

(高町、向こうに着いたら、後は私が運ぼう)

(はい、お願いします)

運んでる途中、なのははシグナムと念話で会話しながらディスプレイを覗き込む。

そこには、ぶんぶんとハンマーを振るヴィータと、準備運動をする西麗がそこに写っていた。

第十話 模擬戦その一 対決！ 無敵青龍VS烈火の将（後書き）

あれ？ ちょっとバトルマニアさが出てない気がする。

でも、あんまり出すのも問題な気がしたのも事実、でもこれで良いのか？ と思うのもまた事実。

やっぱり戦闘描写がうまくかけてるか心配です。

次はヴィータ対西麗、またパワーとスピードの対決です。

ご意見、ご感想、ご指摘、是非とも送ってください。

第十一話 模擬戦その二 激突！ 最強白虎VS紅の鉄騎

龍清とシグナムの模擬戦が終わったその頃。

シミュレーター別の場所でもまた、模擬戦が行われようとしていた。

片方は紅い三つ編みの少女、ヴィータ。

なのはと同じ白を基調とした教導服ではなく、紅い騎士甲冑に身を包み、愛用のハンマー型デバイス「グラーフアイゼン」を二回、三回とバツティングのように振る。

もう片方は黒髪のポニーテールを風に揺らす少女、西麗。

戸惑っていた龍清と違い、こちらは既に白虎「白秋」と融合を済ませており、白と黒の虎模様の鎧を着て準備運動をしていた。

《二人とも、お待ちせ》

準備運動をしている二人に、なのはから通信が入る。

「おお、どうだ？」

「どつちが勝ちました？」

二人は決着がつく前に模擬戦の準備を行っていたため、二人の勝敗は知らない。

なので二人はなのはが通信に出るなり模擬戦の結果を聞いてきた。

《良い所は言ってたんだけど、シグナムさんが勝ったよ》

「あちゃー、龍清負けちゃったのか」

《でも本当にいいところまでは行ってたんだよ?》

「へー。ま、あいつがそこらの新人りに負けるとは思えねえけどな」

《あはは、それで二人とも、準備は良い?》

「おお」

「いつでも」

模擬戦の結果を簡潔に答えた後、なのはは二人に準備ができてるかを聞き、二人はお互いに向き合いながら肯定の言葉を放つ。

《それじゃ、よーい……始め!!》

そして、合図とともに模擬戦が始まる。

「先手必勝!!」

合図と同時に、西麗は一気に駆け出す。

「甘えんだよ！」^{あめ}

そう言つとヴィータは懐からビー玉ぐらいの大きさの銀色の球を取り出す。

そして、紅い光がそれを包み込むと、球は野球のボールぐらいの大きさになる。

「いくぜ！ シュワルベフリーゲン！！」

そう言つて、ヴィータはグラーフアイゼンで球を叩く。
すると、叩かれた球は曲線を描きながら西麗に向かっていく。

「おお！？ ほっ、よっと」

いきなりの事に驚くが、西麗はそれを鮮やかな身のこなしでひよひよいかわす。

「はっ！！」

そして時間差で飛んできた最後の一発を避けられないと判断したのか、目の前にやってきた球を手刀で叩き落とす。

しかし、途中で動きを変えたため、近づいていたスピードは一気に失速していた。

「もらったー！」

「何ですと!?!」

そして、西麗に一気に近づいたヴィータが、一気にアイゼンを振り下ろす。

「ほわぁ!?!」

振り下ろされるアイゼンを、器用な動きでかわす。

「まだ終わりじゃねえぞ!」

「のわ! ほっ! 危なっ!」

ハンマーの一撃一撃は大振りだが、その分当たれば大きい。西麗は距離を取りたかったが、ヴィータの猛攻が激しく、なかなか距離を取る動作に移れない。

「ああもう! 虎王飛拳!!」

しびれを切らし、至近距離から虎王飛拳を放つ。とっさの行動だったが、これによりヴィータの猛攻が一瞬鈍り、その隙に距離を取る。

「ふう、やってくれますね」

「お前が接近戦タイプだったのは、この前の試験の映像を見せてもらって解ってるからな。一気に懐に飛び込もって魂胆だったろうが、まっすぐ突っ込んできたから迎え撃ちやすかったぜ」

「成程、なら、最初っから本気でいくとしますか! 虎王神速槍

「!!」

西麗は手加減なしでいくと宣言すると、神速槍を出現させ、それを両手で保持し、構える。

そして、両社はしばらくにらみ合った後。

「「はあああああああああ!!!!!!」」

一気にぶつかり合った。

そして屋外では、なのはをはじめとするメンバーが、龍清とシグナムの模擬戦の時と同様、二人の模擬戦の様子を見ていた。

「真正面から突っ込むなんて、何か昔のスバルを見てるみたいね」

「うう、エリオ、キャラ、ティアが酷いよー」

「ご、御免なさい。私にはフォローできません」

「だ、大丈夫ですよ！ 僕もそうでしたから!!」

「何のっ!!」

一方、両者の戦いは一進一退だった。大振りのヴィータの攻撃をかわすと、西麗はすかさず神速槍で突きを繰り出す。

しかし、ヴィータも防御魔法でそれを防ぎ、再びアイゼンで攻撃を繰り出す。

この状況が続いており、いわゆる千日手の状態となっていた。

「このっ！ そりゃそりゃそりゃ!!」

だがここで、西麗は神速槍での連続突きを繰り出す。

「ちっ、アイゼン！」

P a n z e r s c h i l d

グラーフアイゼンが受け答えすると、目の前に紅いシールドが現れる。

「その程度で、防ぎきれると思わないで!!」

どんどん突き出される神速槍での攻撃に、ヴィータのシールドに罅が入り始める。

「なっ!?!」

ヴィータはその様子に少し驚いたが、すぐに回避行動をとったため、シールドは破られるが、攻撃が当たることはなかった。

「やったな、アイゼン！」

R a k e t e n F o r m

そう言つと、グラーファイゼンから空薬莖が排出され、その形状も変わる。

ハンマーの形をしているのは変わらないが、片方に四角錐状のスパイク、もう片方にロケットブースターのようなものがついていた。

そして再び空薬莖が排出されると、ロケット部分が噴射し、ヴィータが駒のように回転し始める。

「あつ、何かイヤーな予感……」

そしてその予感は現実のものとなるのだった。

「いくぞ！ ラケーテン、ハンマー！！！！！」

ロケット噴射で勢いよく回転しながら襲ってきた。

「おわっ！？」

思わず神速槍で防ぐ、だが……

「それで防げると、思ふなよ！！！」

その言葉通り、神速槍はラケーテンフォームのグラーファイゼンに折られ、そのまま西麗本人に直撃する。

「がふっ!?!」

直撃を喰らった西麗は、そのまま地面に叩きつけられる。

「あれっ、少しやりすぎちまったか?」

思わず本気になってしまったが、冷静になってみてやり過ぎたと思っただ。

「おーい、大丈夫かあ?」

噴煙の中にいるであろう西麗に、ヴィータは声をかける。

「痛た、そんなこと言う位ならもうちょっと手加減しなさいよ!」

そして噴煙の中から声が聞こえた。

「そんな大口叩けるならまだ大丈夫だな。んじゃ、これで止めとい
くぜ、アイゼン!」

G i g a n t F o r m

空薬莢が二発排出されると、グラーフアイゼンが巨大なハンマー
となった。

その大きさは通常形態よりはるかに大きく、ヴィータの身長を軽
々と越えていた。

「ちよ! そんなのあり!?!」

規格外としか言いようのない大きさに、西麗は声を上げる。

「轟天、爆碎！」

しかし、そんな言葉など露知らず、ヴィータはハンマーを大きく振りかぶる。

「だったらこつちも。旋風裂穿！」

それに対し、西麗も右手に風を集め、それを纏う。

「ギガント、シューラーーク！」

「虎王、裂空拳！」

そして、お互いの叫びと共に、ヴィータはグラーファイゼンを振り下ろし、西麗は右手を強く突き出す。

お互いの力は拮抗し、二人はさらに力を入れる。

「はあああああああああ！！！！！！」

そして暫くして、二人のいる場所で大爆発が起こる。
轟音と爆煙が立ち込める中、その中で立っていたのは……

「はあ、はあ………」

西麗だった。

「や、やった……！！！！！！」

ギガントシユラクを打ち破ったことで、西麗は勝利したかのごとく雄たけびを上げる。

しかし、それがいけなかった。

「……がふっ!？」

突然、後頭部を衝撃が襲い、そのまま西麗は意識を失ってしまったのだった。

「油断大敵だな」

西麗に最後の止めを刺した張本人、ヴィータはグラフアイゼンをぶんぶん振りながら言う。

「お疲れ様。ヴィータちゃん」

するとそこへ、なのは達がやってきた。

「おお。スバル、ティアナ、こいつを医務室に運んどいてくれ」

「はい」

ヴィータの言葉に二人は返事をして、西麗を医務室に運ぶ。

「それで、彼女はとうだった。ヴィータ教導官殿？」

少し悪戯っぽく、フェイトはヴィータに聞いてくる。

「昔のスバル達みてえだったな、まだ粗削りなところはあるけど、そこらの新人よりはいい動きしてたぜ。ま、ちよっと動きが直線的だったけどな」

「そうだね。龍清君も、とっさの機転と言つか、術を出すタイミングが絶妙だったしね」

二人の教導官は、それぞれの長所と短所を的確に当てる。

「取り敢えず、二人は御眼鏡に適ったってことかな？」

「ま、そういうことだな」

「ふふ」

「後は、これは前から思ってたことなんだけど」

ここでフェイトは、懸念していたことを話す。

「……そうだね、今回の模擬戦でも、ヴィータちゃんにやられてたしね」

「やっぱ必要かな？ あの二人にも」

「まあ、その辺りは、シャーリーと相談してみるよ」

三人でそんな会話をしている。

《なのはちゃん、フェイトちゃん、ヴィータ、ちょっとええか？》

突然、三人のもとに通信が入る。
通信の主ははやてだ。

「はやてちゃん。どうしたの？」

《いやな、三人に、ちょっとお願いしたいことがあってな》

「お願いしたいこと？」

《まあ、そんな大したことやないんやけど……》

そう言っではやては、三人にお願いを話す。

《……っという訳なんや》

「成程……良いよ、それくらいなら」

「うん、二人にも慣れてもらおうと思ってたし」

《ほな、準備はロングアーチスタッフがすでに始めてるから、三人ともよろしくな》

「……オツケー！」

こうして、特務六課総出で、あることが準備されていたのだっ
た。

第十一話 模擬戦その二 激突！ 最強白虎VS紅の鉄騎（後書き）

次は模擬戦の後日談、そしてある大イベントを行います。

ご意見や感想、お待ちしております。

第十二話 親睦会と言ひ名のChaos

「う、うん……あれっ？　ここは……」

模擬戦終了後、意識を取り戻した龍清は、周りを見渡しながら記憶をたどる。

「……そっか、僕、最後の最後でやられたんだっけ。ってことは、ここは医務室？」

シグナムとの模擬戦の最後で、突然飛んできた矢を喰らって、そこで意識を失ったことを思い出し、龍清は冷静に場所の特定を行う。白い床と天井が見え、自分もまた、床や天井と同じ白いシーツのベッドの上に寝かされていた。

「うーん、むにゃむにゃ……」

「あっ……」

そして隣のベッドでは、西麗が頭に大きなたんこぶを作って寝ていた。

「西麗も、負けたんだね」

「むにゃむにゃ、もう駄目、食べられない……へへへ」

「……」

何やら楽しそうな夢を見ているようなので、取り敢えず放ってお

くことにした。

「ん？」

そして、自分の足元に何か重みを感じるので視線を落としてみる
と。

「クキユウ……」

自分に寄り添うように春青がいた、どうやら眠っているようだ。

「そうか、心配してくれてたんだ。君だって、疲れてるはずなのに
……」

自分の事を気にかけてくれていたであろう春青の頭をゆっくり撫
でる。

「ありがとう」

「……クキユ？」

すると、さっきまで静かに寝ていた春青が目を覚ました。

「キユ？ ……キユー……！」

そして龍清が目を覚ましたことを確認すると、すぐさま飛びかか
ってきた。

「うわっ！ ちょ、くすぐりたいよー……！」

「キユー、キユキユー!!」

よほど心配していたようで、龍清の言葉を無視して、春青は擦り寄ってくる。

そんな春青にくすぐったさを感じつつも、彼も抱きしめて離さない。

「うにゅ？ チャーシューは？」

するとここで、寝ぼけ眼で西麗も起きてきた。

「おはよう、どうだった？」

「うん？ えーつと、ヴィータさんのでっかいハンマーを防いで、間一髪って思ったら、後ろになんか衝撃が……」

「それって、油断したところをやられたって事じゃないの？」

龍清の的を射た発言に、西麗は顔を真っ赤にする。

「う、うるさいわね！ そういうアンタだって、油断してやられたんじゃないの!!」

「うっ、それは……」

顔を真っ赤にして反論してきた西麗に、凶星を突かれたために、龍清も言葉に詰まる。

「し、仕方ないでしょ。剣での接近戦しかしてこなかったし、それに未完成とはいえ術も決まったから。倒すとまではいなくても、

反撃できないくらいダメージは負わせたかなあ、なんて思ってたらいきなり矢が飛んできて……」

「アタシだって、いきなりハンマーがでっかくなって、押しつぶそうとしてきたのよ！ あれを防ぐのに手いっぱいだったんだから、気がそれるのも仕方ないでしょ……！」

お互い負けた原因を話し合いながら口論を続ける。

「ふふふ、シグナムとヴィータちゃんに負けたのに、ずいぶん元気ね」

「全くだ」

するとそこへ、白衣を着たボブヘアの金髪の女性と、蒼い毛並みの大型の犬がやってきた。

「あれ、貴方達は？」

「そっか、会うのは初めてだったわね。私はシャマル、この六課で、医務を担当しているの。それで、こっちはザフィーラ」

「よろしくな」

「犬が喋った!?!」

やってきた一人と一匹、シャマルとザフィーラが自己紹介を終えると、ザフィーラが喋ったことに龍清と西麗は驚きの声を上げる。

「……狼なのだが」

「あつ、すいません」

「って言うか、突っ込むところこ!？」

「ふふ、あつ、二人とも、体の調子は如何？」

ザフィーラとプチ漫才を繰り広げた二人に、シャマルは身体の調子を聞いてくる。

「あつ、大丈夫です」

「そう、でも念のために検査をするから、また横になってもらえるかしら？」

「はい」

「ほーい」

「キュー」

「ウニヤ？」

そう答えた後、二人は再び横になる。

その際、寝坊助が一匹漸く起きたようだったが。

「……よし、大丈夫みたいね。二人とも、もう良いわよ」

「「はい」」

少しして検査が終わり、再び二人は起き上がる。

「あっ、二人とも」

「気が付いたんだ」

するとそこへ、なのはとフェイトがやってきた。

「体の方は如何？」

「大丈夫です。さっき検査してもらいました」

「もつぴんぴんです！ いえい！！」

龍清は説明しながら、西麗はVサインを作って元気をアピールする。

「そっか、じゃあ早速で悪いんだけど、一緒に来てくれるかな？」

「えっ？ どこにですか？」

「それは着いてのお楽しみ。シャマル達は？」

「私は遠慮しておくわ。まだ確認することがあるし、ザフィーラの健康チェックもしないといけないから」

「すまんな」

「解った。それじゃ、二人とも、ついて来て」

「あっ、はい」

こうして、四人は医務室を後にした。

「さ、着いたよ」

二人が連れてこられた場所は、食堂だった。

だが、そこは様々な装飾が施されており、テーブルには大量の料理が並べられていた。

そして、六課の局員の全てが、ここに集結していた。

「あっ、来ましたよ」

「なのはさーん！ フェイトさーん！」

「ほら、二人もこっちに来なさいよ！」

すると、ある一角に集まったフォワード陣。

エリオが四人を確認し、スバルが手を振ってなのは達を呼び、ティアナが龍清と西麗を呼ぶ。

「あの、これは一体何ですか？」

フォワード達のいるところへ集まった後、龍清は一体何をしているのかを聞いてみる。

「親睦会だよ」

「親睦会？」

「ほら、私たち機動六課にいたメンバーだけならともかく、龍清達みたいに今日集まったメンバーもいるから、親睦を深めようという事で、開くことになったの」

「へー」

返ってきたなのはの答えに、二人は一度は首を傾げたが、フェイトの説明に納得する。

「まあ、はやてちゃんがイベント好きなのも、主な理由の一つなんだけどね」

「……あはは……」

「ああー」

なのはの言葉に、フェイトを含めたフォワード陣は乾いた笑を浮かべ、龍清と西麗はどこか納得した声を出す。

「そう言えば、はやてちゃんは？」

「八神部隊長でしたら、料理を並べ終えて、一緒に談笑してたんですけど。」準備があるから」と言って、どこかに行ってしまうた

当の主催者であるはやての行方を聞くと、エリオがそれに答える。

「むぐむぐ、それにしても、やっぱり部隊長の料理は美味しいですね」

「えっ！ これ、はやてさんが作ったんですか!？」

食べながら言うスバルの言葉に、龍清は驚きの声を上げる。

「はやてちゃん料理がすごい得意だからね」

「ヴィータ副隊長は、「ギガうま」って言ってたわね」

「いや、実際その言葉が当たりなんじゃないかな。あたしも中華な自信あるけど、これはすごいクオリティ高いよ」

「本当ですよねえ」

そんなこんなで、スバル、エリオ、西麗は料理を堪能し。

「クキユ〜」

「キユ〜、キユキユ〜」

「二匹とも、すっかり仲良しになったね」

「そうですね」

互いにじゃれ合う龍二匹を見て、龍清とキャロは嬉しそうに笑顔がこぼれていた。

「皆、お待たせー」

八人で楽しく談笑していると、そこに主催者であるはやてがやってきた。

何やらいろんなものを持ってきて……

「はやてちゃん。何なのそれ？」

「ふふふ、ちょっとしたゲームをこの九人でやろうと思ってな」

『ゲーム？』

疑問符を浮かべる八人に、はやてはゲームの内容を伝える。

「それは……王様ゲームやー!!」

そう言って取り出したのは、「王」と書かれた割り箸。

「王様ゲーム……ですか」

「そや、まあ大丈夫や、節度わきまえれば、十分楽しいから、ほら皆、座って座って」

どこからともなくシートを取り出して広げ、参加者たちはその上に座る。

「ルールは知ってるな。一応付け加えると、行き過ぎた命令は無しやでー!」

「そんなことしそうなのははやてちゃん位だよ」

「うんうん」

「うう、二人とも酷いで」

(あの、はやてさんって、いつもこうなんですか?)

(普段はなのはさん達と同じで優しいし、同じくらい凄い人なのよ。ただ、こういう場面ではね、こんな感じよ)

(まあ、イベントで楽しむのは、悪い事じゃないから……)

「ほな、始めるで!」

親友二人の口撃に少しへこんでいたが、すぐに気を取り直し、ここに、王様ゲームが幕を開けたのだった。

何となく予想してたのか、なのは、フェイト、スバル、ティアナが同じことを感じてた

「ふふふ、さーて、誰なんやろなあ。なのはちゃんかな、フェイトちゃんかな？ あっ、スバルもええし、ティアナも捨てがたいしなあ」

わくわくした様子で五番の相手を探す。
果たして五番は……

「あっ……」

西麗だった。

「ほお、西麗か。これはこれでええかもな。ではさっそく……」

「ちょ、ちょっと待ってよ！ 何よ胸揉むって……！ それは流石にやりすぎじゃないの……！！」

「ええやんかー、ちょっとしたスキンシップやってー、それに、王様の命令は絶対やで？」

「そ、それはそういうルールだけど……」

「大丈夫やって、そんなに酷い事せえへんから」

「いや、ちょ、待っ……ひあ！？！？」

こうして西麗は、はやて独特のスキンシップの餌食になったのだ。

その頃、外野組はと言つと……

「あの、龍清さん？」

「どうして、私たちの目を塞いでるんですか？」

「君たちには少し刺激が強すぎるというか、健全な育成に有害と言
うか……」

必死に胸を揉まれる西麗から視線をそらしながら、エリオとキャ
口の目を塞いでいた。

そして、過去の被害者であるなのは、フェイト、スバル、ティア
ナは安堵の表情をしつつ西麗に同情の眼差しを送っていた。

「はあ、はあ、酷い目に遭った」

「いややなあ、ちょっとしたスキンシップややお」

「えーっと、気を取り直して、やりましょうか？」

「そ、そうね」

龍清とティアナの言葉で王様ゲーム第二回を行うことに。

「あっ、私だ」

次に王様になったのはなのはだった。

(良かった。なのはさんなら、間違っても変な命令は出さないよね)

(そ、そうよね)

全員なのはが王様になったことに関して安堵の表情を浮かべる。

「うーん。どんな命令をしようか、いざとなると悩むねー」

当の王様となったなのはは、どんな命令をしようか悩んでいた。すると、彼女の目に、食堂に設置されたステージが入った。そこではリインがアウトフレーム姿で何かを歌っていたが、それを見て、なのははピンと閃いた。

「じゃあ命令するよ。2番と3番、それと6番と7番の人は、四人一組であのステージで歌ってくること」

『おおー』

流石と言うべきか、なのはの見事な采配に全員感心する。

この命令なら、王様ゲームに参加している面子以外の人達も楽しめる。

しかも、ここにいるメンバーはかなりの美声揃い。きつとみんな楽しめること間違い無しだろう。

そして、選ばれたメンバーは……

「あつ、私だ！」 7番

「私も」 3番

「ま、またー！」 2番

「私もです」 6番

2番は西麗、3番はティアナ、6番はキャロ、7番はスバルだった。

「ほな四人とも、頑張ってきてや」

とりあえず、さしたる抵抗もなく、四人はステージの上に立つ。

「ねえねえ、何歌おうか？」

「うーん、二人とかならともかく四人だからね、ちょっと大変かも」

と、二人で話し合っていると。

「それなら、あたし良い曲知ってるよ」

西麗が手を挙げた。

「本当ですか？」

「うん、えーっと……あつ、あつた!」

そして選曲してみたところ、どうやら乗っていたようだ。

「それじゃ、いくよ!」

「良いよー!」

「もお、こうなったらやるしかないわね」

「わ、私も頑張ります」

「それじゃ、あたし達の歌を聞けー！ー！ー！」

西麗、先ほどの胸揉みの事をきれいさっぱり忘れたいのか、かなりノリノリだ。

そして、音楽と共に、四人は歌い始める。

以下中略

音楽終了と共に、歌い終えた四人は、会場から拍手喝さいを頂いた。

「ふう、すつきりしたー」

そして、再び王様ゲームの舞台に戻ってきた四人

「お疲れ様」

「結構良かったで」

「本当」

上からなのは、はやて、龍清とそれぞれの感想を述べる。

「せやけど、そついう命令ならフェイトちゃんにあたってほしかったなあ」

「ああ、それ解る。フェイトちゃん歌うまいからねえ」

「そ、そんなことないよ／＼」

「さ、次いくで」

と、そんな感じで王様ゲームは続けられた。

「部長長、差し入れ持ってきました!」

すると、一人の男が人数分の缶ジュースを持ってきた。

「おお、ヴァイス君。ありがとうな」

はやては男から缶ジュースを受け取る。

「ほな皆、好きなの持ってってや」

はやてがそう言うと、皆が思い思いの物に手を伸ばす。

「あの、先ほどの方も、知り合いですか？」

ヴァイスと呼ばれた男が去った後、龍清がはやてに聞いてくる。

「彼はヴァイス・グランセニック。普段はヘリパイロットやけど、武装局員でもあるんや」

「ヴァイス陸曹も、機動六課時代からの付き合いでね、あたしも色々お世話になったのよ」

「へー」

そんな風に会話していると……

変化はふいに訪れた。

「ほらほら、王様ゲームの続きやるでー！ー！ー！ー！ー！」

「あっ、あれ？　なんか、はやてさん、テンション高くないですか？」

「そ、そうね……」

そしてここから災難が、ある二名に降りかかるのだった。

「よっしゃあ！！ 私が王様やー！！！！！！」

テンションの高いはやてが王様になってしまい、一同は恐怖を拭い去れない。

「ほな命令するでー！ 1番と4番の人はこの衣装を着る事！！！！」

そう言っではやてが取り出したのは、ミニスカのメイド服。それを見て、全員顔を青ざめる。

「心配せんとしても、全員分のサイズ用意してるから、さあ、誰や？ 一斉に番号みせい！！！！」

テンション高めのその言葉に、なのは達は番号を見せる。だが、メンバーの中に、該当者はいなかった。ただ、二人を除いて。

「龍清くん、エーリオー」

後日、ヴァイスが持ってきた缶ジュースの中に酒が混じっていたことが判明。ヴァイスの証言から、犯人はきつい罰を受けることになるのだが。

それはまた、別のお話。

第十二話 親睦会と言つ名のChaos（後書き）

3000字〜5000字の間で切り上げてたのに、今日はそれを超えてしまった。

提案をくれた楚良様、そしてアドバイスをくれたD級管理者「永雛」様、本当にありがとうございます。

最後が滅茶苦茶になってしまった気がしますが、今回はこの辺で。

次回から本格的に事件が始まります。

と言つても、まだ導入部分、事件が起こる手前までを書きます。

第十三話 ファーストミッション（1）（前書き）

来週のテスト期間が終われば、夏休みに入ります。

補修なんてことにならなければ、執筆し放題……と、言いたいところですが。

この夏は実家に帰省するので、あまりパソコンにかぶりつきすぎてると、親とかに何と言われるやら……ま、そこはその時になったら考えとしましょう。

今回は訓練風景、次の話もこんな感じになります。本格的なミッションは次の次です。

第十三話 ファーストミッション(1)

六課始動から、今日で一週間が経過した。

この間、特にこれと言った事件や報告などはなく、龍清と西麗、そしてフォワードメンバー達は訓練に明け暮れていた。

「そおりゃあーーーーー!!」

「おっと!!」

「一閃必中!!」

「うわっ、危な!?!」

「クロスファイア、シュート!!」

「フリード、ブラストレイ!!」

「龍王爆雷符!!」

龍清はティアナ、キャロと術の撃ち合いを演じ、西麗はスバル、エリオの攻撃を文句を言いながら軽やかな身のこなしでかわしていた。

「はい皆、集合!!」

するとここで、なのはから集合の号令がかかり、戦闘をやめて彼

女のもとに集まる。

「個人技術の訓練はここまで、次はチーム戦の訓練をやるよ」

「「「はい！！」「」」

「「は、はい」」

「じゃ、五分後に開始だからね」

そう言つと、なのはも準備のためにその場を後にした。

「さてと、久しぶりね、これも」

「そうだね」

「えっと、何をするんですか？」

うんうんと頷くスバル達四人に、再び蚊帳の外となった龍清が聞いてくる。

「これからやるのはシュートイベーションて言つて、五分間なのはさんからの攻撃を避けるか、なのはさんに一撃与えればそれで終わり、誰かが一発でも当たれば、最初からやり直していうやつよ」

「「こ、五分間も、ですか？」

「お二人とも、なのはさんの攻撃を五分間避けられる自信はありますか？」

エリオが聞くと、龍清と西麗は首を同時に横に振る。

「あはは、だよーねー。私たちも自身ないし、今のなのはさん達は、リミッターもついてないから、尚更無理だよ」

「だから、機動六課の時と同じ、何が何でも一撃入れるわよ！」

「」「はい！！」「」

「」「おー！！」「」

ティアナの掛け声に、五人は一斉に叫ぶのだった。

「じゃあ皆、準備は良い？」

5分後、バリアジャケットを身に纏ったなのはが上空から声を掛ける。

それに対し、龍清達は「はい！！」と元気な声で返事する。

「それじゃ、いくよ。レイジングハート！！」

《accel shooter》

なのはの愛機、レイジングハートの電子音と共に、彼女の周囲に桜色の魔力弾が無数現れる。

「あ、あれを全部避けろって言うんですか？」

「無茶苦茶よ!!！」

現れた魔力弾の数を見て、龍清と西麗は顔を青ざめた。

「ましてあれだけの数を5分間も？ アタシでも無理だって!!！」

「だったら、意地でも一撃入れなさい！ 良い？ 作戦はさつき説明した通りよ！ じゃあ、各自散開!!！」

ティアナの合図とともに、それぞれが一斉に散らばり、廃墟の中に姿を隠す。

（流石だね。固まってるコンピューター、最悪バスターの餌食で一網打尽だもんね）

散らばり、一斉に身を隠した全員の行動を見て、なのはは冷静に分析し、感心する。

（でも、スバル達の動きは大体解ってるから、普通にやるだけじゃ私に一撃与えるのは難しい。それは解ってるだろうから、そこに二人をどう混ぜ込んでいくか、そこが考えどころかな？）

なのはがティアナの戦術を冷静に分析していると……

「はあああああああああ！！！」

「そりゃあああああああああ！！！」

なのはの両脇から、スバルと西麗が襲い掛かってきた。

(二人の性格からすると、十分考えられたけど。まだシューターを飛ばしていないのに来るとは思えないし、少し動けば二人が激突するだけ。つまりこれは……)

「フェイクだね」

そう言っただけなのはが避けると、二人はぶつかり同時に消えて行った。

「そして本物は……そこだね！！！」

そして、振り向きながらシューターを飛ばす。

そしてその先には、彼女の読み通り、スバルと西麗がいた。

「流石です！ 相棒！！！」

《protection》

「そりゃあ！！！」

飛んできたシューターに対し、スバルはプロテクションを展開し、西麗は神速槍を回転させて攻撃を防ぐ。

「一閃必中!!」

「龍王破山剣!!」

すると、今度は下からエリオが、上から龍清が攻撃を仕掛けてきた。

しかも、二人ともスピードが速い。

(これは、二人とも補助魔法を受けてるね。でも……)

少し驚きながらも、まだ数多く残ってるシューターを二人に向ける。

「クロスファイア!!」

「シューティングレイ!!」

しかし、二人に向かって飛んできたシューターは、ティアナとキヤロによって迎撃される。

「もらった!!」

そして、補助魔法によって勢いを得た二人が、同時に襲い掛かる。

「レイジングハート!!」

《protection》

しかし、そこはフォワードの教官であり、管理局のエースである

なのはも簡単には墜ちなかった。

二人の目前にプロテクションを張り、一瞬の隙ができたところを後ろに下がる。

結果、二人の攻撃はプロテクションを破っただけでなのはには当たらず、補助魔法もそこで切れてしまう。

「あっ！」

「しまった！！」

二人はすぐに不味いと悟ったが、目の前を見てみると、なのはが砲撃の準備をしていた。

(二人とも、早く下がって！！)

すぐに不味いと感じたティアナが、二人に退避するよう命じる。

「いくよ！！」

《short bastard》

「シュート！！」

しかし、その刹那、砲撃が二人に襲い掛かる。

ところが、極光が収まった後、二人のいたところには誰もいなかった。

「ふう、危なかったー」

「た、助かりました」

よく見てみると、エリオの手を掴んで、龍清が背中の翼を羽ばたかせて、なのはより上の位置にいた。

その後、龍魂召喚で大きくなったフリードで飛んできたキャロに、エリオを引き渡す。

（じゃあ皆、次で決めるわよ。準備は？）

（こっちはオツケーだよ、ティア）

（右に同じ！）

（僕もいけます！）

（僕たちも大丈夫です）

（はい）

念話で飛んできたティアの質問に、5人は同じ返答を返す。

「悪いけど、そろそろ決めるよ！ シュート！！」

すると、すでに制限時間が迫っているのか、なのはが一齐にシューターを出して放つ。

「まずは僕から！ 九天応元雷声普化天尊！！」

龍清が札を上へ投げると、蒼い雷が一齐に降り注ぐ。

そしてそれは、なのはを狙いつつ、なのはの放ったシューターを

打ち落とす。

そしてそれを避けようと、なのはは高度を下げる。

「もらったー!!」

するとそこへ、西麗が後ろから襲い掛かる。

「レイジングハート!!」

《p r o t e c t i o n》

無論、これに対して防御を取る。

「まだまだまだー!!!!!!!!!!」

しかしこれに、西麗は手に持つてる神速槍の連続突きで、プロテクションを破ろうとする。

「……何コレ、堅っ!!」

だが、いくら連続で突こうと、なのはの防御が敗れる気配はなかった。

「でも、まだまだー!!!!」

(西麗、下がって! 後はあたしがやる!!)

(おっ、了解!!)

念話を受けると、西麗は突きをやめ、その場を離れる。その彼女の後ろには……

「ダイバーーーーーン……」

右手に魔力を収束していたスバルが迫ってきた。

「バスターーーーーー!!!!!!」

そして、掛け声とともに、なのはのプロテクションにぶつける。その直後、二人のいた場所で大爆発が起こる。

「や、やったの？」

「解んないけど」

「大丈夫よ、スバルなら」

そしてしばらくの沈黙の後、爆煙が晴れてくる。

「……ふう、おめでとう」

《mission complete》

その直後、なのはがレイジングハートの電子音と共に労いの言葉を掛けながら下りてきた。

「うーん、流石ティアナだね、最後の詰めをスバルに任せるなんて」

「エリオは昔やったので、すぐ破られると思ったんです。龍清と一

緒に攻撃させたときに、それを防がれてすぐにこの作戦が思いついたんです」

「成程、西麗は私の気を引き付ける罠で、私の防御を削る役でもあったと言っわけか」

うんうんと、嬉しそうに頷きながら、ティアナの作戦を評価するなのは。

「龍清と西麗も、すっかりチームワークが板についてきたみたいだね」

「そんな、僕たちはティアナさんの指示に従ってただけですし」

「そうそう、そんな大したことはしてないですよ」

と、なのはの褒め言葉に二人で照れてると……

「「……あれ？」」

突然、二人のユニゾンが解除された。

「春青？」

「クキユウウウウ」

「白秋、どうしたの？」

「ニャウ……」

そして、そのまま降りてきた2匹を二人が受け止めると、2匹とも、どこか弱弱しく頂垂れ、か細い鳴声を上げる。

「なんだか、元気ないですね」

「最近訓練漬けだったからね、2匹とも、疲れちゃったのかな？」

心配そうにフリードと共に見つめるキャロに、なのははここ1週間を思い返し、原因を予想する。

「二人とも、ちょっと2匹を貸してくれるかな？」

「えっ？ どうして？」

「これからシャーリーの所に行くんだけど、せっかくだから、2匹をフルメンテに出してあげようよ」

「ああ、成程。解りました」

「あつ、スバル達もデバイスを貸してくれるかな？ 成長した皆に合わせて、シャーリーと調整するから」

『あつ、はい』

そう言うと、龍清と西麗が2匹を預けたのを皮切りに、スバル達も自分のデバイスを預ける。

「じゃあ、午前中の訓練はここまで。午後は皆のデバイスと、2匹の具合を見て判断するから」

『はい！！』

「じゃあ、私は一足先に言ってるね」

「春青と白秋の事、よろしくお願いします」

「うん、二人もしっかり休んでね」

「はい」

そして、午前の訓練が終わり、全員でシミュレーターを後にするのだった。

第十三話 ファーストミッション(1) (後書き)

今回は結構考えて書いたのですが、出来はどうだったでしょうか？

この小説を読んでいた方、出来る限りでいいのでご感想をください。じゃないと、自分でうまくできてるか、不安なので。

さて、この1週間は忙しくなりそうなので、今回はここまで。

第十四話 ファーストミッション（2）

フォワード達がなのはと訓練をしていた時と同じ時間。

特務六課の部隊長であるはやては、三人の人物と通信をしていた。

「そっか、今のところ、新たな報告は上がってないんやな」

《ああ、地球に調査に行ってから今日まで、今のところはな》

一人は、時空管理局の提督、クロノ・ハラウン。フェイトの義兄である。

《それと、次元航行艦の件だが、申請が何とか通った。手続きがまだ残っているが、早ければ今月中には使えるようになるはずだ》

「御免な、本当なら私が直接いかなあかんのやけど、こっちも始動したばかりで、いろいろ大変やから」

《気にしなくていい。本局も地上本部も、今回は全面的に協力してくれてる。まあ、君たちに解決を押し付けているんだ。これ位融通が利いてくれないとな》

《私たちの方こそ、また貴方達に面倒を押し付けて、御免なさいね》

はやてから向って真ん中のディスプレイに移ってる金髪の女性がはやてに謝る。

彼女の名はカリム・グラシア。聖王教会をまとめる人物で、管理局少将の地位を持つ人物である。

「ええよ。この事件は放っておけへんし、それに、カリムやクロノ君がこうして手伝ってくれるだけで、心強いぞ。ま、人員は、まだちょっと不安やけどな、事件が事件なだけに」

《それなら心配ない。余裕ができたなら、あいつらを回してやるからよ》

そして最後に、向かって右のディスプレイに映ってる人物は、陸士108部隊の隊長、ゲンヤ・ナカジマ三佐。スバルの父親であり、立場こそ逆転したが、はやての尊敬する上司である。

「ありがとうございます、ナカジマ三佐。いやー、あの子らも協力してくれるんやったら、百人力ですわ」

《なあに、本部の連中がどう言おうが、嬢ちゃんの頼みなら、断る義理はねえからな》

《そつだ、はやて。彼らの様子はどうだい？》

ここで、クロノが話題を変えて話してきた。

「龍清君と西麗ちゃんの事やな。二人ともええ子や、将来も有望やし」

《ああ、前にスバルが話してた奴らか？》

「そうです。今の時間やと、なのはちゃんに絞られとるんやないかな」

《そつか。二人も、大変だな》

こうして、今後の打ち合わせと談笑に浸る、はやて達四人だった。

その頃、訓練を終えたフォワード達はと言つと……

「ぶはー！！ 生き返るー！！」

「大げさよ」

「あはは」

ここは六課のシャワールーム、現在使用しているのは、スバル達女性メンバーである。

「しっかし、ここ一週間で、あんたたちがどれだけ凄いのかよく解った」

「そうかな？」

「そうよ。ま、その理由も納得できるけどね。あんな厳しい訓練を一年も受けてたんなら納得するわ」

西麗は先ほどのシュートイベーションをはじめ、ここ一週間の間に受けた訓練を思い返し、スバル達の強さと、その秘訣に、改めて感心していた。

「しかも、それが三年前だから、スバルとティアナがあたしや龍清と同じくらい、エリオとキャロは10歳の時から受けてるわけですよ」

「あ、はい」

「すごいよねー、あたしなんて10歳って言ったら、集落で腕白してた位なのに」

「そんな、そうでもないですよ」

「そうそう、それになのはさんも、ちゃんと考えて訓練メニューを組んでくれてるし」

「そうなんだ」

「そうよ、私たちより、なのはさん達の方がもっとすごいわよ」

「それは一週間前にその片鱗を見せてもらいました」

西麗が言っているのは、一週間前、六課に来たばかりの時にやったヴィータとの模擬戦の事である。

そんな風にシャワーを浴びながら話をつづけた。

「そう言えば、西麗さんと龍清さんのご出身も、地球なんですよね」

「そうよ。知ってるの?」

「機動六課時代に、ロストロギアが地球で見つかってね、その時に行ったのよ」

「へー、どこなの?」

「海鳴市って場所で、なおはさんや八神部隊長の故郷だって」

「海鳴市……ってあそこ!?!」

それを聞いた途端、西麗が素っ頓狂な声を上げた。

「何? 知ってるの?」

「うん。あたしと龍清は、その市で会ったんだもん」

「てことは、西麗も海鳴出身?」

とここで、スバルが聞いてくる。

「違うよ。ティアナとフェイトさんは知ってるだろうけど、あたしは中国の遺跡を守る一族の末裔で、遺跡に近い集落に住んだの」

「あの遺跡ね」

「へー、集落に住んでって所は私と同じですね。どんなところだったんですか?」

決して他意はなく、キャラは興味本位で聞くが、西麗の表情は暗くなる。

「ああ、うん……」

「どうしたの？」

その変化に気付いたティアナは、西麗に聞いてみる。

「その、あたしの集落なんだけどね。もう、無いの」

「「「えっ？」「」」

「あたしが日本に来る前。おおそ、二年前ぐらいかな。村が変な奴らに襲われてね、皆殺されて、生き残ったのはあたしだけ。後は、あたしが持ってた、五行霊の示した方向に向かって行って流れ流れて日本に」

その話を聞いて、少し周りが重たい空気になる。

まあ、こんな話を聞かされて、平然としてる人など、まずいないだろう。

「あ、あの、御免なさい」

ここで、話を切り出したキャラが、西麗に謝った。

「ううん。いいよ、知らなかったんだし。それに、龍清やあんた達とも会えたわけだから、悪い事はすっかりって訳でもないしね」

「前向きなんですね」

「そんなんじゃないよ、空元気なだけ」

と、こうして暗い空気は払拭され、四人はまたお喋りに夢中になるのだった。

「……遅いなあ」

「そうですね」

「クキユ〜」

一方、こちらはシャワールーム前で待っている、龍清とエリオ、そしてフリードである。

女性陣が使っているので入るわけにもいかず、こうして待っているのだ。

「何でこんなに長いんだろうね」

「でも、機動六課の時もこんな感じでしたよ？ まあ、女性の方は、身だしなみに気を使うそうですから」

「そんなものなのかなあ？」

と、疑問に思いながら、二人と一匹は待ち続けている。

「クキユ〜」

「フリード、元気ないね」

「春青の事が心配なんだね」

「キユ〜」

「そっか、仲が良かったんだもんね」

「うん、僕も心配だよ」

フリードと同じく、龍清も心配そうな顔で下を向く。

「大丈夫ですよ。シャーリーさんは優秀ですから、きっと二匹とも元気になるですよ」

「そうかな……」

「はい。僕のストライダーや、スバルさん達のデバイスを作ったのもシャーリーさんですから」

「そうなんだ。凄い人なんだね」

心配で少し暗くなっていたが、エリオと会話しているおかげで、

少しだが明るくなった。

「そう言えば、龍清さんも、地球の出身ですよね？」

「ああ、そうだよ」

とここで、奇しくも、女性陣と同じ話題に、この二人も触れていた。

「もしかして、海鳴市の出身ですか？」

エリオがそう聞くと、龍清は首を横に振る。

「違うよ。確かに海鳴市に住んでいたけど、出身は京都なんだ」

「キョウト？」

と、京都を知らないエリオは首を傾げる。

「えっとね、日本にある町の一つで、昔からある古い建築物が結構並んでる、有名な観光都市なんだ」

「そうなんですか」

「うん。それに、京都は古くは日本の政治の中枢で、陰陽師も主は京都、当時は平安京って呼ばれてただけけど、そこが主な行動拠点だったからね」

「龍清さん、詳しいんですね」

「こつ見えても、歴史や天文学とかは得意なんだ。それに陰陽師は
天気を読んだり、星を見て占ったりするのが、仕事だったからね」

と、そんな風に会話していると。

「おまたせー、空いたよー」

と、スバルの掛け声を筆頭に、ぞろぞろと出てきた。

「じゃ、僕らも入ろうか」

「はい」

二人が風呂を済ませた後、一行は昼食をとり、その足でデバイス
ルームに向かった。

「シャーリー、入るわよ」

そう言って、年長者のティアアナが最初に入るが……

「……」

突然、そのまま固まってしまふ。

「ティア？」

「どうしたんですか？」

固まったのを見て、スバルとエリオが続いて覗き込み、その流れでキャラ、龍清、西麗も次々と部屋の中を覗き込む。

そして、その様子を見て全員固まる。その先には……

「きゃはは、やめてください〜」

「く、くすぐってえよー！ あはは！〜！」

「は〜、癒されますね〜」

春青、白秋とじゃれ合うリインとアギト、そしてそれを見て和んでるシャーリーがいた。

（うわあ、何かすごいデジャヴ）

（いいなあ〜）

（えーっと、何手声を掛ければ……）

（ど、どうしよう）

と、この様子を見たティアナは少し呆れかえり、スバルは羨まし

そつな目で見つめ、エリオとキャラ口はこの状態をどうしようか困っていた。

「春青！」

「白秋！」

「クキユ？」

「ニヤ？」

ところで、龍清と西麗が呼びかけると、さっきまでリイン達とじやれ合っていた二匹は二人の方を向き、すぐに飛びかかってくる。

「キユ〜、キユキユ〜!!」

「ニヤー!!」

「良かった。元気になったんだね」

「本当。安心したわよ」

二匹が元気になったのを確認して、二人は安堵の表情を浮かべ、同時に顔も明るくなる。

「ところで、どうしてリイン曹長とアギトも居るんですか？」

とここで、再起動したスバルがシャーリーに聞いてくる。

「ああ、はい、なのはさんから二匹を預かった時に、ちょうどお二

人の精密検査も行おうとしたところなの」

「そうだったんですか」

シャーリーの説明に、キャロが納得したような声を上げる。

「シャーリーさん。ありがとうございます」

龍清は、シャーリーに俺を言っ頭を下げる。

ちなみに、いつもの定位置にいない春青はというと……

「キューー！」

「クキューキユキユー！」

「ニャー……！」

白秋、フリードと共に、デスクの上でじゃれ合っていた。

その様子を、近くで見ているスバルが和んでいるのは、まあ、良しとしよう。

「一週間の訓練で、大分疲労が蓄積してたみたい。これからは不調かなって思ったら、定期的によつてね」

「はい」

「それと、検査のついでにこの二匹を調べて見たんだけど」

「何か解ったの？」

「ええ。あつ、その前にこれ、皆に返しておくね」

そう言っつて、シャーリーはスバル達にデバイスを返してあげる。

「これまでの訓練で収集したデータから、皆に合うように微調整をしたから、今までより動きがよくなるはずだよ」

「あつ、皆そろつてるね」

と、ここで、なのはがタイミングよく入ってきた。

「あつ、なのはさん」

「来ましたね。さて、全員揃ったところで、ちょっとこれを見てください」

そう言っつて、コンソールを動かすと、そこには二匹の、春青と白秋のデータが映し出されていた。

「二匹の基本的な構造は、動物型であることを除けば、リイン曹長やアギトさんと、ほとんど変わりはありませんでした。ある一点を除いて……」

『ある一点っ』

全員が疑問符を浮かべると、シャーリーはその一点を指差した。

「ここです」

それは、二匹の体の中心部、魔力を全身に送ってる部分を差す。

「そこって、リンカーコアですよね？」

それを見て、エリオが至極当然の質問をする。

「それが、この二匹のこれは、リンカーコアじゃないんです」

『えっ!?!?』

これを聞いて、全員が驚く。

「……もしかして」

「……やっぱり?」

ただし、龍清と西麗を除いて。

「二人とも、これが何なのか解るの?」

何か納得した様子の二人に、スバルが聞いてくる。

「それって、五行霊ですね」

「ああ、西麗が持ってたあのロストログア」

とここで、ティアナが思い出したように言う。

「はい。依然調べた、五行霊のデータと、この二匹のデータが、見事に一致するんです。そしてこの珠を通して、二人の魔力が、二匹に送られているんです」

『へー』

と、シャーリーの説明に、フォワード陣は感心するばかり。

「さあさあ、二匹の事は取り敢えず置いて、午後の訓練に行くよ」

「あつ、はい！」

「二人は如何？ 行ける？」

「大丈夫です」

「もう二匹とも、元気になりましたから」

「クキュー！！」

「ニャー！！」

「よし、じゃあ早速……」

と、全員でシミュレーターに行こうとしたその時、デバイスルーム一体に、赤いランプの点灯と共に、サイレン音が鳴り響くのだった。

第十四話 ファーストミッション(2) (後書き)

若干暗い話を織り交ぜました。明るいばかりよりは、良いかなと思いました。

次回からいよいよファーストミッション、二人の活躍を、楽しみに!!

第十五話 ファーストミッション(3) (前書き)

一週跨いでしまいました。楽しみにして頂いてる方々、本当に申し訳ありません。

今回はいよいよ最初の任務、面白みはないと思いますが、何卒、よろしく願います。

第十五話 ファーストミッション(3)

「まさかこれから訓練って時に出勤命令が下るなんてね」

「本当、凄いデジャヴだったわね」

「あ、あはは………」

デバイスルームで起こった出来事に、スバルは呑気に、だが懐かしそうに呟く。

その隣では、ティアナが六課時代の初出勤の事を思い出して溜息を付き、更にその隣のエリオとキャロは乾いた笑いを浮べていた。

現在、デバイスルームにいたメンバーはヴァイス陸曹の操縦するヘリの中にいる。

理由は先ほどの会話からも解るとおり、デバイスルームでの会話の後、フォワード陣のデバイスと春青、白秋の調子確かめる為にぎざシミュレーションルームへ足を運ぼうとした矢先、第一級非常態勢を示すアラームが鳴り、特務六課初の出勤命令が下されたのだ。

現在、ヘリの中にいるのは、操縦士のヴァイスは当然として、スターズの隊長であるなのはと、副隊長のヴィータ、そしてスバル達旧フォワード陣に、龍清、西麗の9人である。

「それじゃ、今回の任務の内容を確認するよ」

ここで、なのはの言葉と共に、全員がディスプレイを見つめ、任務の内容を確認する。

それによると、ミッドチルダの首都、クラナガンから少し離れた地点で異常な魔力反応を検地したということだ。

当初、地上本部の首都航空隊と陸士部隊から先遣隊を編成し、偵察を行なわせたのだが、その部隊からの連絡が途絶。

続く第二、第三の先遣隊も同様の事態となり、容易ならざる事態と判断した上層部が、特務六課に出動要請を下したということだ。

「つまり私達の任務は、魔力反応の調査と、行方不明の先遣隊の捜索、といったところでしょうか」

「ま、そんなところだな」

これまでの説明から、任務の主旨を理解するティアナに、ヴィータも頷きながら相槌を打つ。

「魔力反応は動く様子が無いけど、予断を許さない状況だから、気を引き締めていこうね」

「「「はい！……！！」「」「」」

流石に慣れているだけあって、フォワード陣の返事ははっきりしていた。

それに対し……

「うっ……」

「ニヤ〜」

肩を強張らせ、「緊張しています」と自己主張しているような固まった表情をしながら唸る西麗。

そんな主人の様子など露知らずと言ったように、抱きかかえられている白秋は呑気に欠伸などしていた。

「西麗ちゃん」

「は、はい!!」

そんな様子に気付いたなのはが西麗に話しかける。

「緊張してる？」

「えっと、その……はい」

一瞬、どう返答すればいいのか困ったが、率直に自分の気持ちを答える。

「大丈夫だよ、訓練でやった事をしっかり発揮できればうまくやれるよ」

「はあ……」

そうは言われても、やはり緊張はそう簡単にはほぐれないものがある。

とここで、意外な人物によって西麗に助け舟が渡された。

「大丈夫ですよ、西麗さん」

その意外な人物とは、キャロだった。

「私も初めての時は、不安で一杯でしたけど、ちゃんとできたんですから、西麗さんならきつとうまくやれますよ」

「そ、そうかな……」

キャロの励ましに、西麗は照れくさそうに頭をかく。

「まあ、私達もいるんだから、そんなに気負わないの」

「そうそう、別に一人でやれていってるわけじゃないんだからさ」

「自信を持ってください」

「皆……そうだね、緊張しすぎて、ちょっと自信なくしてたよ」

キャロに続き、ティアナ、スバル、エリオからも激励の言葉をもらい、西麗も緊張がほぐれ、自信を取り戻す。

「皆、ありがとう」

「どづいたしまして」

西麗のお礼に全員を代表して答えたのはスバルだった。

そしてその様子を見て、なのはも安心したような表情になる。

「とじろでよ」

「ん？ 何ですか？」

すると、今までその様子を見守っていたヴィータが話しかけてくる。

「アイツは何やってんだ？」

そう言ってヴィータが向いた方向に、全員も視線を向ける。

「……………」

その視線の先にいたのは龍清だった。

彼は出勤した時から椅子ではなくへりの床に座り、何処からともなく取り出した式盤図を広げ、これまた何処からともなく取り出した算木を使って、さつきからこの場に居る面子には良く解らないことをやっているのだ。

「ああ、あれ？ 占いですけど」

『占い？』

西麗の答えに全員が頭に疑問符を浮かべる。

「そ、龍清は朝起きたときとか、何か起こりそうなときに決って占いをするの。それに、龍清の占いは良く当たるのよ」

西麗が説明していると……

「うーん……………」

丁度占いを終えたらしく、龍清が唸りながら式盤図と算木を片付けていた。

「龍清、どうだった？」

西麗は龍清に占いの結果を聞いてくる。

「正直言うと、あんまり良い結果じゃないね。初任務で言い難いけど、何か良からぬことが起こりそうな気がする」

「キユウ……」

龍清は申し訳なく思いながらも占いの結果を伝える。それに追隨するように、春青も元気なく声を上げる。

「ねえ、西麗」

「何？ ティアナ」

とここで、ティアナが西麗に問いかけてきた。

「龍清の占って、そんなに当たるの？」

「百発百中……とはいかないけど、八割がたの確率で的中するよ」

これまでも、龍清の占いは良くも悪くも的中していた。

ある時は川を渡ろうとして豪雨に見舞われ溺れそうになり、またある時はチンピラ数人をノックアウト下結果、頭にヤのつく方々に追い回されたり。

まあだがしかし、この占いのお陰でここまでやってこれたというのも事実なので、あまり馬鹿にも出来ないのだ。

「うーん、その良からぬ事ってのがなんなのか解らないと対処の仕様が無いけど……とりあえず、細心の注意を払うって事でいいかな？」

「そうですね、それが一番妥当かと」

結果がどうあれ、そのような事を言われては、不確定情報といえど疎かには出来ない。

とりあえずなのは言うとおり、現場では細心の注意を払って行動するようにという事で、全員が同意した。

「おーい、そろそろ目的地に着くぜ」

とここで、操縦席からヴァイスの声が聞えた。

「それじゃ、作戦を説明するね。目的地は森林が生い茂っている為へりを着陸させられないから、その上空から降りて調査を行なってもらおうよ」

「んで、アタシとなのはは上から指示を出す。後、遅れてフェイトとシグナムも来るからな」

『はい！！』

と、一通り説明を受け、いよいよ特務六課最初の任務が開始されるのであった。

「ねー、そっち見つかったー？」

「何も、ティアはー？」

「あんだ達ねえ……そう簡単に見つかったら、苦労しないでしょ」

鬱葱と生い茂る茂みの中を掻き分けつつ搜索を続ける西麗とスバル。

だが、搜索を開始して1時間も経っていないのにこの様子である二人に、ティアナは呆れるより他になかった。

目的地に到着し、地上に降り立ったフォワード達は、ティアナの提案で三人一組となって搜索を開始することにした。

そして、もう一組のチームと別れ、現在三人は魔力反応が検地された場所へ向っていた。

「っていうかさあ、こんなに植物生い茂ってるのに目的のもの探さって難しくない？」

「まだ物って決まったわけじゃないけどね。それに、反応のある場

所まであと少しよ、文句言わない」

確かに、西麗の言うとおり、視界をも遮るほど生い茂るこの森林地帯で、目的の物を探せというのは酷な話だろう。

そんな愚痴を洩らす西麗に、クロスミラージユで目標地点を確認しながら、ティアナは叱咤しながら、歩を進める。

だが、暫く三人が歩いていと……。

「ん！」

突如、西麗の足が止まる。

「？ どうしたの？」

突然止まった西麗に、スバルが声を掛ける。

だが、西麗はしっ！ とジェスチャーを送りながら、周りを警戒する。

「……白秋が反応してる。何か、嫌な気が漂ってるって」

『グルル……』

警戒する西麗の中では、白秋が今までの猫っぽい仕草ではなく、虎そのものを思わせるように牙をむき出しにし、低く唸る。

そして、やがて西麗の言った事は現実となった。

「気をつけて、何かいる」

西麗の発したその言葉に、スバルとティアナも戦闘体制を取る。
この草木生い茂る森林の中、何処から敵が襲ってくるか解らない。
三人は密集体型を取り、全神経を研ぎ澄まして、敵を待つ。

そして、暫くして物音が聞え、三人がその方向を向くと。

「なっ！」

「何……これ！」

三人の目の前に現れたのは、おどろおどろとし、人の姿をしたものの、鳥の姿をしたもの、獣の姿をしたものなど、様々な姿を持つ化け物の大群だった。

第十五話 ファーストミッション(3) (後書き)

えー、うちのパソコンの関係から、暫く更新速度とクオリティが低下するかもしれませんが、何卒御容赦下さい。

はー、早く一人暮らしに戻りたい。

第十六話 ファーストミッション(4)

「……むっ！」

「如何したんですか、龍清さん？」

「今、何か不穏な気を感じた気が……」

ティアナ達が謎の集団と対峙したその頃、もう一方のエリオ、キヤロ、龍清のチームは、もう一つの任務である音信を絶った先遣隊の捜索を行なっていた。

しかし、場所は木々や雑草が森林地帯であり、捜索は現在の所難航を極めていた。

もし先遣隊が全滅していたとしても、生き残りがいれば、その魔力反応を手がかりに捜せるのだが、残念ながら現在もその反応は無い。

その為、三人は逸れないように寄り集まりつつ、地道に捜索していたのだった。

「向こうの方で何かあったんでしょうか？」

「それは解らないけど……嫌な予感がするなあ……」

ヘリの中で行なった占いの結果の事もあり、龍清は不安を隠しきれず、思わず吐露する。

「でも、スバルさんたちなら、よほどの事が無い限り大丈夫でしょう。上空には有事に備えて、なのはさんとヴィータ副隊長が待機してるんですよ。もしもの事があっても大丈夫だと思っんですけど」

「そうだと良いんだけど……」

現在の布陣と実力を鑑みて、心配気味の龍清にキャロがそう説明するが、龍清はやはり不安を拭いきれない。

「……如何したんですか？ 何か元気ないですけど」

しかし、さつきからの龍清の様子は、どうも占いの結果を懸念してるだけではない様子だと思ったのか、気になったエリオが龍清に問うた。

「あつ……うん。ちょっと昔の嫌な事を思い出してね、気が滅入っているだけだよ」

「嫌な事……ですか？」

不思議に思ったキャロが聞くと、龍清も頷いた。
人間である以上、嫌な事、不快に思う事は人生の中で必ずあるものだろう。

それ自体は不思議な事ではないが、このような場所で思い出す嫌な事とはなんだろうか、二人は疑問に思う。

「うん、僕が小さい頃、大体……6、7歳の頃かな。家の爺様に、
「修行じゃ！」とか言われて、夜に家の近くの雑木林に放り込まれた事があるんだ」

「えっ!?!」

突然のカミングアウトに、二人は思わず驚きの声をあげる。

「いやあ、本当に大変だった。わけもわからずいきなり雑木林の中に、しかも真つ暗な中に突っ込まれたんだもん、スッゴイ怖かったよ」

「そ、それはそうでしょう……」

「ああ……あの時の事を思い出すだけで腹が立ってくる」

とても気持ちの良いものではない昔話をし、湧き上がる怒りを抑える龍清の横でエリオが突っ込む。

まあ、6、7歳の子供がいきなり真つ暗闇の雑木林に放り込まれて恐怖を覚えない筈が無いし、そんな事を思い出せば、それを行なった相手に怒りが湧き上がるのも当然の事だろう。

というか、下手をすれば暗所恐怖症確実のトラウマ物である。

「あ……あの、龍清さん。少し落ち着いてくださ……キヤッ!？」

とここで、怒りで拳が震えてる龍清をたしなめようとしたキヤロだったが、突如何かに足を引っ掛けて転んでしまった。

「キヤ、キヤロ!」

「大丈夫?」

当然、転んだ所を見た二人は心配してキヤロに近寄る。

「う、うん、大丈夫。でも、一体何に足を引っ掛けて……えっ?」

無事をアピールしつつも、何に足を引っ掛けたのか気になって足

元を見る。

だが、その引つ掛けたものを見たキャラも、その視線を追ったエリオと龍清も、その物を見て絶句する。

それは、一般武装局員に支給される、杖方のストレージデバイスだった。

「これって……デバイス……だよね」

「どうして、こんな所に……って、龍清さん？」

絶句していた二人だったが、ここでエリオは、龍清がデバイスが見つかった辺りの草むらをかき分けて何かを探しているのに気付く。

「……あつた。二人とも、これ」

しばらくして、草むらの中から見つけ出し、龍清が二人に見せたのは、エリオやキャラも着てる、茶色を基調とした管理局員の制服だった。

「やっぱりこれって、報告にあつた行方不明になつた魔道士の人のかな？」

「そうだと思います」

「という事は、この辺りに残りの人のも？」

「そうかもしれない。とにかく、この辺りを捜してみよう」

「はい」

既に一種の確信を得ていた三人は、見つかった辺りを重点的に捜索する。

その結果、やはり同様のデバイスや制服が発見された。

「これは決りだね。早速皆に伝えないと！」

「はい！……あれっ？」

さっそく事の子細をなのは達に伝えようとするが、その時、キヤロがその違和感に気付く。

「どうしたの、キヤロ？」

「念話ができない……誰とも繋がらない」

「えっ？」

突然の言葉に二人も一瞬ポカーンとなる。

「まさか、そんな筈は……あれ？ 本当だ」

「どうして何だ？」

始めは信じられなかったが、二人も直ぐに連絡を取ろうとすると、ノイズのようなものが入り混じり、念話が出来なかった。

どうしてかと三人が頭を悩ませた、その時……

「それはこの周囲に、外部からの干渉を遮断する結界を張ったからだ」

「「「！！」」」

突然声が聞え、三人は声のした方向に視線を向ける。

するとそこには、黒い煙のようなものが渦巻いており、やがてそれは、人の形を成していく。

「あつ！ お前は！！！」

そして、その声の主を確認すると、龍清は驚きの声を上げ、一気に警戒心むき出しになる。

「久方ぶりか、龍を継ぐ者」

一方、声の主である黒衣を纏った男も、龍清に明確な殺意を持って呟く。

「まんまと罠に嵌ったな」

「という事は、今回の出来事はやっぱりお前が！」

「そうだ。貴様達が私の邪魔をするであろう事は解っていた、だから私は貴様達を抹消することにした。だがただでは動くまい、その為餌を撒き、お前達を誘い込んだのだ」

「そう言う事か。占いの結果に『災いをもたらすもの』とあつたからね。そんな奴は僕の知る限りではお前しかいなかったからね」

「ふふふ、さて、無駄話はこのままでだ。まずは貴様から消してやる！」

そう言うつと、男は杖を龍清に向け、そこから放たれた黒い奔流が襲い掛かる。

「金固符!！」

無論、それでやられる龍清ではない。

すぐさま防御の符を取り出し、黒い奔流を防ぐ。

「ふっ……」

しかし、男は不敵な笑みを浮べていた。

すると突然、龍清の頭上から、巨大な腕が襲い掛かってきた。

「しまった!！」

そう思うが、既に防御は間に合わない。

そして、その巨大な腕が振り下ろされ、轟音と共に地面がめり込む。

「ふふふ、他愛も無い……むっ?」

男は龍清が潰れた事を確認しようと、めり込んで出来た地面の穴を覗き込むと、そこに龍清の姿はなかった。

不思議に思い、辺りを見渡していると、直ぐに見つかった。

「大丈夫ですか? 龍清さん」

「う、うん。助かった。ありがとう、エリオ」

「いえ、訓練の時のお礼です」

穴の開いた場所から少し距離を取った場所に、エリオと共にいた。どうやら、龍清が潰される寸前に、ソニックブームで助け出した

ようだ。

「ええい！ またしても邪魔しおって……」

「フリード、ブラストレイ！」

苦々しく思っている男のところへ、キャロに命じられたフリードがすかさず火球を口から放つ。

男はすかさず手に持つてる杖から黒い障壁を張り、フリードが放った火球を防ぐ。

「おのれ……まあいい、邪魔者がいるようだが、それもこの鋼來がいれば、わざわざ手を下すまでも無いか」

そう言つと、地面で杖を叩くと、下に黒い魔方陣のような紋様が現れ、そこから黒い煙のようなものが現れ、男を包み始める。

「待て！ 逃げるのか！」

「貴様を消すのは容易だが、邪魔者がいてはそれも進まん。それに、鬼門を制御せねばならないのでな」

（鬼門？ 鬼門だと！？）

「ああそうだ、貴様達を囲む結界はこの鋼來を倒す事で消える。尤も、貴様達がコイツを倒す事など、無いだろうがな」

そう言つと、男は煙に包まれて消えた。

「グウウウー……」

そしてそれと入れ替わるように、うめき声と共に光沢を帯びた肌を持つ巨人が現れた。

「また、でかいのを出してきたもんだなあ」

「えっ？ 前にもこんなことが？」

「うん、まあね」

少し呆れ気味に言う龍清だったが、直ぐに表情を引き締める。

「ま、それは兎も角。こういうとき、如何すれば良いと思うっ？」

そう二人に聞く龍清。

二人は顔を見合わせたあと、それぞれの意見を言う。

「さっきの人は、これを倒さないところから出られないって言うてました」

「連絡が出来ないから、外の人達に助けを求める事もできない。つまり……」

「そ、これを倒さないといけないって事だよね？」

その言葉に、二人も頷く。

「それに、向こうはやる気満々みたいだしね」

そう言うて龍清が指差した所には、再び巨人、鋼來の豪腕が振り

下ろされようとしていた。

程なくしてそれは振り下ろされるが、龍清とキヤロが障壁を張って一瞬の時間を稼ぎ、その隙に再び逃げる。

「とにかく、このままじゃ防戦一方だから、攻めに転じようか！」

「はい……！」

このままでは何時までも埒が明かない判断し、三人は覚悟を決めて鋼來に振り向く。

そして、それぞれの得物を構え、対峙するのだった。

第十六話 ファーストミッション（4）（後書き）

いつもの時間に更新できず、すいません。

それと私、一昨日の夜から腹が不調を訴えています。

今日中か明日には治つてると良いなあ。でも治ってなかったらまた定時に更新できないかもしれません。

その辺りの事も、どうか御容赦下さい。

それと予定を変更し、次回は練習を華ね、戦闘描写重視でいき、ファーストミッション編を終わりにしたいと思います。

でも次の任務はどうしよう、あっ、ホテルアグスタ的な話にはしませんよ？

第十七話 ファーストミッション(5)

「キエエエエエエ!!」

「アクセルシューター!」

「シュワルベフリーゲン」

奇声を上げながら襲い掛かってくる異形に、桜色の光球と紅い光を纏った鉄球が撃ち込まれ、命中した数体の異形は地面に墜落して行く。

龍清、エリオ、キャロが、今まさに戦闘を開始しようとしていたその頃、他のところでも事態は急転していた。

二組の報告と有事に備え、上空で待機していたなのはとヴィータは、龍清たちの連絡が無い事に、一足先に疑問を抱き、その異変にいち早く気付いた。

そして、三人のいたところに結界が張られたのを感じ、直ぐに急行しようとしたとき、突如二人の元を、スバル達を襲ったのはまた別の異形の大軍が襲い掛かってきた。

このため、二人は臨戦を余儀なくされ、救出にいけなっていたのだ。

「しっけーんだよ!!」

三又の矛を構えながら襲ってきた異形の突撃をかわすと、ヴィータは手に持つてるアイゼンで異形の背中を勢いよく叩く。

異形はそのまま勢いよく地面に叩きつけられ、その場に噴煙が上

がる。

「レイジングハート！」

《Short buster》

その一方、次々と襲い掛かる異形の群れに、なのはの十八番である砲撃が炸裂する。

桜色の極光が敵を包み、それが暗れると、異形がひしめいていた眼前一帯には何も残っていなかった。

「くそっ！ こいつら、いくらやってもきりがねえ！」

しかし、次々襲い掛かってくる異形たちに、ヴィータが毒づく。

実際、倒しても倒しても、何処からとも無く現れ、物量で攻めてくる異形たちに二人も辟易していた。

その上、今すぐに龍清達を助けに行かなければならないという思いもあって、二人は徐々に焦り始めていた。

「早く助けに行きたいけど……こつちも数が多いと、こつちも動くに動けないし」

「だけど、このままやってもジリ貧だぜ！ どうすんだよー！」

どうにもならないと解っていても、焦る気持ちから怒鳴り気味に叫ぶヴィータ。

なのはもその気持ちは察するも、未だに好転する気配の無い状況に、焦りを強くする。

しかし、そんな二人の気持ちなど知る由も無く、異形たちは再び奇声を上げて襲い掛かる。

「フォトンランサー、ファイア！」

しかしそこへ、別の方向から金色の魔力弾が異形に向って放たれ、そして貫く。

爆煙が晴れ、異形たちが落ちると、その向こうに人影が見えた。

「なのは、ヴィータ、大丈夫？」

「フェイトちゃん！」

「シグナムにアギト！」

二人の声の通り、現れたのはフェイトとシグナム、そして融合騎のアギトだった。

「どうしたヴィータ。この程度で音を上げるとは、新人どもの教導が忙しくて腕が鈍ったか？」

「はっ！ うるせえ！ コイツらバカの一つ覚えみてえに力押ししかしてこねえから、うんざりしてたんだよ！！！」

笑みを浮かべながら皮肉気味に言うシグナムに、これまた強気気味に返すヴィータ。

無論、嫌味でも皮肉でもなく冗談であり、ヴィータもそれが解ってるので腹も立たなかった。

「そうだ、フェイトちゃん！ 龍清君とエリオ、キャロと連絡が取れないの！」

「なんだって!?!」

なのはから今の事態を聞き、それを聞いたフェイトも驚きを隠せない。

「直ぐに助けに行こうとしたんだけどよ、コイツらがどんどん沸いて出てくるから手間取ってたんだよ」

「姉御、沸いて出るってコイツらはぼっくらか?」

そして自分たちの今の状況を話すが、その際の表現にアギトが突っ込みを入れる。

尤も、本当に倒しても倒しても次々出てくるため、表現事態はあながち間違っではないのだが。

「でもちよっと待って。それって、ティアナたちの方にも敵が来てるって可能性も……」

「うん。でもどっちみち、この敵を何とかしないと、助けにいけないよ」

四人が話してる間も、異形は次々と現れ、四人に襲い掛かる。

一体一体は然程強くなく、歴戦の勇士であるなのは達なら倒す事は造作も無いが、こつも数で攻められては援軍に行く暇など無い。

「ならば……アギト!」

「おう、あれだな!」

ここで、シグナムは事態を打破する為、アギトを呼ぶ。

「ユニゾン・イン!!!」

そしてそう叫ぶと、二人は光に包まれ、そこにはさっきとは違う髪と騎士甲冑をしたシグナムが立っていた。

「剣閃烈火……」

眩きながらレヴァンティンを構える。

その刀身には炎が燈っており、全てを焼き尽くさんとする勢いであった。

「火竜一閃ッ!!!」

そして、かけ声と共にレヴァンティンを横に一閃する。

すると、空を埋め尽くすほどの異形の大軍は炎に飲み込まれ、一瞬にして灰となって消えた。

「流石シグナムさんとアギトだね」

「よし、後はみんなの救援に……」

「待て、テストロツサ」

足止めをしていた異形の大軍が消え、フォワードの救援に行こうとしたその時、フェイトをシグナムが止める。

「救援には私とヴィータで行く、お前達はここに残れ」

「どうですか?」

「あれを見る」

シグナムが指差した方向には、再び空を覆うほどの異形の大軍が迫って来ていた。

「げっ！　まだくのかよ！！」

再びやってくる大群を目の当たりにし、ヴィータがそう洩らす。なのはとフェイトも、あれだけの大群がまだやってくるのかと、驚きを隠せない。

「まあ、そう言うわけだ。それに、あの大軍がやってくる方向に何かあるはずだ。お前達はそっちの対処に当たってくれ」

「……解りました」

「心配すんな。あいつらは簡単にやられねえし、あたしらもやらせねえよ！」

心配気味に了承するフェイトにそう言うと、ヴィータとシグナムは二手に分かれてフォワードの救援に向う。

「フェイトちゃん。心配なのは解るよ、でも……」

「解ってる。今は目の前の事に集中するよ」

そう言うと、二人は目の前の大群に再び目をやるのだった。

「リボルバーシュート！」

「クロスファイア、シュート！」

「虎王飛拳！」

一方、謎の魔力反応調査の為に赴いていたスバル、ティアナ、西麗のチームは、なのは達を襲ったのとは別の異形の大量軍に襲われていた。

別と言っても、向こうが鳥や蝙蝠などを模したような空を飛ぶ異形だったのに対し、こちらは牛の顔をしたものや巨大なムカデなど、地上の生き物や虫を模したものが多かった。

「ああもう！ 数が多いったらありゃしない！！！」

「ティアア、砲撃で一双とか出来ない？ これじゃきりがないよ！」

現在三人のポジションは、ティアナを中心にスバルと西麗が180度をカバーするような陣形となっている。

大量軍に囲まれている以上、フロントアタッカーである二人をカバーし、尚且つ前線向きではない彼女を守るように出来てる陣形である。

「このままじゃ確かにきりが無いけど、収束してる暇が無いのよ！それにアンタたち、私が準備を整えてる間、援護無しでコイツらの猛攻を防げる？」

「それはちよつときついわね。飛鎌脚！」

ティアナの問いかけに西麗はそう答えつつ、襲ってきた異形に鋭い蹴りをかます。

実際、倒すたびに次の異形が襲い掛かってくるため、格闘戦を得意とする二人もティアナの援護無しではきつい状況なのだ。

「でも、このままじゃどうにもならないし、何とかならないの？」

「今のところはないわね、残念ながら」

「そんな」

三人とも会話を続けながらも、攻撃の手は緩めなかった。

「っていうかこいつら、一体何処から出てくんのよ？」

「誰かが転移魔法で送ってるのかな？」

攻撃しながら呟くティアナの疑問に、スバルがしごくマトモな意見を出す。

これだけの数が押し寄せてくるのは、誰かが集団転送を行なっていると考えた。

だが、ティアナはその考えを否定する。

「それは私も考えたんだけど、集団転送でもこれだけの数を一辺に送ってたら転送する方は直ぐにはてるだろうし、ちびちび送ってたんじゃない状況にはならない」

「じゃあ、どうして?」

疑問符を頭に浮べるスバルだが、西麗がふと考えられる原因を口にする。

「あの魔力反応が原因……とか?」

召喚した神速槍で異形を真つ二つに切り裂きながらそう呟いた。そしてそれにティアナも頷く。

「それしか考えられないわね。恐らく、あの魔力反応がコイツらを呼び出何かなんじゃないかしら」

「じゃあ、あの魔力反応を何とかできれば、この状況から抜け出せるの!?!」

「何とかできれば……ね」

そう呟くしかなかった。

原因は予測できたが、それに近づく事が叶わないのが現状なのだから。

「とにかく、なのはさん達も事態に気付いてるでしょうし、暫くはこの状況を維持するわよ!」

「オッケー!」

「守りつてのは、性に合わないんだけどね！」

そうお互いに確認しあいながら、再び襲ってくる異形の群れに向かい、得物を構える三人であった。

「アルケミックチェーン！」

そして、結界内に閉じ込められた龍清、エリオ、キャラ口の三人は、結界からの脱出を図るため、謎の男が仕向けた巨人、鋼來こつらいとの戦闘に突入していた。

再びその豪腕を振り下ろそうとする鋼來に、キャラ口が出した桃色の魔力光でできた鎖が撒きつき、動きを阻害する。

「一閃必中！」

「龍王破山剣！」

そして動けなくなった所に、ストラーダを構えたエリオと、破山剣を取り出し、一気に斬りかかる。

しかし……

「えっ！？」

「なっ！？」

二人の刃は鋼來の巨体を貫くことも切り裂く事も出来なかった。そして、腕に巻きついていて鎖を引きちぎり、二人をその豪腕で薙ぎ払う。

「「うわっ！？」」

払われた二人はそのまま吹き飛ばされるが、体勢を立て直して着地した為、地面に激突という事態は避けられた。

「ブラストレイ！」

そこへすかさず、巨大化されたフリードから、普段の姿のそれとは比較にならない火球が放たれ命中する。

「やった！……えっ？」

命中を確認したキャラだったが、次の瞬間、目の前の光景を見て驚きを隠せなかった。

ブラストレイが命中した箇所は、傷一つ付いてなかったのだ。

「そんな！」

「硬すぎでしょ、どれだけ堅い皮膚なの！？」

龍清が叫んでると、再び鋼來が腕を振り下ろす。
それを難なくかわし、三人は念話で作戦会議を始める。

(どうする？ このままじゃまったく先に進まないよ)

(攻撃をかわすのは何てことないですけど、こっちの攻撃がまるで通じてませんよね、あれ)

先ほどの攻撃を見る限り、三人の攻撃は相手にダメージを負わせるどころか、かすり傷一つつけることはできなかった。

三人は共通の認識として、あの硬い皮膚を如何にかしななければ、事態は好転しないと考えていた。

(エリオ君。ヴォルテールなら、あの巨人に対抗できると思うんだけど?)

(だ、駄目だよ！ 確かにヴォルテールなら倒せるかもしれないけど、ここで使ったら火事になっちゃうよ!!!)

(そ、そっか……)

何か思いついたキャラだったが、その提案はエリオに即座に否定された。

キャラもそれを使うと何が不味いのか直ぐに理解した。

その一方で、再び龍清を狙って鋼來が腕を振り下ろし、それをひらりとかわして破山剣で攻撃するが、傷付ける事はできなかった。

「たくもつ、本当に硬いなあ、まるで鉄みたいに……鉄？」

攻撃しても傷つかないその体に文句を言う龍清だったが、ここで

一つひらめいた。

(二人とも、ちょっと良いかな?)

(はい)

(何ですか?)

(少し、本当に少しでいいから、時間を稼いでくれないかな?)

(何か思いついたんですか?)

念話で時間を稼いで欲しいと言った龍清に、エリオが聞いてくる。

(確証は無いけど、もし僕の読みが確かなら、何とかなるかもしれない)

そう呟く龍清、どうなるかはやってみなければわからないが、今は他に頼る手が無いのも事実。

龍清自身も不安はあったが、このままでは座して死を待つようなものだった。

(……解りました。出来る限りやってみます!)

(私も、何かお手伝いできますか?)

(よし、とりあえずあいつは動きが鈍いから、エリオが動き回っていれば大丈夫だと思う。キャロも暫く空を飛んで注意を引いて。後、強化の準備をお願い)

(はい！)

こうして念話を終えると、龍清は距離を置き、エリオとキャロは鋼來の周りを動き回り、相手を攪乱する。

(よし！ まずは……)

そして、自分の案に乗ってくれた二人の期待にこたえるため、龍清もまた、勝利の布石を敷き始めるのだった。

「着いた」

そして、その結界の外にヴィータは到着した。

その結界の中に、エリオ達が捕らえられているのだ。

「よしつ、じゃやるか。アイゼン！」

《R a k e t e n F o r m》

グラーフアイゼンから空薬莢が排出されると、ハンマーのヘッド部分片側にスパイク、もう片方に水神ロケットが現れる。

「ラケーテン……ハンマー！」

そして結界から少し距離を置き、回転しながらアイゼンを結界に叩きつける。

しかし、結界はびくともしなかった。

「ちっ。まあ、こんなもんで壊れるなら、とっくにあいつらが破って出てるか」

ラケーテンで破れなかった事に舌打ちするが、特に期待してなかったのかあっさり一人納得する。

「しかし、ここで時間を食ってるわけにもいかねえ。一気に行くか、アイゼン！」

《G i g a n t F o r m》

ヴィータのかけ声に反応し、空薬莖を二発排出すると、模擬戦で西麗を驚愕させた巨大ハンマーとなり、一気に振りかぶる。

「ギガント、シュラーク！」

そしてかけ声と共に、一気に巨大化したアイゼンを振り下ろす。

「ぶち抜けーーーーー！！」

かけ声と共にぶつかる結界とアイゼン。

この一撃が、結界内での勝負に影響を与えている事に、この時のヴィータは知る良しもなかった。

「う、うわっ!？」

「な、何なの!？」

そして結界内、鋼來を攪乱していたエリオとキャロは、結界内の振動に気付く。

当然、鋼來もそれに気付いき、二人への注意がされる。

「いまだ! ストラード!」

《Explosion》

それを好機と捉えたエリオは、ストラードを構えて一気に突進する。

その結果、鋼來の足元をすくい、その結果、鋼來は体制を崩す。

「……見つけた!」

するとそこへ、何かを見つけたらしく龍清が叫んだ。

「二人とも、下がって！」

「はい！」

そして合図を送り、二人を後退させる。

それを確認すると、四枚の札を空中に投げ、両腕を突き出すと、片腕に二枚ずつ張り付く。

それを確認すると、更に懐から五枚の札を取りす。

「まずは、龍王炎符水！」

まずは炎符水をだし、鋼來の胸の辺りに直撃する。

ダメージないようだが、命中した胸の辺りは真っ赤になっていた。

「そして……これだ！」

そう叫ぶと、取り出した五枚の札を空中に投げ、印を組む。

すると、投げられた五枚の札は円環状に配置され、回転しながら一つの円状の物が出来上がる。

「巽の方、風門解放！！！」

そう叫ぶと、円状の物体は開き始める。

「風門転送、行雲流水！」

そう言つて印を組んだ手を突き出すと、風門から大量の水が現れ、再び鋼來の胸の辺りを直撃する。

炎符水によつて熱せられた部分は大量の水によつて冷やされる。

無論、鋼來はダメージを受けた様子はなつたが、変化は直ぐに訪

れた。

冷やされた直後、胸の辺りにひびが入り始めたのだ。日々は次第に大きくなり、鋼來もそれに伴い苦しみ始める。

「今だ！ 二人とも！！」

「はい！ キャロ！」

「ブーストアップ！」

龍清が合図を送ると、すぐさま二人も攻撃に入る為、キャロがエリオに補助魔法をかける。

「ストラーダ！」

《Explosion》

そして再び空薬莖が排出され、ストラーダの槍先に電撃が纏われる。

「紫電一閃！！」

そして、かけ声と共に鋼來の胸元に向かって突っ込み、一気に貫いた。

「グオオオオオオオオ！！！！」

鋼來は悲鳴に近い断末魔を上げ、そのまま倒れる。それと同時に、結界が硝子のように碎ける。

「や、やった……」

その様子を見て、ホツとして気が抜けたのか、そのまま地べたに座り込む。

「龍清さん！」

「大丈夫ですか！」

突然のその様子に、驚いた二人が近づく。

「うん、大丈夫。ちょっと気が抜けて……ははは」

乾いた笑いを浮かべながらも無事をアピールする。

「おい、お前ら！」

とここで、ヴィータがやってきた。

「ヴィータさん」

「大丈夫か？ いきなり結界が壊れたからよ、何があったんだ？」

「えっとですね……」

状況説明を求められ、三人はさっきの出来事を話すのだった。

「ぬう、鋼來がやられたか……」

一方、巨大な魔力反応の正体である、巨大な魔力の渦の近くに立つ黒衣の男は苦虫を潰したような顔をしていた。

「だが、奴らは我が眷属たちの構成で疲れ果てている筈だ、この調子で行けば勝てる。この鬼門ある限り、まだ勝機はある」

男が言う魔力の渦「鬼門」から、絶え間なく異形が現れる。このために、物量で押し込めると考えた男は勝機を確信していた。

「ふふふ……我らの悲願、何人たりとも邪魔はさせ……ん？」

男が何か訝しげ、そ方向を見つめたその時……。桜色と金色の光が、鬼門に向って放たれ、命中する。

「なっ！ き、鬼門が！？」

光が晴れると、そこにあつたはずの鬼門は消えていた。

「シーリングシュート。久しぶりにやったけど、流石なのはだね」

「フェイトちゃんも、流石だよ」

その極光が放った正体は六課分隊長二名、なのはとフェイトであった。

「おのれー！ よくも邪魔をー！」

鬼門が消えたことに憤りを表すと共に、再び杖を振りかざし、黒い魔方阵の中に消えて行く。

「待ちなさい！」

男が転移しようとしてるのを確認し、フェイトが一気に加速して捕まえんとする。

しかし、彼女が到達するより前に、男は消えてしまった。

「…………逃げられた」

そう呟くのでいっばいだった。

（おーいなのは、フェイト）

とここで、ヴィータから念話が入った。

（ヴィータ？ どうしたの？）

（悪いんだけどさあ、ちょっと手を貸してくれねえか？）

（どうしたの？）

（それがよ、龍清が力が抜けてるらしくてな、エリオとキャロも無

事だったんだけど、遺留品を運ぶので手一杯でよ、アタシじゃ身長差あるからさ、運ぶの手伝ってほしいんだよ

(あはは、初めての任務だもんね、解った)

(よろしくなー)

そう言うと念話が切れる。

「いじつか」

「うん」

さっきの念話で多少悔しさがまぎれたのか、そう返すと、フェイトはなのはとともに飛んで行く。

こうして、特務六課最初の任務は終わりを告げたのだった。

第十七話 ファーストミッション(5) (後書き)

今回はお休みさせていただきます。

今の今まで執筆してて、疲れています。

とりあえず、次の任務の内容も考えないと……。

第十八話 ミッションアフター

「ん、ん……」

陽光が燦燦と降り注ぐこの日、その太陽の光に照らされ、龍清は目を覚ました。

「あれ？ ……僕何時の間に部屋に？」

目を覚まして起き上がり、あたりを見渡して、そこが自分の部屋だと直ぐに解るが、何時部屋に入ったのかと首を傾げる。

そこで昨日の事を思い出しながら、何故部屋にいるのかを考え始める。

（えーっと、昨日は訓練を終えて、デバイスルームに行って説明を受けてたら、出勤要請が出て……）

まずは日々の日課ともいえる訓練の事から始まり、そこからデバイスルームでの説明、ファーストミッションへと考えをシフトして行く。

そして、ミッションの途中での出来事も整理していき、途中で力が抜けて動かなくなってしまう、なのはとフェイトにへりまで送ってもらった事なども整理して行く。

その時は、あまりの自分の不甲斐なさに恥かしくなってしまう。

（そ、それで、へりに乗って六課の隊舎に戻って……ここから先が思い出せない）

へりに揺られながら戻ってる途中からの記憶が途切れており、気が付いたら部屋で寝ていたという結果に至った。

ただその時、ミッション中の出来事や、へりに揺られてる途中、隣で西麗が大口を開けて寝ていた事を鑑み、一つの結論に至る。

「寝ちゃったのか……」

確かにへりに揺られてる間、疲れによるものなのか、睡魔に襲われてうとうととしていた記憶があり、そこから先の記憶はやはりなくなってる。

その様子から察するに、恐らくへりに揺られてる間に疲れがどつと眠気として襲ってきて、そのまま勝てずに眠ってしまったのだろう。

そして、眠ってしまった自分達をたたき起すのもかわいそうだと思っただのは達が、自分と西麗を部屋まで運んでくれ、そのまま朝を迎えたのだろうという結論に至った。

「……ちよつと情けないや」

力になるとか言っておきながら、助けになるところか迷惑を掛けてしまったと、少し自己嫌悪に陥ってしまう。

別にこの程度の事、彼女達は気にしていないだろうが、当人としてはそうもいかなかったりする。

「……シャワーでも浴びてこようか」

今気づいた事だが、自分の姿が制服（上着はハンガーに掛かっていた）姿であり、しかも、へりの中から今の今まで眠っていたのだとすれば、当然、夕食も入浴もしていないのだ。

この後、訓練や朝食などで人と顔を会わせる事を考えると、流石にこのままというわけにはいかないのだ。

そう考え、着替えを持って部屋を出ようとしたとき、頭に重みを感じた。

「ん？ 春青？」

「クキュー」

重みの正体は、自分のユニゾンデバイスである春青だった。

「一緒にシャワー浴びようか」

「キュー！」

そう問いかけると、春青も嬉しそうに鳴いた為、一緒に部屋を出たのだった。

「あっ……」

「「あっ」「

制服に着替えてシャワールームを出ると、スバル、ティアナとばったり鉢合わせした。

「龍清、おはよう」

「お、おはようございます」

返答に困っていると、さも当然のようにスバルが挨拶を交わしてきたので、龍清もとりあえず挨拶を返す。

「昨日はお疲れ様。大変だでしょ？」

「え、ええまあ……終わった後寝ちゃったみたいでしたし」

「まあ、初めての任務で緊張していたんでしょ。それにエリオとキヤロから聞いたんだけど、結構大変だったみたいね」

「あはは……でも、二人がいたお陰で助かりましたから」

スバルから労いの言葉をもらった後、自分が寝てしまった事を自嘲気味に言うが、エリオ達から事情を知っていたらしく、ティアナもスバルもさして気にしている様子ではなかった。

その様子を見て、龍清は少し胸を撫で下ろす。

「あれっ？　そういえば西麗は？」

とここで、スバルが西麗がない事に疑問をあげる。

訓練の時も、大概二人で着たりしてただけに、彼女がない事が

不思議だった様だ。

「西麗なら、まだ部屋で寝てますよ。朝に弱いものだから、中々起きないんですよ」

「そういえば、訓練始まる前は結構眠たそうにしてたわね」

龍清の軽い説明に、これまでの様子を思い出して、ティアナの言葉と共に三人一緒に苦笑する。

訓練が始まる前の彼女はかなり寝起きと寝相が悪く、起きてもかなりの寝惚け眼で足取りも若干危なかったりする。

「でもそろそろ起きないと、訓練に間に合わないよ？」

「ええ、ですからこれから部屋に戻って起きてきます。すみませんが、遅れるかもしれないのはさんに伝えておいてくれませんか？」

「解ったわ」

「オツケー！」

言葉を交わすと、龍清は二人と別れて部屋を後にするのだった

数分後、甲高い金属同士がぶつかる音と「ニャアーアー!?」という鳴声に似た悲鳴が、二人の部屋の当たりから聞えたのであった。

「はい、今日はここまで」

「「「「ありがとうございます!」「」「」

「「あ……ありがとうございます……」……ました……」

そして、朝6時から始まった朝練も終了し、なのはのかけ声にフオワードたちは元気よく答える。

約二名、息切れを起こしているが。

「今日は昨日の任務の事でブリーフィングを行なうから、午後の訓練はなし。皆も疲れていると思うから、終わったらゆっくり休んでね」

『はい……』

息切れを起してた二人も、何とか息を整えて返事をして、その日の訓練は終了した。

そして所変わって、六課の食堂。

朝練を終えた一行は、六人と三匹揃って朝食をとっていた。

「それにしても……本当によく食べるわね、あんた達」

「「ふえ？」」

わかめスープを啜りながら西麗が呆れ気味に言う方向には、うず高く詰まれたパスタ二つを次々その胃袋に収めていく、スバルとエリオの姿があった。

既におなじみになりつつある光景であるのだが、やっぱり見てるほうとしては圧巻の一言である。

「それだけのものが一体何処に入ってるのよ？」

「えっ、これぐらい普通だよな？」

「はい」

そんな疑問さえ、二人はさも当然のように答えた為、西麗もそれ以上追求できず、頭を抱え込むのだった。

「気にするなつて言われても、やっぱり気になっちゃいますよ。一体二人とも、それだけの量が何処に行ってるの？」

定食の焼き魚を口にしながら、龍清も思わず胸のうちの疑問を口にする。

「まあ、なれないうちは思うのも無理ないけどね。その内気にならなくなるわよ」

「はい、私もそうでしたから」

思わず疑問を浮べた龍清だったが、経験者の談と言つべきなのか、ティアナとキャロのその言葉に、「はあ」と気の抜けた返事で返すしかなかった。

「そつえばさ」

とそこへ、スバルが龍清に一つ聞いてきた。

「龍清つて、占いが得意なんだよね？」

「はい、そうですけど？」

そう答えると、スバルは突然言つて来た。

「じゃあさ、ちょっと見せてくれない？」

「えっ？」

突然のそんなお願いに、龍清も驚く。

「ちょっとスバル！ いきなり何言い出すの！」

「だってさー、この前の任務の時の占いもぴったりだったじゃん。凄く気になるよ！」

任務の時の占いも、簡易的ではあったが、占いの内容が見事に当たっていたのだ。

それに、スバルも年頃の女の子ということなのか、こういう事に興味心身だ。

「いや、見せるのは一向に構いませんけど、この後皆さん仕事ですよ、見せてる暇無いんじゃないあ？」

「あっ……」

「そうよ。これから任務の報告書を書かなきゃいけないのに、そんな事してる暇あるわけ……」

「面白そうやなー」

龍清の言葉にスバルも詰まり、そこにティアナの追撃があったのだが、そこへ思いもよらぬ援護がスバルについた。

全員が振り向くと、六課の部隊長はやてがそこにいた。

「んまあ、仕事を放り出すのは駄目やから、機会があったらって事でええかな？」

「ええ、別に構いませんけど」

はやての提案に、別に見られて困るものでもなかったので、龍清も抵抗なく承諾する。

「さて、そろそろ朝の時間も終わるで。報告書、しっかり作製してな」

「うう、書類仕事かあ……ティアく「自分でやりなさい」……まだ何も言っていないのに」

書類仕事が苦手なスバルは鬱な気分になり、ティアナに助力を乞うも、一言でばっさり切られ、orzとなる。

そんな姿に、龍清とエリオとキャラは苦笑し、西麗は呆れながら酢豚を口に頬張るのだった。

そして午後、ブリーフィングルームに六課の隊長陣、フォワード陣、ロングアーチスタッフが集められた。

「さて、皆に集まってもらったのは、昨日の任務での事や」

はやてがそう言うと、フォロスクリーンに、例の魔力の渦と、なのは達を襲った異形達、そして、龍清達の言う黒衣の男の映像が映った。

それを確認すると、隣にいたシャーリーが説明を始める。

「まず、皆さんを襲った、こちらの異形の集団についてですが。調べたところ、該当するデータは存在しませんでした」

コンソールを叩きつつ、シャーリーは件の異形たちが管理局のデータベースになかった事を伝える。

ロングアーチのメンバーは驚愕の表情をしていたが隊長陣とフォワードメンバーは然程驚いてはいなかった。

「んで、この手の事に詳しくそんな専門家は如何見る？」

「そこで僕に振りますか……」

突然話題を振られ、龍清が呆れた表情で呟く。

「私見ですけど、普通の生き物が何かの要因で変異した、と考えるのが普通ではないでしょうか？」

「まあ、それが普通だよな」

「そうですね」

至極真つ当且つ論理的な返答に、執務官二人も同意する。

まあ、普通に考えればそう考える方が自然であるのは明白である。

「まあ、そうやね。とりあえず、こっちは数でせめて来る事以外は
大した問題やないから良いけど、本題はこっちや」

そう言つて次にスクリーンに映つたのは、例の魔力の渦だった。

「こっちについては、まだ詳しい情報がないのでなんとも言えませ
んが。恐らく、転送魔法の一種だと思います」

「そうだよね、その渦から次々さっきのが出てきたわけだからね」

「あれは厄介だったぜ。次々沸いてくるんだもんな」

渦の説明について、様子からなのはが同意し、その時の事を思い
出していたヴィータが肩を竦めながら言う。

倒しても倒しても次々とその渦から沸いてくる、実際に相手した
だけに、その厄介さは身にしみていた。

「この渦。確か、鬼門つて言つてたよね？」

「うん。そうだったね」

「鬼門……ですか……」

「どつしたんですか？」

鬼門という言葉に思うところがあつたのか、考え込む龍清が気に

なり、キャロが聞いてくる。

「なんや、何か心当たりでもあるんか？」

「ええ、まあ……」

一時間置いて、龍清は鬼門について喋り始める。

「鬼門というのは北東の方角の事で、陰陽道では鬼が出入りする方角として、万事に忌むべき方角なんです」

おー、と、なのは、はやて、西麗の地球出身組は感心する。

後はちんぷんかんぷんであったが、スバルにいたっては頭から若干煙が出始めている。

「えーっと……つまり、良くない事が起こりやすい方角、ということですよ」

簡単に説明して、その場にいた全員が納得する。

「まあ、それはともかく。この鬼門という渦が、異形たちを出す転送魔法の一種という事はまず確かやな」

「そうですね」

「そして、この事件の容疑者として、この黒衣の男の逮捕を重要課題としてこの案件に対処します！」

『はい……』

こうしてブリーフィングは終わり、一同は新たな決意を持ってこの案件に取り組む事を誓うのだった。

第十八話 ミッションアフター（後書き）

いつもどおりの滅茶苦茶展開でしたが、いかがだったでしょうか？

とりあえず自分の力量と実家のパソコンの状態では、これが限界です。

とりあえず感想だけでなく、ここが駄目、こうしたほうがいい、という指摘も下さい！

第十九話 執務官のお手伝い（前書き）

今回はD級管理者「永雛」様の御提案により、サイドストーリー的な話にしたいと思います。

まずは導入部から、それではどうぞ

第十九話 執務官のお手伝い

「……暇だね」

「そうね」

「クキユ」

「ニヤ」

いつものようになのはの朝練を受け、終了後に朝食をとった二人と二匹は、六課隊舎内をただ歩いていた。

以前前述したとおり、囑託とはいえ、二人は民間協力者という立場なので、六課の事務仕事などには基本参加しなくてもいいのだ。そのため、基本的に六課全体が忙しくなる8時から12時程のこの時間帯は、基本的にフリーで暇なのだ。

「でもさ、このままでいいのかな？」

「何が？」

「ほら、僕達民間協力者って事になってるらしいけど、皆が一生懸命仕事してるのに、こうやってぶらぶらしてるってどう？」

「……確かに」

龍清の言い分も尤もだった。

協力者とは言え、民間人に正規局員と同じ仕事を全て押し付ける程、管理局も血も涙もないわけではない。

まして二人は志願して危険な任務に前線メンバーをとって出てもらってるのだ、これだけでも十分ありがたい事だ。

しかし、任務がない時は何処もそうだが、この六課も平和そのものの。

非番の局員以外は皆仕事に勤しんでいるが、万年非番のような二人にとって、任務以外の仕事など無縁そのものだった。

しかし、自分から協力するといっておいて、これは如何なものかと、龍清は常々思っていたのだ。

「でもさ、任務以外であたし達にできる事ってあるの？ 書類仕事とか出来ないわよ」

「そ、それは……」

だが、西麗の言葉に直ぐに詰まってしまふ。

任務以外でいざ手伝える事となると、スバルたち前線メンバーや、ロングアーチスタッフが毎日やってる報告書作製などの書類仕事だが、18歳の二人には、当然書類の作り方のノウハウなどない。

他にも仕事は山ほどあるが、どれも自分たちに出来るものがあるのかと言われれば、残念ながら肯定は出来なかった。

「……自主練でもしてようか」

「そっね」

「キユー」

「ニヤー」

とりあえず自分たちに今できる事といえば、任務の時、足を引っ張らないように鍛えておく事。

そう考えた二人と二匹は、時々やってる自主錬をしようという結論に至り、移動を始めるのだった。

「あれっ？ はやてさん？」

「本当だ、フエイトさんとティアナもいる」

移動を始め、食堂についた二人はある光景を見た。

それは、向かい合わせに座って難しい顔をしている、六課の部隊長はやてと、凄腕の執務官、フエイトとティアナだった。

「如何したんですか？」

「あっ、龍清君。西麗ちゃんも」

三人の顔を見て心配になった龍清が、はやてに声を掛ける。
龍清と西麗自身、三人のこんな顔を見るのは初めてといえは初め
だったので、何かあったのかと気になったのだ。

「実はな、本局と地上本部から、フェイトちゃんとティアナにそれ
ぞれ仕事が入ったんよ」

「えっ？ 二人同時にですか？」

「んまあ、ほぼ同時やな」

はやての話によると、ついさっき、執務官であるフェイトとティ
アナの二人に、本局と地上本部から、それぞれ仕事が入ったのだ。
フェイトは本局から、とある管理外世界でロストログアと思しき
反応があったため、その調査と確保。

ティアナは地上本部から、違法魔道師による連続殺人事件の捜査
協力であった。

「でもそれなら、早く行った方がいいんじゃないんですか？」

「それはそうなんやけど……」

「何？ 何か不都合があるの？」

「どっちも、何かあるのか解らないから、助っ人に誰かについてき
てもらおうと思ったの」

「でもタイミングが悪くてね、皆殆ど出払ってるのよ」

龍清の尤もな言い分に言いよどむはやてに、気になった西麗が問

うと、フェイトとティアナがその理由を話す。

ロストロギアと言うのは、その大半が危険なものであり、いくら凄腕執務官のフェイトといえど、一人で行くのは危険を伴う。

ティアナのほうも、違法魔道師というのは殺傷設定で魔法を使う連中もいるので、一人で出すわけには行かない。

そこで、誰かに助っ人として同行してもらおうと思ったのだが、実はそれぞれにタイミング悪く同じ様な内容の以来や要請が来たらしく、殆どの人が居ないのだ。

「なのはちゃんとヴィータは地上本部の方で新人たちの教導、シグナムとアギトも首都航空隊に出向しておらんし、スバルはさっき防災部隊の方で救助要請が届いたって言うんで飛び出していったし、もうたし、エリオとキャロも、密猟者の確保に協力して欲しいって要請があつて行ってしもうたんよ」

「そ、それは……」

「前線メンバーが殆ど抜けてる。この上あの男が何か行動起したら対処できないんじゃないか……」

恐ろしく間の悪いこの状況に、龍清と西麗も顔を青くする。

この上フェイトとティアナも居なくなるわけなので、もし例の黒衣の男が何かリアクションを起したり、最悪六課を襲撃されたりしたら一溜りもないだろう。

とは言え、この六課には龍清と西麗に、はやて、シャマル、ザフイーラ、ライン、ヴァイスと、それなりに戦えるメンバーがいるので、全く無防備というわけではないのだが。

「まあ、それは兎も角としてな、二人に同行できる人がいなくて困ってるんよ」

「ロストロギアは危ないものも多いから、シャーリーは連れて行けないしね」

「あたしも補佐がいればいいんだけど、いないからね」

ロストロギアの危険性を重々承知してるフェイトは、後方でのバツクアップ主体の自身の補佐、シャーリーを危険な目にあわせるわけには行かない。

ティアナも一人で行動するのは今に始まった事ではないが、内容が内容だけに、念には念を入りたいのだ。

「あのお、でしたら……」

とここで、話を粗方聞いた龍清は三人にとってとんでもない事を言い出した。

「僕達を連れて行くつてのは如何でしょうか？」

「「「えっ!?!」」」

突然の提案に、三人は素っ頓狂な声を上げる。

「要するに、連れて行く人がいなくて困ってるんでしょ？ あたし達もやる事無くて暇を持て余してた所なのよ」

「人手が足りないって言うなら、僕達がそれぞれ行けば大丈夫でし

よ？ お手伝いくらいは出来ますし」

「そ、それはまあ、確かにそうやけど……」

確かに今誰もが都合がついて一緒にいける人がいないため困っていた所だ。

正規局員であるなのは達はこのように都合がつく事もあるが、それに対し、囑託である二人は基本的に仕事がないため、都合がつく事は殆どない。

しかし、龍清の提案にはやて達は難色を示す。

「でも、ロストロギアって危ないものが結構あるし、ティアナの所だつて殺人事件を起してる魔道師が犯人だよ？ 危険だよ」

「フェイトさん、僕達ここに来る前から何度も危険な目に遭ってますし、この前だつて任務で危ない目に遭ったんですから、今更ですよ」

「つて言うか、あたしもそのロストロギアの保有者だし」

「そ、それは……」

すっかり忘れてしまいがちだが、西麗もロストロギアとして、春青と白秋の核となつてる宝珠を所持している。

一応申請は通っているし、危険度も低いので、さして問題はないのだが。

「それに……協力するって言うておきながら、皆が働いてるのに何もしないってというのは心苦しいですし、『このままでいいのか？』って思うんです。だから、できる事は協力したいんです！」

そして最後に、常々思っていた胸のうちを打ち明ける。

別に誰かにそんな感じの事を言われたからとか、そう言うのはない。

寧ろ、目の前にいるはやて達も含め、この六課の人々は良い人達ばかりだ。

民間協力者とは言え、やる事もなく、こうやって暇を持て余して二人に苦言を言ったりせず、二人が自主錬してる姿を見かけたりすると、逆に励ましの言葉を掛けてくれたりするのだ。

だが、いやだからこそ、自分たちにも何か力になれる事があるのではないかと、常々思い悩む事があった。

それに、自分から力になると、協力すると言っておきながら、このままで良いのかという思いが、これに拍車を掛けていたのだ。

西麗もそこまで思いつめてるわけではないが、このままではいけないという事は常々思っていた。

その為、口にごそ出さなかったが、その目は龍清のそれと同じだった。

「「「……………」」」

龍清の胸のうちを聞いた後、その場を暫く沈黙が支配する。

「フエイトちゃん、ティアナ」

が、その沈黙を、不意にはやてが破る。

「正直な、私も六課の任務以外で二人を危険な目にあわせるのは感

心せえへん。でもな、二人がここまで力になりたいといってるのに、その熱意を無碍にするのは、もっと悪いとおもわん？」

その言葉が意味する所はただ一つ。
了承、ということだった。

「それじゃあ「但し！」……但し？」

意味を即座に理解し、龍清が喜びの声を上げようとしたとき、はやてが釘を刺してきた。

「現場では二人の指示に従うこと。それと、突っ走って無茶したりせえへんこと。これが守れんようなら、同行は認めんで！」

その時のはやての顔は、二人が見た事もないほど真剣な顔だった。その顔に二人は一瞬たじろぐが、直ぐに少し間をおいて言った。

「解りました。必ずお約束します！」

「当然の事だもんね、了解！」

「よし、それならオツケーや。ほな二人とも、お願いできる？」

「はい!!」

こうして、はやての了承を得て、二人はフェイトとティアナの手伝いをする事になった。

が、その直後、はやてがこんなことを言って来た。

「せやけど、万が一約束を破ったりしたら、なのはちゃんに砲撃を

撃たせるさかい、覚悟しいや？」

「「そ、それだけは御勘弁を—————!!」」

悪戯じみた笑みを浮かべながら言ったはやての言葉に、二人は訓練の時の恐怖を思いだし、お互いに抱締めあつて震えだす。

そしてそんな二人に、フェイトとティアナは苦笑しつつも、内心同情するのだった。

くオマケく

地上本部、訓練場にて

「……………くしゅん!!」

「ん？ どうしたなのは、風邪か？」

「ううん、何か私の話をされたような……………」

こんなやりとりが、あつたとかなかったとか

第十九話 執務官のお手伝い（後書き）

次回からこの話を本格的に進めます。

まずはフェイトの方から。誰がついてくのか、どんな内容になるのか、次回をお楽しみ下さい。

第二十話 執務官のお手伝い（ロストログニア搜索）（前書き）

我が城、金沢の下宿先に戻る目処が立ちました。

9月19日の月曜日です。

つまり、実家のよぼよぼパソコンでの執筆は、これで一旦終了です。

次からはマイパソコンでの執筆になるので、実家での執筆時より執筆し易くなる為、実家にいる間の執筆での経験なども活かし、よりよい作品に仕上げたく存じます。

さて、今回はフェイトのロストログニア搜索の話し。
ついて行く人物は誰か、そして一体どうなるのか？

それでは、どうぞお楽しみください。

第二十話 執務官のお手伝い（ロストログニア搜索）

「ここですか？」

「うん。そうだよ」

ここはとある無人世界。

その地に、フェイトと龍清は降り立った。

二人がやって来た目的は一つ。

この地で反応が出たというロストログニアの搜索、ならびに確保である。

「それで、そのロストログニアはどこに？」

「もらったデータによると、もう少し先みたい」

二人はフェイトのデバイス、バルディッシュユに表示されるデータを頼りに歩き出した。

空を飛んで移動するほどの距離でもなかった為、歩いて行ったのだが、暫くすると、反応のあると思しき場所に辿り着く。

「……これって」

「遺跡だよな、どうみても」

それは、遺跡と呼ぶのにふさわしい建物だった。

「この中に、そのロストログニアが？」

「反応はこの中からしてるみたいだし、間違いないと思う」

バルディッシュに映し出されてるデータには、間違いなく遺跡の中からロストロギアの反応がいている。

これはつまり、この中にロストロギアがある事を示している。

「でも、これそのまんま入って良いんでしょうか？ こういうのって、中に侵入者撃退用のトラップが仕掛けられてたりするんじゃない？」

「でも、見た限り他に入り口もないし、ここでもたついていても仕方ないよ。罠があるかもしれないけど、とりあえず、進むしかないと思う」

「ですよね」

龍清は罠が仕掛けられてる事を考えるが、ロストロギアを確保するのが、管理局員の務め。

執務官であるフェイトは無論の事、囑託魔道師である龍清もそうなので、あーだこーだ言ってもこの中に入らねばそれをなせない。

と言うわけで、フェイトと龍清は遺跡の中に入り、データを頼りにロストロギアを捜索するのだった。

「何ていうか……意外なほどすんなり進みますね。逆に怖いぐらいです」

「気を抜いちや駄目だよ。まだ道半ばだから、罨がないとは言いきれないよ」

「解ってます」

遺跡の中に入って捜索を続けるフェイトと龍清だったが、現在の所、罨らしい罨に遭う事もなく、すんなり進んでいる。

だが、目的のロストロギアは発見できてないので、今だ気が抜けないのは事実である。

ちなみに遺跡の中は暗く、本来なら道も壁も見えないのだが、フェイトが掌に変換資質で電気の球体を作っており、龍清も火式を使って火球を浮遊させて明かりを灯している。

「それにしても、無人世界って聞いてましたけど、こんな遺跡があるなんて思いませんでしたよ」

明かりを灯して共に移動しながら、龍清はふと思った事を口にする。

無人世界と呼ばれてるとおり、この世界には人っ子一人いない。

それは歩いている時に改めて認識したが、まさか人がいない世界に遺跡があるとは想像してなかったのだ。

「無人世界と言っても、大きく分けて二つあるんだよ？ 一つは元から人が住んでいない世界。もう一つは、何らかの要因で滅びて、人がいなくなってしまった世界」

「滅びてって。それって、ロストロギアの所為だったりですか？」

何らかの原因と聞いて、龍清は真っ先にそう聞く。

ロストロギアの事は囑託試験勉強で習っており、その危険性に思わず息を呑んだほどだ。

更に聞けば、自分たちの故郷である地球でも、世界を滅ぼしかねないロストロギアが二度事件を起したということも聞いていたので聞かずに入られなかった。

「勿論、ロストロギアが原因だったりもするよ。でも、戦争だったり、質量兵器……ああ、質量兵器って言うのは、魔力を使わない兵器の事ね。地球で言う所の爆弾とか核兵器とか、そういうのね。そういうのも原因だったりするから、一概にはいえないんだけどね」

「そうですか。でも、この世界は……」

「多分、後者の世界だと思う」

遺跡があるという事は、この世界に文明が存在した事を示している。

しかしそれなのに無人世界になっていると言う事は、何らかの要因でこの世界に住んでいた人が滅んでしまったのだらう。

「諸行無常、盛者必衰って奴か……」

隆盛を誇つてたものもいずれは衰退する。

世の理とは言え、龍清は虚しさを感じずにはいらなかった。

「でも、こつという遺跡の調査って、本来はユーノの専門なのになあ」

「ユーノ？」

話を続けながらも、ロストログアの搜索を続けている最中、フェイトがそう呟く。

その際出た聞きなれない人物の名に、龍清は思わず首を傾げる。

「ああ、ユーノって言うのはね、私やなのは知り合いで、無限書庫の司書長を務めてるの。ユーノは一族がこつという遺跡の発掘とか、考古学の専門だから、連れて行けば助けになつただろうなあって」

「へえ。確かに、遺跡調査なら、そういう人の出番でしょうね」

「うん。おっと、そろそろ目的地に着くみたい」

バルディッシュに映し出されるディスプレイに、ロストログアの反応が強くなった事が示されると、二人はおしゃべりをやめ、気を引き締めつつ。その目的地に向うのだった。

二人がついたのは、明らかに部屋と呼ぶにふさわしい広さの場所だった。

天井に穴が開いており、そこから光が差し込んでいるため、部屋は通路と違って非常に明るかった。

目の前に石段がある事意外は特に何の変哲もなく、その石段の上に、怪しい光を放つ円形の鏡があった。

「あれが、ロストロギアでしょうか？」

「反応はあの鏡からしてるみたいだから、間違いないと思う」

バルディツシュに映し出されているディスプレイを見て、龍清の問いにフェイトは確信を持って答える。

「じゃあ、あれを封印して持ち帰れば、この任務は終了ですね」

「あつ、封印は私がするよ。龍清、まだそう言う術知らないでしょ？」

「あつ、はい。じゃあ、お願いします」

「うん、任せて」

そう言って、フェイトがロストロギアの封印に掛かろうとした時だった。

突如、ロストロギアが輝き始めた。

「じ、これは一体！」

「龍清！ 気をつけて！！」

「あつ、はい！ 金式！！」

容易ならざる事態と察したフェイトの言葉に、龍清は咄嗟に金式の札を取り出し、それを地面に貼り付け、自分とフェイトと、ロストロギアの間には壁を作る。

暫くすると、輝きは収まっていった。

「大丈夫ですか？」

「平気。龍清は？」

「僕も平気です。それより、さっきの光は一体……えっ？」

「どうしたの？ 龍……清……」

龍清は目の前を見た途端、我が目を疑った。

その様子に気づき、フェイトも前を向くと、驚きを隠せず絶句する。

何故なら、ロストロギアのある前を見た途端、二人が目にしたのは……

「わ、私？」

「どうして、僕が……」

もう一人の「自分たち」だったのだから。

「ど、どういことですか？ 何で、僕達が……」

「きっと、ロストログアが発動したんだ」

突然の事に困惑する龍清に、
「こついう場に慣れているのか、フェイトは冷静に予測する。」

「えっと、こついう場合って如何すれば？」

「落ち着いて。とりあえず、あの私達が何もしないなら、このまま封印処理を続行しよう」

少しばかり落ち着きがなくなっている龍清、それを窺めつつ、これから取るべき行動を言うフェイト。

とりあえずの行動として、目の前の自分たちが危害を加えるような事をしなければ、問題なく封印処理を行うという。

暫く様子見をしていたが、特に向こうは動く気配がなかった。

「……来ないみたいですね」

「そうだね。じゃあ、このまま封印を行なおうか」

とりあえず危害は加えてこないと判断し、ロストログアの封印に取り掛かるとする。

しかし、封印処理の為にフェイトがロストログアに近づこうとしたその瞬間。

「!?!」

突如、もう一人のフェイトが襲い掛かってきた。

「くっ!」

振り下ろされるサイズフォームのバルディッシュをすぐさま防ぐが、その力に驚いていた。

(この私、見た目だけじゃない。踏み込みの速度、振り下ろすスピードまで同じだった!)

まるつきり自分と同じ動きをした目の前の自分に、フェイトは驚きを隠せない。

「龍王、炎符水」

しかしそこへ、今まで静観していたもう一人の龍清が、炎符水を放ってくる。

「しまった！」

もう一人の自分が攻撃を仕掛けてきた時点で、もう一人の龍清が攻撃を仕掛けてくる事は十分に予測できた事だった。

しかし、目の前の自分があまりにも自分とそっくりな動きをしている事に気がいつてしまい、その事を完全に失念してしまっていた。

「龍王炎符水！」

しかし、フェイトに向って放たれた炎符水は、もう一つの炎符水によって阻まれる。

それを放ったのは、自分と一緒に来た龍清だった。

「このっ！」

そして龍清は破山剣を手に、もう一人のフェイトに斬りかかる。すると、もう一人のフェイトはすぐさま離れ、龍清の攻撃をかわす。

「フェイトさん、大丈夫ですか！」

「うん、大丈夫。ありがとう、龍清」

「いえ、礼には及びません」

龍清のお陰で危機を脱したフェイト。

礼を言った後、龍清と共に目の前の自分たちに向き直る。

「龍王、破山剣」

すると、もう一人の龍清も、その手に破山剣を持つ。

だが、もう一人のフェイトもそうだが、よく見てみると、破山剣を持っている手が左手だった。

「炎符水だけじゃなく、破山剣まで一緒なんて」

「ここまで来ると、私の方も油断は出来ないね」

さっきの様子を見るに、おそらく向こう側のフェイトも、同じ技、同じ魔法を使ってくることだろう。

自分たちと全く同じ武器、同じ技を使う事に驚く二人に対し、向こうのフェイトと龍清はバルディッシュと破山剣を構える。

「これって、倒さないと封印は出来ないって事ですかね？」

「そうだね。でも気をつけて、ただの偽者ってわけじゃないみたいだから」

「はい！」

そして二人もまた、お互いの得物を構え、もう一人の自分たちと

相対するのだった。

「フォトンランサー！」

「フォトンランサー」

まず、攻撃を仕掛けたのはフェイトだった。

一番先にはなったフォトンランサーに、偽フェイトもフォトンランサーを放ち、相殺する。

「はあっ！！」

相殺されたと知るや、今度はバルディッシュをサイズフォームにして偽フェイトに斬りかかる。

無論、偽フェイトもバルディッシュをサイズフォームにしてこの攻撃を防ぐ。

「火招符」

そしてその後ろから、偽龍清が火球をフェイト目掛けて飛ばしてくる。

「水式、水流符！」

だがそれを、龍清が水式の符を投げて発生させた水の壁で防ぐ。

「お前の相手はこっちだろ！」

そしてそう叫ぶや、破山剣を持って偽龍清に斬りかかる。

これを偽龍清は、懐から符を取り出して地面に貼る。

すると、地面から壁が現れ、龍清の攻撃を防ぐ。

「むう、見た目とか武器だけならまだしも、人の使う術までそっくりコピーしてるなんて、何かいらつくなあ」

目の前にいる自分の偽者の挙動を見て、龍清はつまらなさそうに呟く。

実際、偽者が使ってる陰陽術は、幼い頃から苦勞と努力を重ねて手にしてきたものだ。

それを、ロストロギアの力によるものとはいえ、あっさり相手に使われているとあっては、龍清じゃなくとも面白くはないだろう。

「龍清」

とここで、偽者と近接戦を演じてたフェイトも、様子を見る為に一旦離れ、龍清と合流する。

「大丈夫？」

「ええ、何とか。それにしても、人が苦勞して身につけた術をああも簡単に使われるって、こんなに気分が悪いものなんですね」

「あはは。私も対峙して少しビックリしてるよ。私ってこんなに強かったんだなあって」

率直に今自分が思ってる事をお互い口にする龍清とフェイト。

これまで数度の攻撃で解った事は、目の前の自分たちは容姿だけでなく、武器、術、それらを使用する際の癖などまで全てをコピーしている。

唯一の相違点は、全ての動作等が鏡に映ったように逆である事である。

実際、偽者のフェイトも龍清も、バルディッシュと破山剣を持っている手がオリジナルと逆向きである。

「それでどうしましょう？ このままだときりがありませんけど」

「そうだね。でも、どうすれば……」

とは言え、お互い互角であれば、このままでは勝てないまでも負ける事はないだろう。

しかし、未来永劫この場に留まるわけにもいかないため、如何にかしてこの分身を倒さねばならない。

「せめて、如何にかして動きを止められないかな？ そうすれば、その際にロストロギアを封印できるのに」

「うーん……あつ」

するとここで、龍清が何か思いついたような顔をする。

「あの、フェイトさん」

「ん？ 何？」

「少しだけ、気をひきつけてもらえませんか？」

耳打ちするようにそう呟く龍清。

向こうも特に動き出す気配がなかったため、フェイトもその呟きに耳を貸す。

「どうにかできるの？」

「ええ、まあ。ただ術式の準備に少し時間が掛かるんです。その間、どうにかしてあの偽者たちの注意を僕から逸らしてくれませんか？」

龍清は既に懐に手を忍ばせてあるが、準備に掛かるのか、不安そうな顔をしている。

「……解った。やってみる」

「すみません。なるべく早く終わらせます」

しかし、フェイトは龍清を信じ、囿役を買って出る。

それを聞くと、龍清はフェイトの後ろに隠れ、術式の準備に取り掛かる。

(とりあえず、あの二人を龍清から引き離そう)

大して広くはない部屋だが、それでも、少しでも引き離しておけば、それだけ龍清の身に降りかかる危険は少なくなる。

そしてフェイトは何より、この二対の偽者を自分にひきつける方法について、既に予測が立っていた。

「はあっ！」

暫く様子見をした後、構えを取った刹那、ソニックムーブで一気にロストロギアの鏡に近づく。

しかしそれは、二体の偽者によって阻まれてしまうが、これはフェイトにとって予想の範疇だった。

(やっぱり、この二人はこのロストロギアを守るうとする。まあ、このロストロギアが生み出したんだから、当然といえば当然かな)

この二人が現れた時、最初は何もしなかったのに、フェイトがロストロギアに近づこうとした瞬間、攻撃を仕掛けてきた。

それはおそらく、ロストロギアの防衛機構か何かが働いて、近づくフェイトを敵と認識して、攻撃を仕掛けたのだろう。

先ほどの行動から、そう察するのは決して難くなかった。

(でも、これは逆に利用できる。この偽者たちはロストロギアを守る事を優先する。その習性を逆に利用すれば……)

そう考えていた刹那、後ろから偽龍清が斬りかかる。

それをバルディッシュで防ぐが、その後ろから偽フェイトが斬りかかる。

「っ！！」

身を屈めてその攻撃をかわすと、偽龍清の剣を弾き、体勢を立て直して偽フェイトに攻撃を加える。

無論、再びその攻撃は止められるが、直後、フェイトの周りにスフィアが現れる。

「フォトンランサー、ファイア！」

そして現れたスフィアから、フォトンランサーが放たれる。

無論、よく出来ているとは言え、至近距離からの攻撃に対応できる筈もなく、偽フェイトはフォトンランサーをもろに食らって吹っ飛ばされる。

「ハーケンセイバー！」

そして吹っ飛ばされた偽フェイトに向かって、ハーケンセイバーを放つ。

「金固符」

しかしそれは、二人の間に割って入り、金式の術を放った偽龍清によって防がれる。

それを防いだ後、偽龍清は破山剣で斬りかかる。

「フォトンランサー、ファイア」

そしてその後ろから、偽フェイトによってフォトンランサーが放たれる。

偽龍清の攻撃を防ぎつつ、そのフォトンランサーをプロテクションによって防ぐ。

(龍清、早くして。流石に私でも、何処まで持つかわからない……)

偽者の自分、そして偽者の龍清の攻撃に、流石に自分でも何処まで持つか不安がよぎる。

その後も二人の攻撃をフェイトは度々危機に見舞われるが、何とか捌き、攻撃をかわす。

(フェイトさん！ 準備できました！)

とここで、龍清から準備完了の念話が届く。

(これから術式を発動しますので、もう少し頑張ってください！)

(解った！ 任せて……!!)

準備が終わり、これから発動するとの事で、引き続き発動までの時間を稼ごうとするが、その刹那、フェイトは顔を青ざめた。

何故なら偽者の自分が、砲撃の準備をしようとしていたのだ。しかも、その砲撃を放とうとしている軸線上には、龍清が印を組んでいたのだ。

「トライデント、スマッシャー」

そして準備の終わった偽フェイトが、砲撃を龍清に向けて放つ。

「龍清！」

フェイトが叫ぶが、その直後……龍清のいた地点で大爆発が起こる。

それが、砲撃が直撃したせいだと理解するのに、時間は要らなか

った。

「龍……清……」

フェイトは完全に、最悪の事態を想定してしまっていた。

あの砲撃を受けて、無事でいられることなど無きに等しい。既にその考えが、フェイトの頭の大半を占めていた。しかし、暫くすると、変化が訪れた。

(これは……霧?)

突如、部屋が霧の様な物に包まれ始めたのだ。

程なくしてそれは、フェイトも、偽者たちも包み込んでしまった。

視界が利かなくなった偽フェイトと偽龍清は、暫くあたりを見渡していたが、突如、二人の目の前に影が現れる。

すると防衛機構によるものなのか、偽者二人はその影に襲い掛かる。

しかしその直後、偽者二人は長方形の金色の箱のようなものに閉じ込められた。

「えっ? あれは一体?」

霧で視界が利かないフェイトだったが、その金色に光る箱のようなものが見え、それに疑問の声をあげる。

「……捕まえたよ」

とそこに、別の声が聞えてきた。

そしてその声を聞いたフェイトは、すぐさまその声の正体が解った。

「その声は……龍清！ 龍清なの！！」

「はい、何とか間に合いました」

その声の主とは、やられたと思われ龍清だった。

「無事だったんだね！」

「ええ、何とか間に合いました。術式発動の直後に水流符で防御したんです。危機一髪でしたよ」

話によれば、準備が完了した術式を発動させた直後、流水符を発動させて、間一髪砲撃を防いだという。

しかし、かなり僅差だったらしく、後一步遅ければ、間違いなく砲撃の餌食になってたところだろう。

「それよりフェイトさん。早く封印を！」

「う、うん！ でも、この霧で視界が……」

そう、ロストログアを封印しようにも、この霧が視界を遮っており、封印を行えないのだ。

「大丈夫です。案内役がいますから」

「案内役？」

程なくして、龍清の言う案内役が現れる。

「キュー、キュキュー」

「春青!？」

それは龍清のユニゾンデバイス、春青だった。

「えっ? って事……龍清、今融合ユニゾンしてないの!？」

そう、春青がここにいると言う事は、今の龍清はユニゾンしていない、いわば丸腰の状態と言う事だ。

「大丈夫です。それより春青、フェイトさんを!」

「キュー! キュー!」

「あつ、春青!」

突如飛んで行く春青を見失わないようにフェイトも追いかける。程なくすると、そこには光り輝くロストロギアが置かれてる石段の前に着く。

「これなら……よし!」

そう言うと、バルディッシュをロストロギアに当てる。程なくして、ロストロギアは光をなくした。封印がなされた証拠だった。

そして暫くすると、霧も晴れた。

そして再び部屋内を見渡すと、そこには龍清と、結界内に閉じ込められた偽者二人が見えた。

だが、見えて程なくして、偽者は消えてしまった。

「どうやら、間に合ったみたいですね」

「龍清、大丈夫……って、怪我してる!!」

フェイトは改めて龍清様子を見ると、制服の左腕の部分が焼け焦げており、そこから血が滴っていたのだ。

「あっ、本当だ。術式を維持するのに集中して気が付きませんでした。やっぱり水式じゃ駄目だったか」

「と、とにかく！ ロストロギアも確保したし、早く戻って治療しないと!!」

こうして、ロストロギアを確保する事に成功した二人は、遺跡を後にして、次元航行艦へと戻って行ったのだった。

「っ……思ったより酷かったなあ」

ここは次元航行艦の中、現在龍清とフェイトはその中にある休憩所の椅子に腰掛けていた。

彼の左腕には包帯が巻かれており、医師によれば、一週間は動かさないようにと言われ渡されたのだった。

「御免ね、油断してた。まさか狭い部屋の中で砲撃を使うなんて思っただけでなくて」

「いえ、僕も少し高を括ってましたから、ある意味自業自得ですよ」
フェイトにしても龍清にしても、まさかあの狭い室内で強力な砲撃魔法を撃つてくるとは思っていなかった。

下手に使用すれば、部屋全体が崩落して、自分たちは愚か、偽者やロストロギアも巻き込む危険があったのだから、そんな事はしないだろうと、可能性は低いだらうと思ってたのだ。

「キュウ……」

「大丈夫だよ、春青」

心配そうに傷を見つめる春青に、龍清は頭を撫でながら呟く。

「とりあえず、一週間は動かさなければ治るそうですし、心配要りませんよ」

「うん。でも、本当に御免ね」

心配要らないとは言いが、やはり気にしてるのか、フェイトは再び龍清に謝る。

「でも、龍清がいてくれたお陰で本当に助かったよ。あのロストロギア、きつと私一人だったら、もつと苦戦してたと思う」

「そんな事ありませんよ。でも、お役に立てたのなら嬉しいです」

フェイトにお礼を言われて、龍清も嬉しくなる。

「さてと、ティアナさんの方は大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だよ。ティアナはこういう捜査結構慣れてるし」

「そうですか、まあでも……」

途中で言葉を区切ると、龍清は苦笑しながら言った。

「きつとその犯人、自分のやった事を凄く後悔するだろうなあ」

「そうだと良いんだけど、連続殺人の犯人って、中には自分の快樂の為に事を起すような人もいるから……」

「いや、きつと後悔しますよ。だって、西麗がいるんですから……」

「????」

龍清のこの言葉を、この時のフェイトは理解できなかったが、六課に戻ってきた時、この言葉の意味を知る事になるのだった。

第二十話 執務官のお手伝い（ロストロギア搜索）（後書き）

やっぱり最後が何かグダグダになったと思う。

しかし、この更新を持って、実家での執筆は終わりです。

月曜に帰るので、そこから我が城での執筆が再び始まります！

よりよい作品に仕上がるよう努力しますので、どうか、これからもよろしくお願いします。

今回はティアナの担当です。

相棒は勿論西麗、そして龍清の言葉の意味とは……

第二十一話 執務官のお手伝い (殺人犯捜査) (前書き)

今回はもう一つ、ティアナと西麗の話です。

ただ、やはり後半が滅茶苦茶になってしまった気がしますので、どうかご容赦ください。

第二十一話 執務官のお手伝い（殺人犯捜査）

「ここが、噂の現場？」

「噂のじゃないけど、まあそうね」

龍清とフェイトがロストログアの搜索を行っていた頃、地上本部からの依頼を受けたティアナと、その手伝いの為について来た西麗は、クラナガンのある場所にやってきた。

目的は、近頃クラナガンを騒がせている、連続殺人事件の捜査であつた。

「じゃあ、事件についてももう一度確認しておくわよ」

「ほーい」

到着すると、ティアナはクロスミラーージュを使って、今回の事件の捜査資料を確認する。

事の発端は10日前、一人の女性の遺体が発見された。死因は刃物で心臓を一突きされたこと、ほぼ即死の状態で、凶器などは見つかっていない。

事件場所は人通りが少なかつたため目撃者などがなく、唯一の手がかりとしては、現場にかすかに魔力反応が残つてたことから、犯人が魔導師であることだけだつた。

その後も、同様の手口で一人、そして先日、二人も犠牲者が出たのだ。

「その話を聞く限りだと、刃物の形をした魔力弾で心臓部分にぐさりっつて感じかな？」

「まだそうとは言い切れないわよ？ 心臓に一突きなんて、包丁でもできるからね」

「まあ、それもそうだけど」

違法魔導師の仕業とあって、西麗の考えもありと言えはありだが、実際にそうだと決めつける事は出来ない。

今現在の情報では、考えれば他にも方法はいくらかもある。

一口に刃物と言っても、それが魔力弾だという確証につながるものは無く、魔力反応だって、それが攻撃に使われたという確証がないのだから。

「とにかく、まずは現場を当たってみましょう。何か見落としてるかもしれないし」

「現場検証は捜査の基本ってね。了解！」

彼女たちが現場に来たのも、何か見落として、物証が残ってるかもしれないという推測からであった。

ティアナの掛け声に、西麗も了承。そのまま二手に分かれて、現場の周辺の捜索に掛かるのだった。

「っで、何も見つからなかったと」

「うん……」

一時間後、二人は途中経過の為に集まったが、結果は芳しいものではなかった。

事件はあると通りとその周辺で起こっているのだが、共通として、昼は人通りが平均的に少なく、夜は全く人が無くなるのだ。

つまり、証言らしい証言が取れないのだ。

「まあ、こつちも特に物証とか証言が取れたわけじゃないから、別に責めるつもりは無いけど」

「って言うかよく考えてみたらさ、事件発生から十日も経ってるわけでしょ？ もう犯人、物証になりそうなもの持ち去って、ここから逃げたって可能性は？」

「それは考えられるけど。それだったら、不審人物がうるついでいたって証言があってもいいはずじゃない？ 人通りが少ないからって、誰も通らないわけじゃないんだし」

西麗の言葉に、ティアナはそう反論する。

確かに人通りが少ないツと言つても、人っ子一人通らない場所などそうはない。

まして夜はともかく、昼はそれなりに人が通ることもあるので、もし犯人らしき人物がうろついていたりするのなら、証言がないなどと言つ事は無い。

無論、相手が自分の姿を不可視にする魔法を使つてたりすれば、話は別なのだが。

「殺された被害者たちに、共通点とか無いの？」

「今調べてもらつてる最中。でも、犯人が誰なのか目星もついてないし、何が解るか……」

「はあ、完全に手詰まりかあ……」

そう言つて西麗は深いため息をつく。

「あたし、ちょっと担当の所にこれまでの捜査経過とか聞いてくるから。悪いけど、ここ任せていい？」

「はいはい。どうせ手詰まりだしね。ここからなるべく動かないから、なるべく早くねー」

「ええ。早めに戻るから、それまでお願いね」

そう言つてティアナは車に乗り込み、そのまま現場を去つていった。

「はあ……任せるって言われても、物証も証言もなし、それでここに残つてどうしろと？」

あからさまな愚痴を言う西麗だが、引き受けた以上、ほっぴり出すこともできない。

それに、クラナガンの地理もよく知らないわけなので、その場で待ってるしかない。

「ニヤウ……?」

「あつ、白秋。って言うかあんた、今の今まで寝ていたの!？」

「ニヤ?」

愚痴を零しながら待っていると、西麗の腕の中で眠っていた白秋が目を覚ます。

白秋は現場まで移動中、ティアナの車の中で眠りについた。

そして、今の今まで西麗の腕の中で眠っていたのだ。

「はあ、あんたって時々、大物なのかそうじゃないのか、解らなくなることもあるのよねー」

「ニヤ?」

西麗のぼやきに、白秋は首を傾げる。

物事に動じないのは大物の証ともいえるが、主人である自分がせつせと聞き込みとかをしているのに、その腕の中でのんびり寝ていたのだ、本当にそうなのか解らない。

尤も、ユニゾンデバイスとは言え、東西南北を守護する四神の一派なのだから、大物と言えば大物なのだろうが。

「……ニヤッ！」

すると突然、白秋は西麗の腕の中から飛び出し、近くの路地裏に消えてしまう。

「あっ！ ちょっと白秋！！」

そして西麗も、その後を追って路地裏に入る。

「ニヤッ！ ニヤッ！」

そこには、ごみ箱に爪を立てて昇ろうとしてる白秋の姿があった。

「ちょっと白秋、何やってるの！ そんなことしたら……」

西麗が駆け寄るが、時すでに遅し。

「ニヤッ！？？」

突如、ごみ箱は白秋の体重によって、そのまま音を立てて倒れてしまう。

「あちゃ〜……」

西麗は顔に手を当てながら、「やっちゃった」的な顔をして呆れた。

「白秋、大丈夫？」

「ニヤッ」

西麗が呼ぶと、倒れたごみ箱から、白秋がひょっこりと姿を現した。

けがの類はなさそうだが、ごみをかぶってる様子だった。

「全くもう、あーあーこんなに散らかして……」

西麗は白秋についてるごみを払うと、そのまま抱きかかえ、散乱したごみを立て直したごみ箱に入れていく。

その最中、一つの袋に目が行く。

「何この袋？ まあいいや、取り敢えずこれもゴミ箱に……」

入れようとしたが、その手が突如として止まる。

何故なら、その袋は一部が破けていたのだが、その破けたところから。

「……………えっ？」

何か、赤いものがこびりついた刃物のようなものが顔を出していたのだ。

（えっ？ 何コレ？ 赤いのがついてるし、刃物みただけど……これってもしかして……）

嫌な予感が浮かんたその時。

「あれっ？ 西麗、どこ行ったのー！」

通りの方から、西麗を呼ぶ声が聞こえた。

恐らく、ティアナが戻って来たのだろう。

「ティ……ティアナ！ ティアナ……！！！」

そして、その声を確認した刹那、大慌てで西麗はその袋と白秋を持って駆け出すのだった。

所変わって、ここは殺人事件の担当をしている陸士部隊の隊舎。

「結果、出たわよ」

「どうだった？」

「ビンゴだったわ。あのナイフにこびりついてた血痕と、被害者の血液が一致したそうよ」

西麗がごみ箱から発見した袋の中身は、血の付いたナイフだったわけだが、解析してみたところ、被害者の血液と、ナイフについていた血痕が一致したのだ。

白秋の毛並みをブラシで整えながら、西麗はティアナから報告を

受けた。

ちなみに、先ほどのごみ箱のごみが付着したために、白秋は西麗と一度風呂に入っており、西麗の髪と白秋の毛は湿り気を帯びていた。

「それと、こつちで捜査経過とか聞いて、気になったことがあるの」「気になった事？」

西麗が首を傾げると、ティアナはクロスミラージュにその情報を映し出す。

「今までの犠牲者は四人、そのうち三人は、外見上のある部分が共通してるの」

「ある部分？」

「髪よ」

そう言って映し出されたディスプレイには、今までの犠牲者の顔が映し出された。

「最初の被害者を含めた三人は、皆髪の色が金髪だった。だけど、三人目とほぼ同時に見つかった四人目の女性は髪を染めていたけど、色は赤、地毛の色も茶髪だったのよ」

「それが何なの？」

「あくまで推測なんだけど、犯人は、金髪の女性を狙ってるんじゃないかしら？」

ティアナの立てた推測はこうだ。

・犯人の狙いは金髪の女性（理由は今もって不明）

・何らかの方法であの場所、或いはその周辺で待ち伏せし、目標を発見すると、バインドを掛け逃げられないようにする。

・その後、ナイフで心臓を刺し、殺害。

・人通りが少ない事と、その時誰にも見られなかったことから、日を置き、同様の犯行を実行。

・しかし、三人目を殺害したことさい、四人目の被害者にその現場を見られてしまう。

・そこで口封じのため、被害者を殺害、遺体を別の場所に移動させた。

と、大筋でまとめればこのようになる。

「まあ、あくまで推測だから、確証はないけどね」

そう、これはあくまで推測であり、可能性の一つでしかないのだ。確たる物証や証言が無い以上、これに縛られるのは危険である。

「でもま、確かめる方法はある」

「そつなの？」

「ええ。その為に、ちょっと手伝ってもらえないかしら？」

確認の意味を込めてなのか、ティアナは西麗にそう聞いてくる。

「勿論！ って言うか、そのために来てたわけだからね」

「そうだったわね。じゃあ、ちょっと耳を貸して」

そして、西麗に耳打ちをし、その確かめる方法と言つのを伝える。

その夜、事件のあった通りの近くを、一人の金髪の女性が歩いていた。

すでにあたりは暗く、周りには人の気配などなかった。

その女性は、家路を急ぐように速足で歩いていた。

だが突然……

「！！？」

突如、女性の体を光る輪のようなものが拘束する。

「……見つけたぞ」

そしてその目の前から、一人の男が姿を現す。
その手には、包丁が握られていた。

「お前が……お前がいけないんだ……」

何かをぶつぶつ呟きながら、男は包丁をちらつかせる。

「飛んで火にいる夏の虫とは、正に、このことだ!!」

そう言って男は、ナイフを片手に女性に近づく。

しかし……

「それは、こっちの台詞よ!」

突如、バインドされてる女性が、回し蹴りをかましてきた。
男は突然の事に反応できず、そのまま回し蹴りを喰らって吹っ飛ばされる。

「な！ 何！？」

突然の事に男は驚くが、その隙に、オレンジ色のバインドを体に掛けられる。

「ふう、本当に引つかかるとはね。流石、執務官殿と言っべきかしら？」

「いや、あたしもまさかこんな簡単に引つかかるとは、正直思ってたかった」

金髪の女性が冗談混じりで言うが、奥の方から現れたオレンジの髪の女性は、それに呆れ気味に言う。

そのオレンジの髪の女性は言わずもがな、ティアナである。

「ところでさあ、何時までこうしてるの？」

「あっ、そうね。ご苦労様」

そう言って指を鳴らすと、金髪の女性はその姿を真の姿に変える。

金髪は真っ黒な黒髪になり、顔も元気っぽい顔になる。
その正体は、西麗だった。

「な、何が、どうなって？」

「あんたはまんまと罠にはまった、そう言う事よ」

西麗の言葉に、後ろのティアナ、そしていつの間にかそばにいた白秋が頷くのだった。

「さてと、陸士部隊にはさっき連絡したから、もうそろそろ来ると思うけど。その前に、何で金髪の女性を狙っていたのか、動機を聞かせてもらおうかしら？」

「くっ……」

ティアナの言葉に、男は苦虫を噛み潰したような顔をする。

「全部、全部あいつが悪いんだ！」

「あいつ？」

その後、程なくして男は動機を話す。

男は、もとは管理局の武装局員だったという。
魔力は少なく、唯の武装局員だったが、彼は一人の女性のために

一生懸命働いた。

管理局で稼いだ給料は、生活費を除けば、その大半が女性に貢がれた。

だが、ある日任務で負傷し、職務への復帰ができなくなったという。

するとその女性は、忽然と姿を消してしまったというのだ。

それを男は、「自分に魅力が無くなったから」だと思い込み、行き場のない憤りを、今回の犯罪でぶつけていたのだという。

「……呆れた」

「そんな動機で……」

「そんな動機！ 貴様たちにとってはそうだろうが、俺にとっては大事に問題なんだ！！」

動機を聞き、そのくだらなさに呆れる西麗とティアナに、男が逆上する。

「そうだ、すべてはあいつらが悪いんだ！ 金髪の女全てが悪いんだ！ だから……」

男が力説するように叫ぶが、その途中……

「ふん！」

「ぐはっ……」

「えっ!？」

突如、西麗が男を殴る。

平手打ちではなく、グーで殴ったのである。

「な、何をする!？」

「座る」

「はっ?」

「良いからさっさと座る!」

怒ろうとする男に、西麗はものすごい剣幕で座るよう強制する。

その様子に思わず、男は座り込むが……

「正座!」

男は胡坐をかいて座ったため、西麗は正座をするように命じる。

その剣幕に気圧され、男は反射的に正座になる。

「あのさあ、もうちょっと冷静に考えればさ、何でいなくなったのかとかわかるでしょ? なのは何それ? 自分に振り向きもしなくなっただけからってやつあたり? すっごい神経疑うんだけど?」

「なっ!」

「それにさ、唯のやつあたりならまだいいけど、あんた人殺してるのよ? それについては何の罪悪感もないわけ?」

「そ、それは……」

「大体アンタさあ。まず自分が見向きされるような人物だっと思ってるわけ？ 鏡見て自分の胸に手を当てて聞いてみなさいよ！ そそも……」

二時間後……

「それにあんたは……」

「あ、あのさあ、西麗」

「何？」

「そろそろやめてあげない？ そいつ、顔真つ青よ？」

ティアナに言われ、男の方を振り向くと、男の顔は顔面蒼白となっており、視線の焦点が合っていないようだった。

二時間にわたる正座と、西麗の説教のダブルパンチを受けて、心身ともに疲弊してしまったようだった。

「うーん……まだ言い足りないけど。ま、ティアナに免じて、この位で勘弁してあげる。あつ、白秋預かってくれてありがとう」

説教タイムを終了すると、西麗はいつの間にか眠ってしまったている白秋をティアナから受け取る。

彼女の足元でいつの間にか丸くなって眠っていた白秋を、ティアナが抱きかかえていたのだ。

その後、男はやってきた陸士部隊に引き渡され、この事件は終わりを告げたのだった。

「あんたつてさ、よくあんなに説教できたわね」

その後、隊舎へ戻る途中、ティアナは運転しながら西麗にそう呟くのだった。

「ああ、あれ？　だつてさ、むかつくじゃん。あんな理由で人を殺すなんてさ」

「まあ、気持ちは解るけどね。でもあそこまでされてるのを見てたら、あいつに同情しちゃうわよ」

先ほどの様子を見て、ティアナは思わず苦笑する。

引き渡す際、男は二時間にわたる正座によって足が痺れてしまい、まともに歩くことすらできなかった。

しかも、焦点がまともにならなかつたために、その足取りは足の痺れと相まってかなり覚束なかったため、陸士の魔導師たちに後を任せたのだった。

「まあ、昔は私もされてたからね」

「誰に？」

「うちの爺様。かなり厳しい頑固者でね、あたしがやんちゃして悪戯したりするたびに、良く正座させられて、長いと一日近く説教されたわ」

「あー、その影響ね」

「まあね」

そんな他愛のない会話をしながら、二人は六課の隊舎へ戻っていたのだった。

オマケ

六課帰還後……

「と、いう訳なんですよ」

「あはは……龍清の言ってたことって、こういう事だったんだね」

のちにこの話を聞いたフェイトは、龍清の言葉の意味を理解するとともに苦笑しつつ、その犯人に同情するのだった。

第二十一話 執務官のお手伝い (殺人犯捜査) (後書き)

後半やっぱり滅茶苦茶になってしまった感が。

なんでだろう？ 一応頭で考えてる通りには書けてると思うんですが。

まあ、今回はご都合主義が入ってるかもしれないんですが、ご容赦ください。

次回はちょっとブレイク話、原作キャラを出そうかと考えてますが、来週にするべきか、その次にするべきか。

誰が出るかはお楽しみですが、皆さん、どちらがいいでしょうか？

第二十二話 龍虎のクラナガン見学 (前篇) (前書き)

今回は一寸ほのぼの系の話。

特に事件らしい事件は、この段階では出しません。

第二十二話 龍虎のクラナガン見学（前篇）

あれから三日、特に変わった様子も報告もなく、六課前線メンバーは、今日も今日とて、なのはの教導を受けていた。

ただし、前回の任務で負傷した龍清は、まだその傷が癒えていないため外され、ヴィータ監修の元、陰陽術の練習をしていた。

本人は左手さえ動かさなければ大丈夫だと、参加を志願していたが、なのはとティアナから（凄い威圧付で）、「無理はしないように」と言い渡されたため、仕方なく、皆から少し離れた位置で行っている。

「しっかし、お前のその術、見れば見るほど不思議だよな」

龍清の練習を見守りながら、ヴィータはそう呟いた。

「お前のその、陰陽術だっけ？ パツと見見た感じ、補助系の魔導師のそれと似てるんだよなあ」

「そうなんですか？」

術の練習を一通り終えた龍清がそう聞くと、ヴィータは頷く。

「あたしもなのはと同じで教導官やってるから、いろんなタイプのやつを見てるからな。お前の術は見た感じ、キャロやシヤマルと同じ何だ。あの二人も、回復、防御、拘束と、補助系の魔法を一通り使えるしな」

ヴィータの言うとおり、龍清の陰陽術五つのうち四つは、攻撃と補助どちらに分けるかと言われれば、後者の方に当たる。

身体強化の木式、味方の援護主体の補助及び防御の土式、防御と拘束の金式、回復主体の水式。

どれも自身、並びに味方を間接的に助ける補助的な要素のものだ。

「だけど、補助系魔導師はそれ系のを複数扱える半面、攻撃には向かないのが大体セオリー何だよ。キャロとか見てれば解るだろ？ あいつは攻撃をフリードや味方に依存してるからな」

「ああ、見てれば大体、そんな感じでしたね」

「でもお前は、どれもこなせる上に戦闘も可能、オールラウンダーって言うても、限度ってもんがあるだろ」

「まあ、僕爺様や父上から「器用貧乏」って言われてましたし。それに戦闘ができるのは、この子のおかげですから」

「キュー」

ヴィータの言うとおり、攻撃系の魔導師でも、防御やバインドを習っている場合は多いが、回復や補助などについては、正直「持つてて損はない」程度で、その手の分野の魔導師に比べれば、明らかに応急処置程度にしかならなかったりする。

だが龍清は、ユニゾンによる補正があるとはいえ、味方の補助も、戦闘もこなせるという、非常に優秀すぎる戦闘体系なのだ。

「それに、僕は基礎しか教えてもらってませんし、僕の使う術が全

てって訳じゃないんですけどね」

「そうなのか？」

「ええ。使う人によっていろいろバリエーションとか違ってきますから」

龍清が言うには、一言に陰陽術と言っても、彼が使うのは誰もが覚える初歩の物らしく、熟練した陰陽師は、さらにそれをさまざまに術に昇華するのだという。

「ふうん。でもま、戦闘面はまだ粗いな。補助だってあんま使ってる気しないし」

「これでも西麗と二人だけの時は頻繁に土式を使っていたりしたんですけどね、ここに来てからあまり使う機会が減りましたね」

「まあ、味方のサポートにはキャラがいるからな」

そんな感じに、ヴィータのアドバイスを受けながら練習をしていると……

《囑託魔導師、東郷龍清様、秋西麗様、至急部隊長室にお越しください》

突如、龍清と西麗はアナウンスに呼ばれた。

「えっ？ 僕？」

「どうしたんだろうな？ でもま、丁度休憩にしようと思ってたと

ころだし、さっさと行って来いよ」

「あっ、はい」

「龍清！ こっちも休憩に入ったから、早く行きましょう！」

「うん！ 今行く！」

丁度向こうも休憩に入ったらしく、西麗に呼ばれ、龍清は左腕を動かさないように押さえながら、その後を追っていくのだった。

「「えっ？ お休み？」」

「せや」

部隊長室に入った二人がはやてから言い渡されたのは、フォワード陣全員に休暇を与えるというものだった。

「この前、フェイトちゃんとティアナの仕事のお礼として、地上本部と本局から、一日だけ休暇をもらったんや。調査も有力な手がかりがあれば以来なくて行き詰ってしもてるし、気分転換には、丁度

「いいやる」

「そりゃあ、このところ訓練漬けで、ありがたいつて言えばありがたいけど……」

「僕はこの通り怪我をしますから、碌に参加できてないですけど……」

無論、休暇と聞いて、二人も嬉しいことは嬉しい。

西麗は訓練漬けの毎日に辟易していたし、龍清も左腕の怪我が直ってないので、まともに参加できないことに気を病んでいた。

気分転換という意味では、はやての言った通り、この度の休暇は正にうってつけだった。

「それにクロノ君から、『二人とフォワードは、休めるときに休ませておかないと、はやて達みたいに働きづめになるから』って言葉れとんねん。失礼やね、まるで人をワーカーホリックみたいに」

そんなことを言われたという事もあって、少し不機嫌そうにはやてはそう言う。

それを見て、二人は苦笑するしかなかった。

実際、二人は仕事の様子を見る限り、なのはやフェイト、スバル達はかなり働いてるように見える。

フェイトやティアナは、執務官と言う立場上、忙しいのは納得できる。

なのもも教導官、はやてに至っては部隊長という立場もあって、本局や地上本部に足を延ばすことが多々あり、かなり忙しそうだった。

しかし、それでも仕事を続けようとするあたり、確かにワーカーホリック気味だと、二人は思っていた。

だからはやての不機嫌そうな態度にも、苦笑するしかなかったのだ。

「まあ、それはさておき、今日はフォワード陣の訓練はお休みや、何かあったら現場に急行して貰うけど、それまでは自由に過ごしてええから、スバルとティアナに頼んで、クラナガンでも見学に行つてきいよ」

「ま、それも良いかもね。あたしも興味あるし」

「ああ、龍清君は解つと思うけど……」

「左腕は動かさないように、ですよ。この前も少し動かして、大変な目に遭いましたし」

この大変な事と言うのは、怪我した翌日、その訓練で無理やり左腕を動かして、傷口が開いたので、シャマルに大目玉をくらったという話なのだ。

無論、始めは参加を止められていたのだが、左腕を極力動かさないことを条件に参加させてもらったのだが、模擬戦で、思わず攻撃を左腕でガードしてしまったのだ。

その結果、傷口が開き、医務室でシャマルに散々絞られたのだ。

普段、シャマルには優しいイメージを持っていただけに、その時はかなり驚愕したという。

「ま、解っているならよし。スバル達にも伝えておいてなあ」

「はい」

こうして、フォワードと龍清達の休暇が決まったのだった。

「さてと、三人とも、準備は良い？」

「オツケー！」

「はい」

「良いわよ」

部隊長室から出た後、フォワード陣に休暇の事を話すと、当然一向は大喜び、早速何するかについて話し合ったりした。

訓練が嫌いなわけではないが、流石にいつまでも同じでは、西麗同様、飽き飽きするものなのだ。

それで、西麗がスバルとティアナに、クラナガンに連れてってほ

しいと言ったら、二つ返事で二人は承諾し、今は準備を終え、出発しようとしていた。

「でもさ、龍清は良いの？」

「何がですか？」

ティアナの車に乗り込んだ後、助手席のスバルが聞いてきた。

「無理に付き合わなくても良いんだよ？ 怪我也治ってないし、隊舎で待ってても」

「いえ、僕も興味ありますし。それに、西麗を一人にすると、町で迷子になりそうな気がして」

「なっ!?! 余計なお世話よ!?!」

「ああ、成程。はしゃぎ過ぎて、いつの間にか迷子になってたってオチね」

「あるある。あたしも小さいころあったし」

「うう……」

龍清自身、クラナガンに多少なりとも興味があったので、そう返事する。

尤も、最後の一言が、西麗にとっては余計だったのだが、ティアナとスバルからも肯定され、黙りこくってしまう。

「でも、エリオとキャロも二人つきりで大丈夫かなあ？ いくら管

理局員って言っても」

「大丈夫よ、あの二人も子供じゃないんだし。それに、二人っきりの時間を邪魔するのは野暮ってものよ」

「……成程。『馬に蹴られて何とやら』って奴ね」

「そう言う事」

不安げに言う龍清に言ったティアナの言葉の意味を納得した西麗。しかし、二人の言葉の趣旨を理解できず、龍清とスバルは頭に疑問符を浮かべるのだった。

「さ、そんなことより、行くわよ！」

そう言って会話もそこそこに、ティアナは車のアクセルを踏む。そして四人は、クラナガンへと向かっていくのだった。

「ふう、今日の仕事終わりや」

一方その頃、部隊長室で今日の仕事を終えたはやてはそう呟く。

「お疲れ様ですー」

とそこへ、リインがお盆を持ってやってきた。

追記しておく、今の彼女は普段の10？前後の身長ではなく、大体キヤロと同じくらいか、少し小さい位である。

劳いの言葉を掛けると、お盆に載っていた急須で、湯飲みにお茶を入れる。

「いやあ、もう慣れたもんやけど、やっぱりこつも仕事が多いとかなわんわ」

「はやてちゃんにもお休みだったら良かったのにですー」

背伸びしながら言うはやてに、リインがそう言う。

この部隊で一番仕事量が多いのは、何を隠そう彼女だ。
部長として、さまざまな書類の整理や捜査の進展状況等の報告、捜査に必要なものの申請など、部隊運用に関して彼女は頑張っている。

その為に、その苦労も、隊の中では一番だろうし、そんな彼女にも休暇があったとしても、それは当然だと思う。

「ありがとうな。でもええんよ、前線で頑張ってるスバル達に比べたら、私の苦労なんて小っちゃいもんや」

しかし彼女は、そんな苦労をおくびにも出さずそう言う。

実際、体を張って頑張ってくれてる彼女たちに比べれば、デスクワークと指揮主体の自分の苦勞など、遠く及ばないと考えている。

リインの言葉は嬉しい限りだが、やはり部隊長としての職務をこなす方が、今の彼女にとっては重要だったりするのだ。

「せやけど、なのはちゃんとフェイトちゃんには、もうちょっと休暇を与えられるようにせえへんとな。あの性格やし、あの子の事もあるしな」

「ですねー」

淹れてもらった茶を啜りながら、そんな歓談をしていると、突如、彼女のデスクに通信が入る。

「ん？ 誰からやる？」

不思議に思い、通信を入れる。

「よっ。頑張ってるか？」

「ナカジマ三佐！」

通信を入れてきたのは、陸士108部隊の部隊長、スバルの父、ゲンヤ・ナカジマだった。

「まあ、ぼちぼちと言ったところですよ。でも今のところ、これと言った進展はないですね」

「そっか、まあ元々厄介そうな案件だからな、そっ気に病むなよ」

「ありがとうございます」

無論、六課としても調査などは進めているが、やはりあの一件以来、これと言った動きがないため、操作はあまり進展してるとは言えなかった。

そのことで少し顔を暗くするが、ゲンヤに励まされ、再び元の顔になる。

「それで、今日はどういったご用件で？」

「おおそっだ、あいつらの転向が思ったより早く準備が終わってな、明日にはそっちに送れそっだ」

「そっですか。あの子たちが来てくれるんやったら百人力や！ほんまにありがとうございます」

「良いつて良いつて。お前さんも大変だろうっからな、これ位は当然だ」

そっ言つて手を振りながら言うゲンヤ。

そしてその後も、二人は雑談を交え、今後の事を話し合うのだった。

「ここが……首都クラナガン」

「ほえ〜〜」

一方、クラナガンに到着した二人は、開いた口が塞がらなかった。

「すごい！ めっちゃ近未来的！！」

「こういうのって、映画の世界だけだと思ってた」

西麗は目を輝かせて興奮し、龍清はその街並みを見て驚きを隠せない。

「さてと、二人とも、どこか行きたいところとかある？」

二人の反応にスバルと共に苦笑しながらも、ティアナは二人につぶやく。

「いえ、僕は特に」

「あたしもかな？ もうこの光景だけで満足しそう」

「キュー」

「ニヤウ……」

だが、二人も来るのは初めてであったし、特に行きたい場所や、興味のある場所などは特にならない。

二人の返事を復唱するかのようになり、春青と白秋も鳴く。

「なので、お二人にお任せします」

「そう言われてもね。急に決まったことだから、私たちも特に予定ないし」

「私も特にないな」

とは言え、二人に伝えられるまで休暇の事など聞いてなかったの
で、二人も特に予定は無し。

「とりあえずさあ、何か食べながら考えない？」

「あなたはアイスが食べたいだけでしょ？」

「あはは、ばれた？」

スバルの提案の意図を簡単に見抜いたティアナに、スバルはあははと笑う。

そんなやり取りを見て、龍清と西麗は、流石親友と納得していた。

「でもま、他にやることもないしね。二人の観光も兼ねてるわけだし、そうしましょう」

「そうですね」

「あたしもそれでいいよ」

「じゃあさ！　いつそのまま食べ歩きとか」

「調子に乗るな」

己の欲望を満たそうとするスバルに、ティアナの鉄拳制裁が下る。涙目で蹲るスバルをよそに、ティアナは龍清と西麗を連れて歩きはじめる。

そして痛みが引いた後、スバルはその後を追っていくのだった。

第二十二話 龍虎のクラナガン見学 (前篇) (後書き)

うーん、特に目新しい人物を出すことはなかった。

次の後編では、新たな原作キャラを出します。

誰を出すかは、まあ、何となくですが解ると思います。ヒントは、はやてとゲンヤさんの会話です。

そして後編では、新たな動きが、起ころつとします。

次の話が終わったら、物語は長編に入ります。

みなさん、これからも当小説を、よろしくお願いします。

第二十三話 龍虎のクラナガン見学 (後篇) (前書き)

今回は原作キャラがまたまた新たに登場。

そして、物語はさらなる展開に！

第二十三話 龍虎のクラナガン見学 (後篇)

ここは、クラナガンのとある洋服店。

その店の試着室の前で、一人の少年が立っていた。

「キヤロ。まだ？」

「もうちょっと」

それは、龍清達と同じく、休暇をもらったエリオだった。

お休みという事で、どう過ごそうか考えていたら、キヤロに「シヨッピングに付き合っしてほしい」と言われたのだ。

自身も特に予定はなく、彼女の頼みなら断る道理もないため、二つ返事で了承し、今はここで、選んだ服を試着中のキヤロを待っているという事なのだ。

「他にも立ち寄るところがあるんでしょ？ 早くしないと時間が無くなるよ？」

「うん。でももうちょっと待って」

急かしてるわけではないが、彼の言うとおり、休暇は今日の日だけだ。

今後、このような機会がいつになるか解らないので、出来るだけ時間を無駄にしたいは無いのだ。

それに、試着室の前で待たされて、かれこれ20分ぐらいになる。周りの視線とかかなり気になっているのだ。

「早くしてほしいよ……ね、フリード」

「クキユ〜」

何やってるんだ？ って言う視線が非常に気になり、早くしてほしいという思いを呟きながら、抱いているフリードの頭を撫でていると……

「お待たせー」

という声が聞こえると、試着室のカーテンが開かれ、ピンクのワンピースに白いジャケットを着たキャラが立っていた。

「どうかな？」

「え？ えつと……良いと思うよ？」

「むう……」

服の感想を言われ、取り敢えず当たり障りなく、素直に感想を言うエリオだったが、答えを聞いた途端、キャラは不機嫌そうな顔になる。

「ど、どうしたの？」

ちゃんとほめた筈なのに、なぜ不機嫌そうなのか？

まったく理由が見当たらないエリオはキャラに問いかける。

「エリオ君。実はどうでもいいとか思ってる?」

「えっ!?!」

思わぬ答えを言われ、驚くエリオ。

「そ、そんなことないよ! どうしてそう思ったの?」

「だってさっきから同じような事しか言っていないんだもん」

「……あっ」

ここまで言われ、エリオは如何してキャラがそう言ったのか理解する。

今試着してる服以外にも、何度か別の服を試着しては感想をもらっていたのだが、その都度のエリオの感想は……

「良いよ」

「良いんじゃないかな?」

「うん、良いと思ひよっ」

と、このように、あまりにも味気ない感想を述べているのだ。

本人は素直に言ってるつもりなのだが、同じ様な感想を二度、三度と言われては、流石にキャラとしても「本当はどうでもいいんじゃないのか?」と思うのも、無理からぬことだろう。

「本当にそんなつもりはないんだよ? ただ……」

「ただ?」

「その……キャラは何着ても似合うなあって」

これも裏表のない、自身の思ったことをそのまま口にしたただけだ。しかし、こんなことを言われたキャラの反応は……

「も、もう……そんなこと言われたら、許すしかないよお…… / / / / /」

顔を少し赤らめながらそんなことを呟くのだった。

これがかつて、ある人物によって仕込まれたプラン通りに回るだけだった二人のデートだと、一体だれが想像できただろうか?

「ん……?」

とその時、二人のデバイス、ストラダーとケリュケイオンに通信が入る。

「通信？ 相手は……ティアナさん？」

「私はスバルさんからだよ」

何かあったのかと思い、二人は通信を開く。

《やつほー。エリオー、キャロー！》

《二人とも、今どこにいるの？》

「クラナガンの洋服店です。キャロに買い物につきあってほしいと頼まれて」

《そうなんだあ。二人とも、デートを邪魔しちゃって御免ねー》

「で、デート!?!?!?」

スバルのデート発言に、二人の顔は瞬間湯沸かし器のごとく真っ赤になる。

顔からどことなく湯気が立っているのは、気のせいではないだろう。

「くくくくくくく」

それでもって、言われた二人は顔を真っ赤にしたまま俯いてしまふ。

《こらスバル、あんまりからかうんじゃないの》

スバルをそう叱るティアナも、顔はどこかにやけていた。

「そ、それよりどうしたんですか。まさか、鬼門が現れたとか!」
話題を逸らすように、エリオはティアナとスバルに何があったのか聞く。

いや、前にも一度こんなことがあったので、話題逸らしの為ではないかもしれないが、少なくとも二人からしてみれば、必死に話題をそらすようしてるようにも見えなくもない。

ちなみにキャラの顔はまだ真つ赤だったが、しつかり話は聞いていた。

《ああ、ちがうの。別に緊急事態じゃないわ。いや、こつちからしてみれば、ある意味匹敵するんだけどね……》

「「?」?」

二人が何の事かと首を傾げていると、ティアナはこんなことを聞いてきた。

「二人とも、龍清と西麗を見なかった？」

「えっ? 龍清さんと西麗さんをですか? いえ、僕たちずっとここに居ましたし」

「はい、外の様子も見えてないので」

「そう」

「あの、二人がどうかしたんですか?」

龍清と西麗の居場所を尋ねられた二人は、店に入ってからずっと居たことを伝えると、何があったのかティアナに聞く。

そして返ってきた答えは、ある意味予想通りで、予想外だった。

「あの二人、迷子になったのよ」

「「……………は？」」

ティアナの答えに、二人はそう呟くしかなかった。

「ねえ」

「何？」

「どこ、どこ？」

「知らないよ……」

一方、件の迷子、龍清と西麗は、クラナガンの町の中に（当然と言えは当然だが）いた。

しかし、そこに本来一緒にいるはずのティアナとスバルの姿はない。

西麗の問いかけに、龍清もまたそう返すしかない。

そう、ティアナの言った通り、二人は「迷子」になってしまったのだ。

「どうしてこうなったんだっけ？」

「自分の行動を振り返ってみなよ」

龍清の冷静且つ冷ややかな返答に、二人は何故こうなったのかを
思い返す。

アイスを食べながら、クラナガンをティアナ達と一緒に練り歩い
ていた。

ある一つの店が目に入り、面白そうと思った西麗がその店に向か
う。龍清もそれについていく。

見終わった後、美味しそうな食べ物の店を発見、そちらに向かう。
その後も似たような店を練り歩く。迷子にならないよう龍清もそ
れについていく。

あれ？ ーじどじ？ 今ーじ。

「……………」

「解った？」

つまるところ、あちこちに西麗が寄り道したために迷子になり、

迷っては不味いと思った龍清は、そのまま巻き添えをくらったのだ。

「りゅ、龍清！ あんた自慢の陰陽術で場所とか解らないの！！」

「陰陽師はコンパスじゃないよ！ 解るわけないじゃんか！！」

迷子になってることに気付き、パニック気味に言う西麗に、龍清もそう反論する。

まさか年にして高校生ぐらいになって、未知の世界の首都で迷子になるなど、一体だれが想像できただろうか？

「ああもう！ 携帯なんて持ってないから二人に連絡できないし、如何すりゃいいのよ！！」

「こんなことなら、はやてさん辺りに地図でも貰ってくればよかったなあ……」

今さら言っても後の祭りなのだが。

「はあ……どうすんのよ？」

「どうするって……二人が見つけるまで待つしかないんじゃないかあ？」

「そんなことしてたら日が暮れるわよ！！」

見知らぬ街で迷子になってしまった二人。

この町に詳しいスバルとティアナが見つけるまで、大人しく待っているのが一番建設的なのだが、ここがどこかわからない以上、そんなことしては時間がかかりすぎると、少しイライラしていた

西麗は怒鳴る。

「じゃあどうするの？ こっちから捜すの？」

「そうよ。取り敢えず、大通りみたいなところに出ましょ。そうすれば、あの二人も見つかりやすいと思うし」

「うーん……それしかないかな？」

確かにここで待ってても、いつ来るかわからない。

其れならこちらから解るであろう場所に移動し、見つけてもらう確率を上げようと、二人は移動を始めようとすると……

「何だよ？ お前ら」

「何なんスか？」

突如声が聞こえてきたので、二人が声の下方向を振り向くと、赤髪の女性二人を、数人の男達を取り囲んでいたのだ。

「君達可愛いじゃん。何、迷子？」

「だったら俺達と一緒に来ない？ いいとこ連れてってやるからよ」

「おお。まさかあたしの魅力に引き寄せられてきたっスか？」

「ウエンディ、馬鹿なことやってんじゃねえ。こんな奴らほつてさっさと行こうぜ！」

そう言って短髪の方が、いかにもノリの軽そうな方の腕を掴んで立ち去ろうとする。

しかし、男達はそれを許さない。

「おいおい、そう邪見にするなよ。悪いようにはしねえからよ」

「うっせーな。あたし等は待たせてる奴がいるんだ。邪魔すんなよ」

「もしかして男？ そんな奴より俺達と一緒にの方が楽しいって」

「ああもう、しっつけえ！」

今尚付き纏ってくる男達に、短髪の方が癩癩を切らしかけたその時。

別の腕が、女性の腕をつかんでる男の腕をさらに掴む。

「その辺にしておいたら、その人達嫌がってるでしょ」

その腕の正体は西麗だった。

「ああ？ なんだおめえ！」

「うーん……正義の味方？」

「いや、その例えはどうかと……」

西麗の答えに、後ろから来た龍清が呆れ気味に返す。

確かに言い方としてはあながち間違いでもないだろうが、もう少しストレートに言っても良いと思う。

「はあ？ 正義の味方あ？ あはは！ こいつは傑作だ!!」

男が笑い始めたのを気に、他の男達も笑いはじめる。

「って、そんなことはどうでもいいの！ 大の男が、寄ってたかって女の子を取り囲んで、恥ずかしくないわけ？」

そう、西麗がここに来たのも、つまるところそう言う理由なのだ。

軟派なのははたから見ても明らかだったのだが、複数で取り囲んでるのが頂けなかったのだ。

「へ！ ガキ二人がでしゃばってんじゃねえ！ ヒーローごっこならよそでやってな!!」

「まあ待てよ。見てみるとこいつらも中々可愛いじゃねえか。どうだい？ この二人と一緒に前さん達も……」

と、男の一人が西麗の肩に手を伸ばした、その瞬間……

「いてててて!?!?!?」

西麗は流れるような動きで、男の腕を捻^{ひね}上げる。

「悪いけど、こっちもあんた達に構ってるほど暇じゃないの！」

「なっ、てめえ!!」

すると男達も敵意を持ち、一人が西麗に襲い掛かるが。

「ニヤア！」

「なっ、何だこのくそ猫!!」

「ニヤー!!」

「いててて!!」

西麗に襲い掛かってきた男の顔面に張り付いた白秋が、その自慢の爪で顔を引っ掻く。

「何やってるんだ！ たかがガキ一人に……おわっ!? な、何だ!?」

其れとは別に、残り三人の男達も西麗に襲い掛かるうとするが、突如として、地面から足が離れ、ふわふわと浮き始める。

「誰も一人でやるなんて、一言も言っていないでしょ？」

西麗がそう言う隣には、右腕を突き出す龍清がいた。

「お、お前の仕業か！ おい！ さっさと下ろしやがれ！」

「もう勘弁したのなら、下ろしてあげますけど?」

「ふざけんな!」

「そうですか、それじゃあ……」

そう言って龍清が腕を動かすと、男たちはそのまま、まるで無重力空間を漂っているかのように、中をふわふわ浮きながら揺さぶられる。

「うわあ! や、やめる!」

「目が回る……」

「うっ、気持ち悪くなってきた……」

男たちがグロッキーになり始めたところに、龍清はゆっくり男達を地上に下ろす。

そして地上に降りた男たちは、ふらふらになって足取りも覚束なかった。

「まだやる?」

「やりますか?」

「キュ……」

「フカー……ッ!」

余裕に言う西麗と、再び腕を突き出す龍清。
春青も男達を睨みつけ、白秋に至っては毛を逆立てて威嚇している。

「くそっ！ この借りは必ず返すからな！ 覚えてやがれよー！」

そう言って男たちは退散していくのだった。

「うわぁ、いかにも三流の悪役が言う台詞だね」

「よく言っわよ。借りたもの返したことないくせに」

「キユウ」

「ニヤ」

そう言いながら、二人は男達に囲まれていた女性に近づく。

「大丈夫ですか？」

「お、おお」

「大丈夫っス」

龍清の問いかけに、二人は無事だという。

「ま、あんな奴ら。あたし一人でもどうにかできたけどな」

「へー、そうなんだ」

「それはそれは、お邪魔しちゃったかな？」

すると、赤髪の短髪の方がそう言ってきたが、特に二人も気にする様子なく呟く。

「もう、ダメっスよノーヴェ。助けてもらったのにそんなこと言っちゃあ。あっ、どうもありがとうっス」

「いはいえそんな、当然のことはしただけですし」

「困ったときはお互い様ってね」

一方それに対し、髪を後頭部で纏めている方が短髪の方を抑えつつ、二人にお礼を言う。

かなり対照的な二人だが、顔のつくりがどこか似ていることから、双子か姉妹であることは直ぐに察しがつく。

「あっ、自己紹介がまだでしたね。僕は東郷龍清と言います。この子は、春青」

「クキュー」

「あたしは秋西麗。こっちは白秋」

「ニヤッ」

二人と二匹が自己紹介をするが、それを聞いた途端。二人は何か考え込むような顔になる。

「東郷？ 秋？」

「ティアア」

「スバル、見つかった？」

「ううん、こっちは何も。そっちは？」

「こっちもよ。つたく、あの二人、一体何処に行ったのよ！」

一方、龍清と西麗を手分けして搜索していたティアナとスバルは、一度合流して結果を報告するも、成果はなかった。

二人はデバイスでお互いに通信しあいながら探していたが、いかんせん見当もつかず、ただがむしやらに探すしかなかったのだ。

「龍清がいるから、大丈夫だとは思うけど、こつちも当てがないところも探しようがないわよ」

「どうしよう。もたもたしてたら日が暮れるよ？」

「とりあえず、エリオやキャロからも結果を聞きたいし、一旦合流しましょう」

「オツケー！……ん？ あれは……」

通信の後、エリオとキャロも捜索に加わってくれたため、見つけたら連絡が入るようになっていた。

連絡がないという事は見つからないという事だろうが、それでも、一度経過を聞きたいと、二人と合流するため移動しようとしたとき、スバルが何か、正確には誰かを見つける。

それに気が付き、ティアナもその視線をたどってみると、そこには、藍色の髪にリボンをつけた、二人がよく知る人物が立っていた。

「「ギンガさん（ギン姉）！！」」

「えっ？ スバル！ ティアナ！」

それは、陸士108部隊に所属するスバルの姉、ギンガ・ナカジマだった。

「二人とも、どうしてここに？」

「今日、私たち、というより、フォワード陣全員で休暇をもらったんです。ところでギンガさん。どうしたんですか？」

ここにいる理由を教えた後、ティアナは、どうしてギンガがここにいるのか理由を聞く。

先ほど遠目で見た限りでは、誰かを捜しているようだった。

「あつ、そうだ。二人とも、ノーヴェとウエンディ見なかった？」

「えっ？ 見てないけど、二人も来てるの？」

「うん。実は私たちも、お父さんから「たまには羽を伸ばして来い」

って言われてね。本当はチンクとデイエチも一緒に来るはずだったんだけど、「後詰が残ってるからいい」って」

「ふむふむ」

「それで三人で来たんだけど、途中でウェンデイが「気になるお店を見つけた」って言うから、途中から別行動になったの。ここで待ち合わせしてるんだけど、なかなか来なくて」

ギンガは何故自分たちがここにいるかを二人に話す。

陸士108部隊でも、ゲンヤから休暇をもらったギンガは、ノーヴェ、ウェンデイを伴ってクラナガンにやってきた。

その途中、ウェンデイがパンフレットを見ながら何か気になるお店を見つけたらしく、ノーヴェと一緒に別行動をとった。

だがそれ以降、全く連絡が来なくて困っているのだ。

「まさかあの二人も迷子になったんじゃないか」

「それはないわ。別に迷うような道でもなかったし、それに二人ともデバイス持ってるから、ね、ブリッツキヤリバー」

《yes》

ギンガは自分のデバイス「ブリッツキヤリバー」に確認を取ると、電子音と共に肯定と答える。

「じゃあ、何かあったのかな？」

「うーん……あつ、そう言えばスバル達はどうしたの？」

「あつ、実は……」

と、今度はギンガに聞かれ、スバルが龍清と西麗の事を話そうとしたとき……

「あつ、いたつス！」

「おつ、ラッキー。ティアナ達もいる！」

「良かったあ、一時はどうなるかと思ったよ」

「大げさだつつうの」

スバル達がいる方向とは反対の方向から、四人の声が聞こえる。

三人が振り向くと案の定、龍清、西麗、ノーヴェ、ウエンディの四人だった。

「二人とも、無事だったんだ！」

「ええ、まあ」

「全く！勝手に動き回らないでって言ったでしょ！」

「だはは、面目ない」

合流直後、龍清はスバルに無事を確認され、西麗はティアナからありがたい説教をもらっていた。

そして一方では、ギンガと合流したノーヴェ、ウエンディも……

「もう、二人とも。心配したんだからね」

「う、悪かったよ」

「御免なさいっス」

と、こちらもギンガからお説教をもらっていた。

「それにしても、どうしてあんた達、ノーヴェとウエンディと一緒にいたわけ？」

「えっと、ちょっと事情がありました」

龍清がここに至るまでの経過をティアナに話す。

まず迷った後、大通りに出て二人に見つけてもらおうとしようとしたところ、ナンパされているノーヴェとウエンディを見つけ、ナンパしていた男衆を撃退。

その後、二人がスバルの姉妹であることを聞き、また、ギンガと待ち合わせをしていることを聞かされ、それについていき、後はそのまま六課の隊舎に戻ろうと、二人と行動を共にすることになったのだ。

「成程ね……」

「迷子になったことについては、ご迷惑をおかけしました」

「良いよ良いよ、無事だったんだし。ね、ティア」

「ま、これに懲りたら、今度から迷子にならないようにね」

「そうね。もうごりごりよ」

今回の事で懲りた西麗も、そう呟くのだった。

「えっと、君達が龍清君と西麗ちゃんね？」

「えっ？ あっ、はい」

「貴女は？」

すると、ギンガから声を掛けられる。

「私は、陸士108部隊のギンガ・ナカジマ。スバルとこの子たちの姉よ」

「えっ！ スバルさんのお姉さん!？」

「まだいたの!？」

「あれっ？ 言ってなかったっけ？」

ギンガに自己紹介され、また二人は驚くが、その懸念事項について、スバルは首を傾げる。

「今日はノーヴェとウェンディが世話になったみたいで。二人に代わってお礼を言うわね。ありがとう」

「いえ、僕達もノーヴェとウェンディがいたから、スバルさん達に合流できたわけですし」

「それに、色々話してて楽しかったし」

お礼を言うギンガに、二人もそう返す。

ちなみに龍清が何故二人の事を呼び捨てにしているのかと言うと、初めはさん付けで敬語だったんだが、ノーヴェから「何かむずむずするからやめろ！」と言われ、ウェンディからも「堅苦しいからやめてほしいっす」と言われたため、結局呼び捨て&ため口で話すことになったのだ。

「さて、じゃあそろそろ戻るわよ。それと、エリオとキャラコも探してくれてたから、あったら二人にも謝っておきなさい」

「そうそう。せっかくのデートを邪魔したんだからね」

「えっ！ そうだったんですか!？」

「へえ、最近のちびっ子って進んでるのねえ」

と、エリオとキャラコが捜してくれていたことに、二人も驚く。尤も、二人とも着眼点は違っているが。

「じゃあ、私たちも帰りましょうか？」

「おお」

「はいっす」

と、ギンガ達も陸士108部隊に戻ることに。

「では、私たちはこれで」

「ギン姉！ ノーヴェ！ ウェンデイ！ またねー！」

「今日はありがとうー！」

「ばいばいー！」

と、六課陣はそのまま隊舎に戻っていくのだった。

余談だが、エリオとキャロに謝る際、西麗が「デートしてたんだって？ 邪魔しちゃってごめんね」と言ったので、二人の顔は本日二度目のトマト顔になったのだった。

「ギンガ・ナカジマ、及び、N2R。本日付で、特務六課に一時転属となります！」

昨日別れたギンガ、ノーヴェ、ウエンデイ、そして、銀髪に眼帯の身長が五人の中で小さい少女と、長い茶髪を後頭部で束ねた女性がかきれいに整列していた。

「……………」

「あははー……………」

そしてそんな中、昨日別れたばかりなのに、またこうしてであったことに、ノーヴェはどこか気恥ずかしそうに、ウエンデイは苦笑しているのだった。

「えっと……………なのはさん。どついう事ですか？」

昨日のやり取りから、少しぎこちないながらも、ティアナはなのはに聞く。

「うん。今回の事件はさすがに私たちだけじゃ荷が重いだろつなあ

つてことで、陸士108部隊のゲンヤ三佐が、こっちに派遣してくれただの」

「お父さんが？」

「うん。はやてちゃんも大助かりだつて、喜んでたよ」

なのはの言うとおり、今回は事件が事件なので、いくら一騎当千なのは達と言えど、かなり難しい話である。

その為、どうにか協力要員がほしかったはやての要請に、ゲンヤ三佐が承諾。クラナガンでも被害者が出てるといふ事で、地上本部も承諾し、ここにやってきたという事なのだ。

「そついう訳だから、皆、またよろしくね」

「あつ、はい！」

「うん！」

「勿論です！」

「よろしくお願いします！」

ティアナ、スバル、エリオ、キャロの順に、ギンガの返事を返す。

「さてと、じゃあ次はN2Rの皆に自己紹介してもらおうよ。龍清君と西麗ちゃんは知らないだろうからね」

「えっと……そうですね」

まさか昨日、ばったり自分とノーヴェ、ウエンディがばったり会った、なんて今さら言えるわけもないので、そのまま進めることに。スバルとティアナ、ノーヴェ、ウエンディ、そして龍清と西麗が、これに苦笑していたのは仕方ない事だ。

「ではまず私が。N2Rのリーダー、チンク・ナカジマだ」

「……ノーヴェ・ナカジマ」

「ディエチ・ナカジマです」

「ウエンディ・ナカジマっス！ よろしくっス！」

と、次々と自己紹介をするN2Rの面々。
しかしこれを見て、龍清と西麗は少し思ったところがある。

「スバルさんとギンガさんって、ご姉妹多いんですね」

「しかも全員似てないし」

「まあ、ナカジマ家は色々凄いからね」

そんなティアナの言葉に、すごく納得する二人だった。

「……駄目だ」

所変わって、ここはどこにあるのかもわからない、暗闇の世界。

その中心で、一人の男がぼそりと呟いた。

龍清と西麗を付け狙う、あの黒衣の男だ。

「これでは足りぬ、全然足りぬ。話にもならん」

男は黒い水晶のようなものを除きながらそう呟く。

その表情は、思い通りに事がうまくいってないという表情だった。

「あらあら、中々進んでいないようですね」

するとそこへ、男とは違う別の声が聞こえる。

その声が聞こえた方向に、男は振り向く。

「……お前たちか」

男が振り向いたその先には、三人の女性が立っていた。

「大変ですわね、あのお方復活が捗らないばかりか、四神の抹殺も未だにできてないのですから」

「大変大変」

「こんな調子で大丈夫なのか？」

「ふん。まだ奴らは力を使いこなしてはいない、抹殺するのは容易い。それに、まだ二匹しか復活していない。残りを抹殺すれば済むことだ。それより、貴様たちの方こそどうだ？」

三人の言葉を意にも介さぬように言いながら、男は三人の様子を逆に聞く。

「全然。あちこちで収集はしてきたけどこの程度。あまりにもレベルが低すぎますわ」

そう言っただけの一人の女性の手のひらには、球状に光る何かがあった。しかし、それでは非常に足りならしく、男もそれを見て落胆の表情をする。

「ぬう……その程度では、とてもあのお方の復活など不可能だ。いや、あのお方どころか、こちらの方々さえも」

そう言う男の周りには、四つの石像が置かれていた。其れにも何か秘密があるようだった。

「ふふ。ですが、面白いものを見つけました」

そう言っただけで女が取り出したのは、一つの宝珠のようなものだった。

「それは？」

「これは、人の心を吸収し、力に変えるという宝珠だそうです。正

しき力を求めるなら人を信じる心、破壊を求めるなら人々の恐怖の心を吸うというものです」

「ほう……」

それを聞いた男は興味を持つ。

「これを用いれば、あのお方の復活も可能かと」

「恐怖の心を吸収し、破壊の力をあのお方に注ぎ込む。成程、確かに利用できるな」

女性の話を聞き、男は不敵な笑みを浮かべる。

「では、さっそく恐怖の心の吸収を始めるか」

「それについてですが、私に考えがあります」

「考え？」

男の言葉に、女性も不敵な笑みを浮かべながら続きを言う。

「はい。うまくいけば、龍虎もまとめて始末できるかと」

「お前は食えんからな女狐……いいだろう。それでどうするのだ？」

「破壊の力を手に入れる、絶好の場所がございますれば、そちらで、恐怖の心を吸収して参るうかと」

「ほう、一体何処だ？」

男の問いかけに、女性は目の前に手をかざす。
するとその前に、ある町の風景が現れる。

女性が示した、破壊の力を得る絶好の場所。

それは……

「倭国日本、京の都にございます」

第二十三話 龍虎のクラナガン見学 (後篇) (後書き)

凄い、自分でもすごい書いたと思ってる。

詰め込み過ぎた感がありますが、楽しんでもらえると幸いです。

それと、敵に新キャラ登場。

まあ、特に捻りはありません。この三人、ある意味皆さんがよく知ってる連中だと思えます。今は明かしません。

次回から長編に入ろうと思います。

ギンガとN2Rを新たに加え、訓練と捜査に更に力が入る特務六課。

そんなある日、日本の古都京都で、謎の反応が検知されたという報告があり、一同は京都へ向かう事に。

果たしてその地で待っているものとは!?

これからも【リリカルなのは 四神伝奇】を、よろしく願います！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0262t/>

魔法少女リリカルなのは 四神伝奇

2011年10月9日22時06分発行